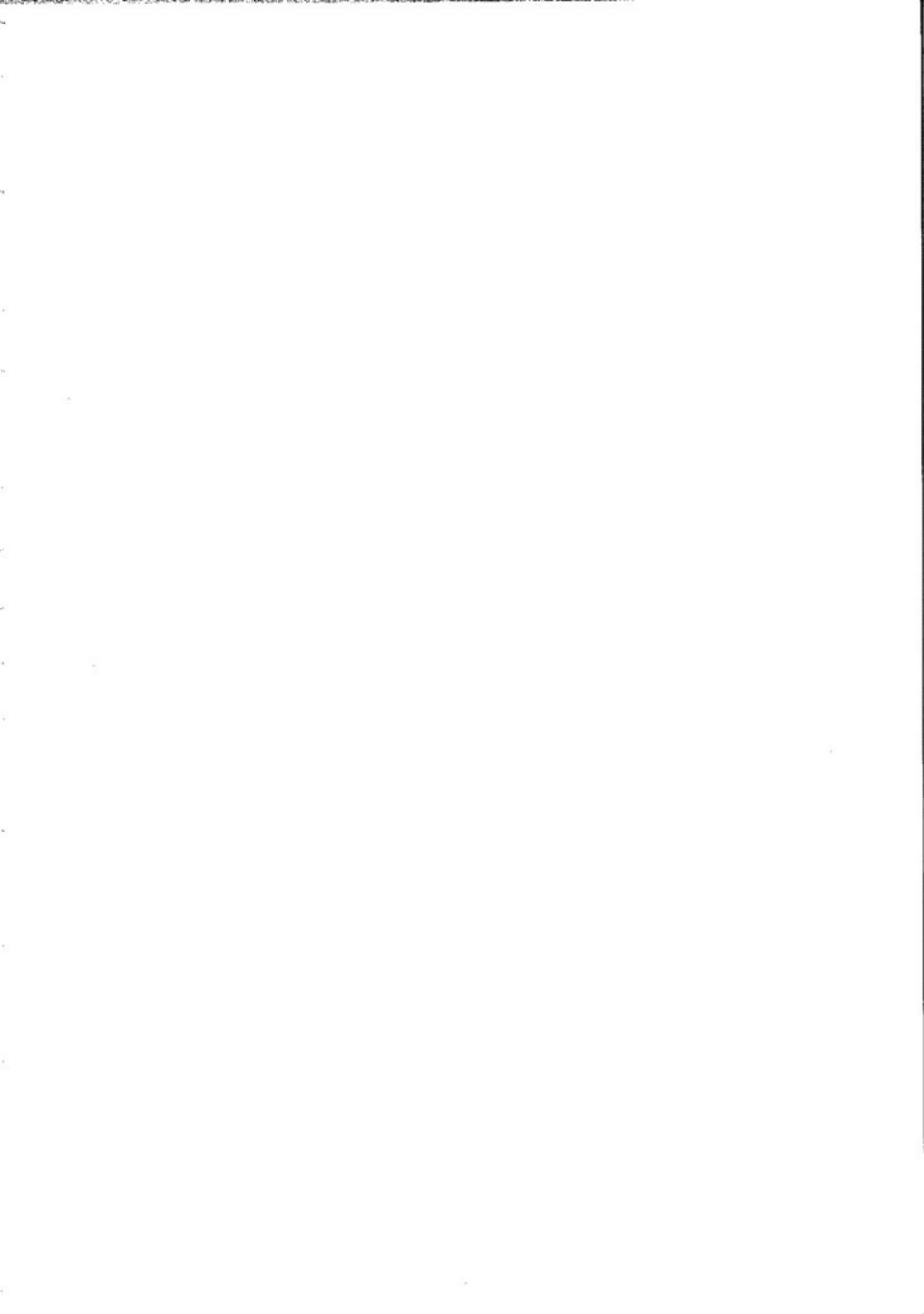


# 財團法人八尾市文化財調査研究会報告65

- I 跡部遺跡（第28次調査）
- II 跡部遺跡（第29次調査）
- III 跡部遺跡（第30次調査）
- IV 植松遺跡（第7次調査）
- V 太田遺跡（第3次調査）
- VI 亀井遺跡（第7次調査）
- VII 亀井遺跡（第8次調査）
- VIII 心合寺山古墳（第3次調査）
- IX 成法寺遺跡（第17次調査）
- X 太子堂遺跡（第9次調査）
- XI 田井中遺跡（第18次調査）
- XII 中田遺跡（第42次調査）
- XIII 中田遺跡（第43次調査）
- XIV 矢作遺跡（第5次調査）
- XV 矢作遺跡（第6次調査）
- XVI 山賀遺跡（第8次調査）
- XVII 山賀遺跡（第9次調査）

2000年



(財)八尾市文化財調査研究会報告 65 正誤表

頁	行	誤	正
84	22	(第3図-1~4)	(第2図-1~4)
131	柱	XIV 美作遺跡第5次調査	XIV 矢作遺跡第5次調査
135	柱	XIV 美作遺跡第5次調査	XIV 矢作遺跡第5次調査
137	柱	XIV 美作遺跡第5次調査	XIV 矢作遺跡第5次調査
139	柱	XIV 美作遺跡第5次調査	XIV 矢作遺跡第5次調査

# 財團法人八尾市文化財調査研究会報告65

- I 跡部遺跡（第28次調査）
- II 跡部遺跡（第29次調査）
- III 跡部遺跡（第30次調査）
- IV 植松遺跡（第7次調査）
- V 太田遺跡（第3次調査）
- VI 亀井遺跡（第7次調査）
- VII 亀井遺跡（第8次調査）
- VIII 心合寺山古墳（第3次調査）
- IX 成法寺遺跡（第17次調査）
- X 太子堂遺跡（第9次調査）
- XI 田井中遺跡（第18次調査）
- XII 中田遺跡（第42次調査）
- XIII 中田遺跡（第43次調査）
- XIV 矢作遺跡（第5次調査）
- XV 矢作遺跡（第6次調査）
- XVI 山賀遺跡（第8次調査）
- XVII 山賀遺跡（第9次調査）

2000年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、東は生駒山地、西は古大和川により形成された河内平野の中央部にあたります。

生駒山西麓部においては、その豊かな自然環境に恵まれ、旧石器時代以降の遺跡が数多く残されています。なかでも、古墳時代後期を中心に活発に築造された「高安古墳群」の存在は、この地域一帯で古墳文化が昇華した証を今に伝えています。

一方、平野部では、古大和川水系の豊かな水量と肥沃な土壌を背景に、水稻耕作受容期から活発な開発が行われているほか、瀬戸内海・河内湖・大和川水系を介して、国内はもとより大陸や朝鮮半島との国際交流の中継地としての役割を果してきました。

このように、本市には先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識しております。

今回、平成10年度に実施しました17件の発掘調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

# 序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成10年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成11年11月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・III・IV・V・VI・VIIが森本めぐみ、IIが岡田清一、III・IV・IX・XIが高萩千秋、V・VIが西村公助、VI・VII・Xが成海佳子、VIIIが坪田真一、VIIが岡田・樋口 薫で、全体の構成・編集は原田昌則が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第VI系）を示している。
1. 遺構は下記の略号で示した。

堅穴住居	- S I	掘立柱建物	- S B	井戸	- S E	土坑	- S K	溝	- S D
小穴	- S P	落ち込み	- S O	土器集積	- S W	自然河川	- N R		
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器	・	土師器	・	瓦器	・	埴輪	- 白	・	須恵器	・	陶磁器	- 黒	・	木製品	・	石製品	・	斜線
------	---	-----	---	----	---	----	-----	---	-----	---	-----	-----	---	-----	---	-----	---	----
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

# 目 次

## はしがき

## 序

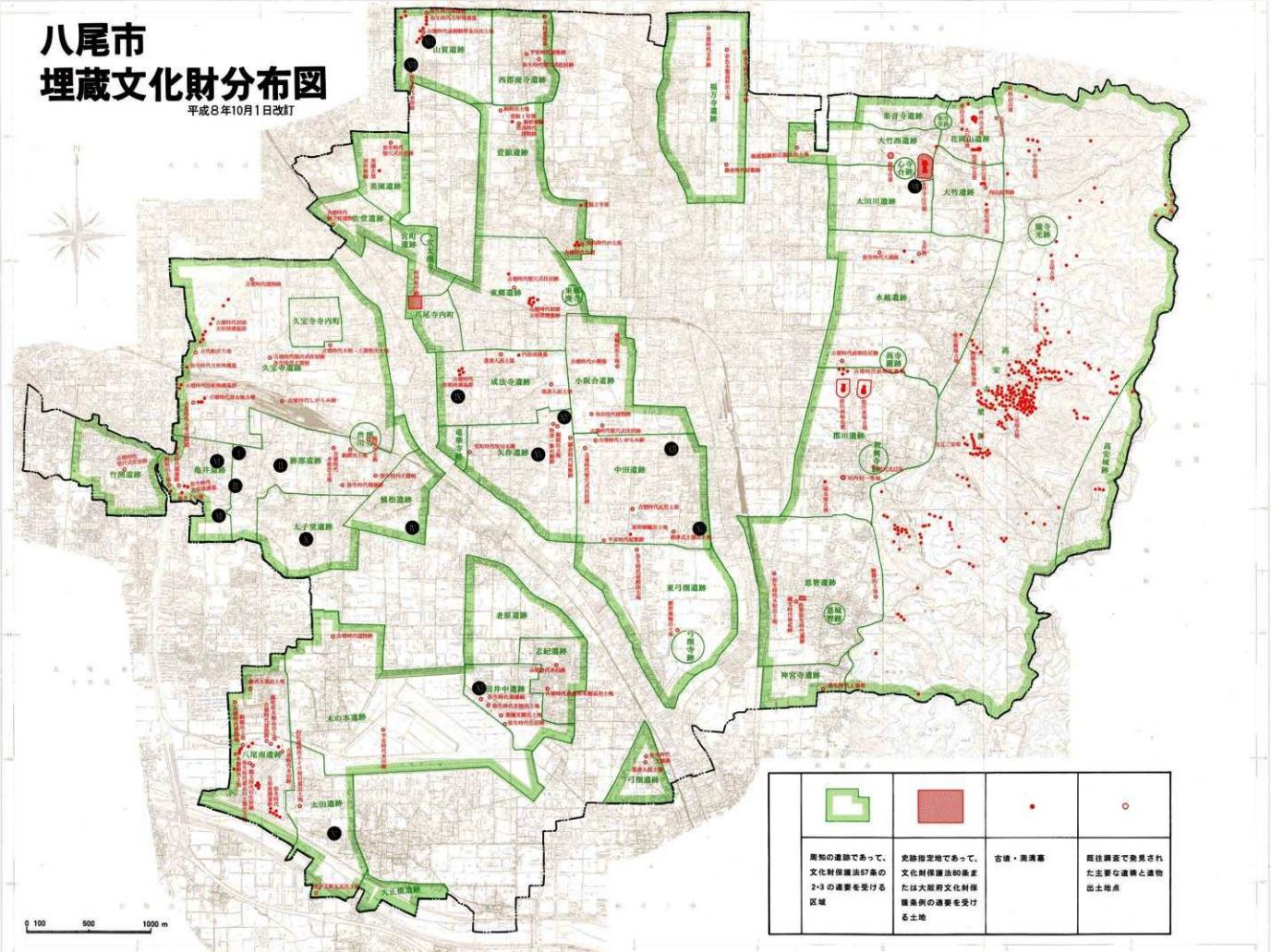
## 八尾市埋蔵文化財分布図

I	跡部遺跡	第28次調査 (A T98-28)	1
II	跡部遺跡	第29次調査 (A T98-29)	7
III	跡部遺跡	第30次調査 (A T98-30)	13
IV	植松遺跡	第7次調査 (UM98-7)	17
V	太田遺跡	第3次調査 (00T98-3)	27
VI	亀井遺跡	第7次調査 (KM98-7)	37
VII	亀井遺跡	第8次調査 (KM98-8)	41
VIII	心合寺山古墳	第3次調査 (S O98-3)	47

IX	成法寺遺跡 第17次調査 (S H98-17) .....	73
X	太子堂遺跡 第9次調査 (T S98-9) .....	83
XI	田井中遺跡 第18次調査 (T N98-18) .....	89
XII	中田遺跡 第42次調査 (N T98-42) .....	97
XIII	中田遺跡 第43次調査 (N T98-43) .....	123
XIV	矢作遺跡 第5次調査 (Y H98-5) .....	131
XV	矢作遺跡 第6次調査 (Y H98-6) .....	141
XVI	山賀遺跡 第8次調査 (YMG98-8) .....	151
XVII	山賀遺跡 第9次調査 (YMG98-9) .....	157
報告書抄録		

## 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



## 第二回

「我這人一輩子，從來沒有到過這裏，也沒有聽說過這事。」  
「你這人真可憐，」老頭子說，「你不知道這事？這事是誰說給你聽的？」

### I 跡部遺跡第28次調查 (A T 98-28)

## 大　回　文　本

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市跡部本町4丁目地内で実施した公共下水道工事（9-140工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第28次調査（AT98-28）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第195号 平成10年6月5日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年6月29日～7月6日（実働6日）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は19.2m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は以下の通りである。  
市森千恵子・中西明美・西岡千恵子・松本貴匡（五十音順）
1. 内業整理は現地調査終了後、随時実施し、平成11年8月に終了した。内業整理には上記のほか、岩沢玲子・中村百合が参加した。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめ	1
2. 調査概要	2
1) 調査方法と経過	2
2) 基本層序	2
3) 検出遺構と出土遺物	4
3.まとめ	5

## I 跡部遺跡第28次調査 (A T 98-28)

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置する遺跡で、現在の行政区画では跡部北の町1～3丁目、跡部本町1～4丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、跡部南の町1・2丁目、安中町3丁目の東西約1.4km、南北約0.7kmがその範囲と推定されている。地理的には、河内平野のほぼ中央部を流れる旧大和川の主流であった長瀬川左岸の自然堤防上に立地し、同地形上においては北に久宝寺遺跡、南に太子堂遺跡、東に植松遺跡、西に亀井遺跡が存在している。



第1図 調査地周辺図( $S = 1/5000$ )

跡部遺跡は昭和53年、旧国鉄職員竜華寮が春日町1丁目に建設された際に弥生時代前期の土器や鎌倉時代の瓦が出土したことから周知となった遺跡である。しかしながら当時の状況は明らかでなく、本格的に調査が行われたのは昭和56年の八尾市教育委員会による春日町1丁目のマンション建設時の事前調査からである。この調査では弥生時代前期・中期、古墳時代前期の遺物および方形周溝墓状遺構が確認された。その後、八尾市教育委員会、当調査研究会によって多くの調査が行われ、弥生時代前期～近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査区は跡部遺跡内の西北端に位置し、西は亀井遺跡、北は久宝寺遺跡と接している。跡部という地名の由来は物部氏の一族である阿刀氏が居住していた地であったからと伝えられ、また、当調査地南西約150mのところには式内社である跡部神社が所在している。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（9-140工区）に伴う調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で行った第28次調査にある。調査対象となった立坑の規模は東西幅約3.2m、南北幅約6.0m、面積は約19.2m<sup>2</sup>を測る。

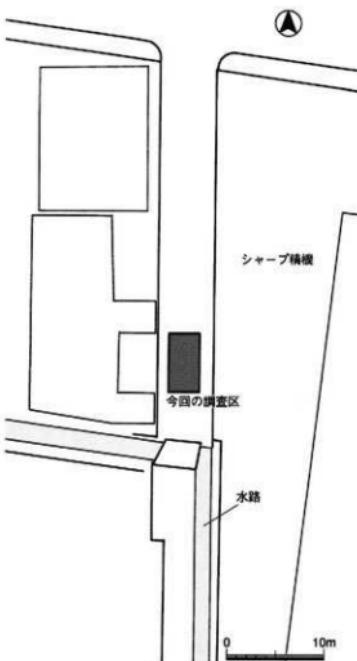
今回の調査区では比較的浅い位置から遺構が検出される可能性があったため、現地表面（T.P.+8.85m）から0.5mを機械掘削、以下を最終掘削深度であるT.P.+4.5mまで人力と機械を併用して調査する予定であった。しかし、覆工板設置のために必要な深さが現地表下0.8mということであったので、上部を慎重に機械で掘削し、以下を人力掘削と機械掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

### 2) 基本層序

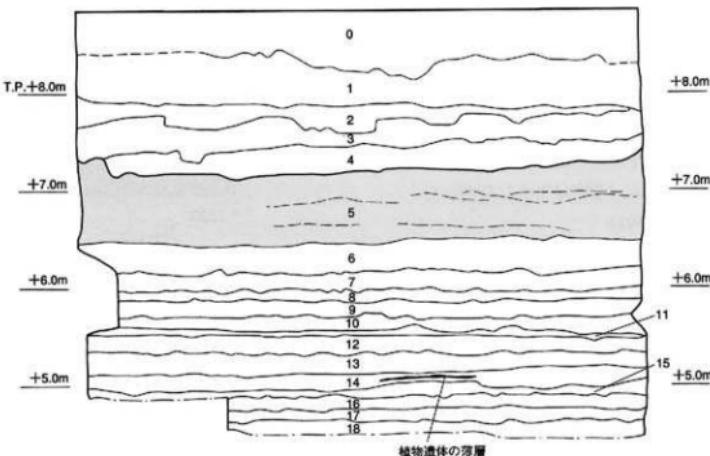
基本層序は第3図のとおりである。今回の調査区の東側、幅約1.4m、現地表下1.7mの範囲が、ガス管の埋設時に搅乱を受けていたため西壁で断面観察を行った。

第3層を掘削した段階で平面精査を行い、東側の搅乱部分で断面観察を行ったところ、第4層が北に向かって落ち込む遺構と考えられたので掘削したが、遺物の出土はみられなかった。平面調査の範囲が非常に狭かったので西壁断面で再度観察を行ったところ、北側に顕著な立ち上がりがみられず、層厚も0.3mと安定していたため基本層序の第4層とした。

第5層は微砂から小礫を含む河川の堆積層である。第5層に対応するとおもわれる砂層は周辺の調査でも確認されており（跡部第8次・第18次・亀井



第2図 調査区位置図 (S=1/500)



0層	盛土	11層	10GY5/1緑灰色 粘質シルト
1層	10GY4/1暗青灰色 細砂～小粒混粘質土 旧耕土	12層	10YR3/1黒褐色 シルト混粘土 炭酸鉄・植物遺体・炭化物少量含む
2層	10G6/1緑灰色 やや粘性をもつ細砂～小粒 10YR6/4にぶい黄褐色	13層	5GY5/1オリーブ灰色 シルト混粘土 炭酸鉄・炭化物（部分的に層状に堆積） を少量含む
3層	細砂～小粒を多く含む粘質土 鉄分・マンガン粒多く含む	14層	10Y4/1灰色 黏土 植物遺体多く含む（部分的に層状に堆積）
4層	2.5Y3/1黒褐色 細砂～粗砂をやや多く含む粘質土 管状孔少量含む 下部はほど粗砂を多く含む	15層	5 Y3/1オリーブ黑色 黏土 炭化物多く含む
5層	2.5Y7/1灰白色～10YR/6褐色 細砂～小粒 ミナガミられると	16層	2.5GY3/1暗オリーブ灰色 黏土 炭酸鉄極少量含む
6層	2.5GY3/1暗オリーブ灰色 粘土 炭酸鉄多く含む 炭化物ごく少量含む	17層	10GY2/1暗黒色 微砂を極少量含む粘土 暗オリーブ灰色粘土をブロック状に含む ビビアナイトを極少量含む
7層	5 Y3/2オリーブ黑色 粘土 炭酸鉄少量含む 植物遺体・炭化物多く含む	18層	10GY5/1緑灰色 シルトを含む粘質土
8層	10GY5/1緑灰色 黏土 炭化物を少量含む		
9層	5GY4/1暗オリーブ灰色 シルトをごく少量含む粘土 炭酸鉄・植物遺体少量含む		
10層	7.5GY4/1暗緑灰色 シルト混粘土 炭酸鉄・植物遺体極少量含む		

第3図 西壁土層断面図(S=1/50)

(89-284)・久宝寺(90-398)、古平野川がもたらした流水堆積層とおもわれる。第6層以下は安定した粘土の堆積で、各層に植物遺体や炭酸鉄粒、炭化物などが含まれている。

### 3) 検出構造と出土遺物

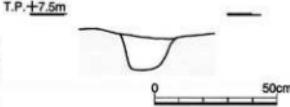
検出した造構は第5層上面(T.P. +7.4m)で検出した小穴(S P 101)と第6層上面(T.P. +6.5m前後)から検出した近世井戸(S E 101)のみである。

#### 小穴(S P 101)

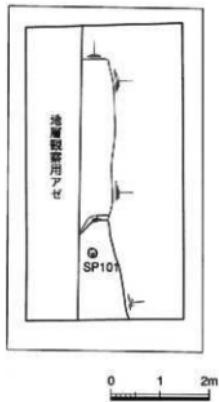
小穴は第5層上面(T.P. +7.4m)で検出した。径0.2mで深さは0.15mを測る。埋土は7.5GY3/1暗緑灰色微砂～中粒砂混粘質土である。遺物は出土しなかった。

#### 井戸(S E 101)

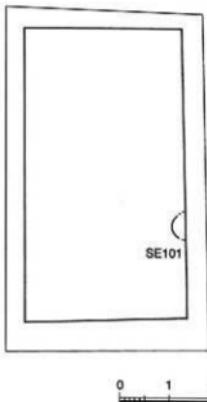
近世井戸は調査区東側の矢板に貼りついた形で検出されており、正確な規模等は不明である。井戸側に桶を用いた井戸で桶側は3段分遺存していた。上部から1段目は長さ約0.81m、幅約0.13mの板材で先端を削っている。2・3段目は長さ約0.94m、幅約0.17mで先端は削られておらず、板材のままであった。いずれの井戸側も厚さは約0.03mである。3段目の先端はおそらくT.P.+3.7m付近まで続いていたとおもわれる。検出したのは第6層上面としているが、この井戸の周辺は上部から第6層上面まで搅乱を受けていたため、本来の井戸の構築面は不明である。しかし、現地表下0.8mの盛土を掘削した段階で水が湧いていたため、ごく最近まで使用されていたものとおもわれる。また、調査終了時点でも微砂～細砂を吹き上げながら多量の水が湧いており、T.P.+4.5m以下にも湧水層が存在することは間違いない。



Ⓐ



Ⓑ

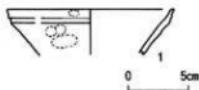


第4図 第5層上面(S = 1/100)

第5図 S E 101検出位置図(S = 1/100)

出土遺物は機械掘削時に出土したものがほとんどで近世の瓦、陶磁器類（すり鉢・碗等）が出土している。SE 101周辺からは一部を欠くがほぼ完形のいわゆる井戸瓦が2枚出土しており、桶の井戸側の上部施設として使用されたものであるとおもわれる。

その他、第5層から土師器の杯とおもわれる破片（1）が出土した。器壁は内外面とも磨耗気味であるが、外面は指オサエ痕がみられ凹凸が激しい。また、口縁部外面には一条の沈線がみられる。



第6図 第5層出土遺物実測図(S=1/4)・写真

### 3.まとめ

今回の調査では各層の時代を決め得る遺構・遺物の出土はほとんどみられず、唯一、第5層内から平安時代前期に比定できる土師器の杯が出土ただけである。この第5層(T.P.+7.3~6.5m)は大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター調査の『亀井』・『亀井北(その3)』で検出された古平野川に相当するとおもわれる。古平野川は弥生時代から奈良時代後期までの遺物が検出されており、当地周辺を、何度も流路を変化させながら流れていた大河川である。前述のとおり第5層に相当する砂層は周辺調査でも確認されており、今回の調査は小面積ではあるが、古平野川を復元するための資料のひとつとなるであろう。

### 註記

- 註1 高木真光 1983「第6章 跡部遺跡(春日町1丁目57番地)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会

### 参考文献

- ・高島徹・廣瀬雅信他 1983『亀井』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・竹原伸次・大楽康宏 1986『亀井北(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・岡田清一 1990「10. 亀井遺跡(89-284)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20 八尾市教育委員会
- ・諸 素 1991「21. 久宝寺遺跡(90-398)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会
- ・岡田清一 1993「II. 跡部遺跡第8次調査(A T92-8)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告39 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1997「VI. 跡部遺跡第18次調査(A T94-18)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会



第1面全景(南から)



南壁断面(T.P. +7.9~6.9m)



近世井戸検出状況(西から)



西壁断面(T.P. +6.1~5.0m)



最終状況(北から)



西壁断面(T.P. +5.0~4.5m)

## 目 錄

卷之二十一  
一、總論  
二、遺跡調查  
三、遺物

### II 跡部遺跡第29次調査 (A T 98-29)

## 考 文 本

卷之二十一  
一、總論  
二、遺跡調查  
三、遺物

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市跡部本町1丁目4番16~35で実施した公共下水道工事（9-135工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査で報告する跡部遺跡第29次調査（AT98-29）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋714-2号 平成10年3月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成10年7月29日~8月1日（実働4日）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約15m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては辻野優子・松本貴匡が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測—松本、図面トレース—岡田が行った。
1. 本文の執筆・編集は岡田が行った。

## 本 文 目 次

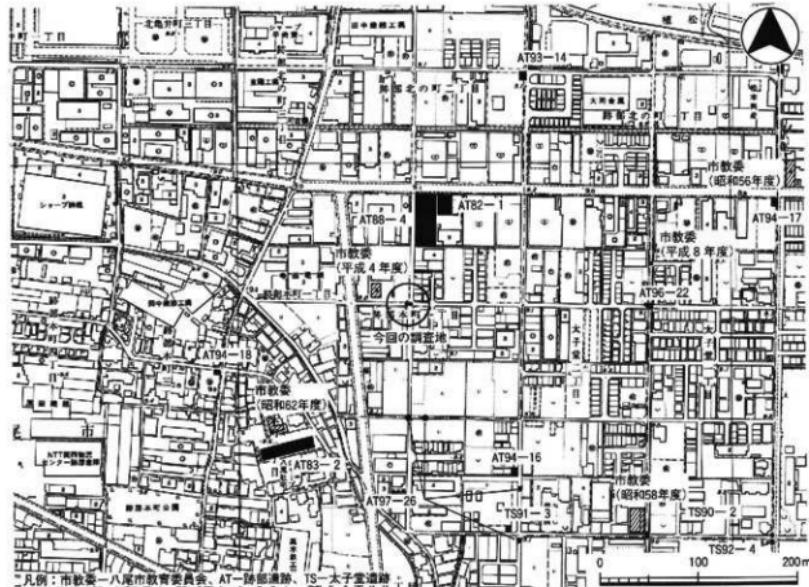
1.はじめに.....	7
2.調査概要.....	8
1) 調査の方法と経過.....	8
2) 基本層序.....	8
3) 検出遺構と出土遺物.....	9
3.まとめ.....	11

## II 跡部遺跡第29次調査(A T98-29)

### 1. はじめに

跡部遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の左岸にあたる沖積地上に位置する。遺跡の推定範囲は、東西約1.5km・南北0.5~0.7kmを測る東西方向に長い地域である。現在の行政区画上では八尾市の西部に位置し、跡部本町1~4丁目、跡部北の町1~3丁目、跡部南の町1・2丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、春日町1~4丁目に所在する。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡がある。また、1922年(大正11年)に本調査地からみて北東部にあたる渋川町と春日町にかかるJR関西線の敷地内から、飛鳥時代の高句麗系の軒丸瓦や法隆寺などに類例が見られる軒平瓦、さらには塔心礎が見つかっている。このことから当地一帯に寺域が存在したことが示唆され、現在「渋川廃寺」として遺跡認定されている。

当遺跡の発見は、昭和53年に春日町1丁目の旧国鉄職員竜華寮建設工事の際、弥生時代前期の土器や鎌倉時代の屋瓦が出土したことによるものである。その後の昭和56年以降は、八尾市教育委員会・当研究会によって下水道工事をはじめ共同住宅建設工事等に伴う数多くの調査が実施され、弥生時代前期～鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが認識されるようになった。その中で特筆すべき調査に、平成元年度に春日町1丁目において実施された下水道工事に伴う調査(A



第1図 調査位置図(S=1/5000)

T89-5)がある。この調査では、弥生時代後期以前に埋納された銅鐸が見つかり、学界はもとより報道関係をはじめ一般市民からも「跡部銅鐸」として周知されるところとなった。

今回の調査地周辺における既往の調査をみると、北東約100m地点で当研究会によって第1次調査(AT82-1)・第4次調査(AT88-4)が実施されており、第1次では弥生時代後期と古墳時代前期の遺物包含層、第4次では古墳時代前期の居住域が検出されている。また、本調査地から東へ約250m地点で当研究会による第22次調査(AT96-22)が実施されており、古墳時代前期の遺物包含層と近世の井戸が検出されている。今回の調査地に最も近いところでは、北西約40m地点で平成4年度に実施された八尾市教育委員会による調査(92-164)があり、ここでは古墳時代前期の井戸・ピット・土坑等の居住域に関する遺構が検出されている。

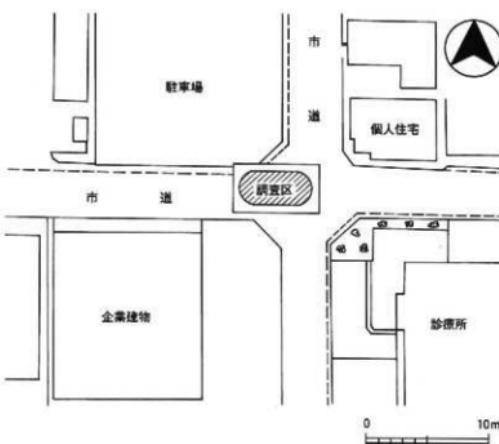
## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(9-135工区)に伴うもので、当研究会が跡部遺跡内で実施した第29次調査にあたる。調査区となる立坑の規模は、ライナーブレートを使用した南北2.8m・東西6.0mの平面が東西に長い楕円形を呈するもので、面積約15m<sup>2</sup>を測る。

掘削は、現地表(T.P.+9.1m前後)から層厚約1.3mの搅乱層を重機によって除去した後、以下約2.6m間の各地層を重機と入力を併用して掘り進め、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、T.P.+7.1~7.5m間で、2層にわたる古墳時代初頭(庄内式期古相)の遺物包含層を確認した。遺物量は、全体でコンテナバット1箱分である。



第2図 調査区位置図(S=1/400)

### 2) 基本層序

調査区内では、現地表下1.3m迄の搅乱層部分を除き、全城で9層の堆積層を確認した。北西部にあたる調査区の1/4程と東部の一部は、道路築造時の水道管やガス管の埋設工事によって、深いところでは現地表下2m前後まで搅乱されている。古墳時代初頭の遺物包含層である第2層・第3層に限ってみると、東から西に向けて高低差0.3m前後で緩やかに落込んでいくのが確認された。それ以外の7層(第1層・第4層~第9層)については、ほぼフラットな堆積様相を呈する。以下、各層について列記する。

第0層：道路築造時の搅乱層および客土層である。層厚1.3~2.0m。現地盤の標高は9.1m前後を測る。

第1層：7.5YR8/8黄橙色シルト。北西部と東部の一部は擾乱によって削平されており、確認できるところで層厚15~30cmを測る。本層内に遺物は含まれない。北西部の八尾市教育委員会の調査(92-164)においても、同レベルの層位では遺構・遺物は見つかっていない。

第2層：5YR6/3にぶい橙色シルト。層厚15cm前後。全体的に古墳時代初頭(庄内式期古相)に比定される古式土師器の小破片を僅かに含む。南西部では壺の破片が数点出土した。

第3層：10BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚10~30cm。第2層とほぼ同時期とみられる遺物が僅かに含まれる。本層内では調査区北西隅付近の壁内から、大型壺(体部~底部残存)が出土した。

第4層：5B5/1青灰色砂質シルト。層厚30~60cm。本層以下最深部の第9層迄、遺物は含まれない。

第5層：10BG7/1明青灰色砂質シルト~シルト。層厚40cm前後。水成による堆積層である。

第6層：N6/ 灰色粘土質シルト。層厚20~40cm。上方へ漸次に粗粒化する。

第7層：N8/ 灰白色細粒砂。層厚15cm前後。河川の氾濫に起因する洪水層と思われる。

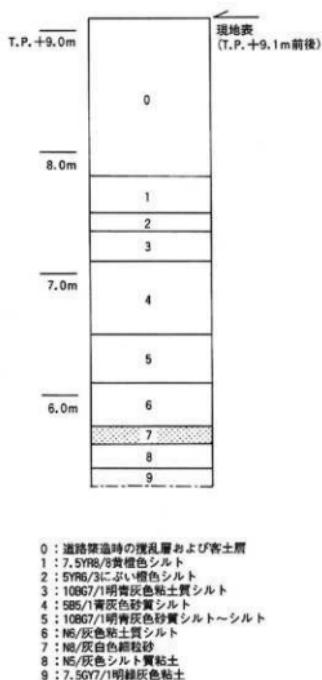
第8層：N5/ 灰色シルト質粘土。層厚15cm前後。

第9層：7.5GY7/1明緑灰色粘土。層厚15cm以上。植物ヲミナが薄く挟在する。

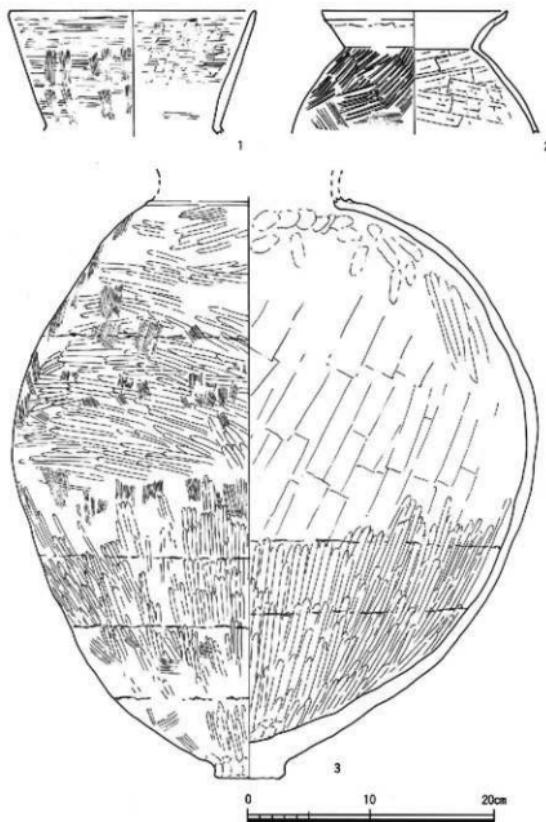
### 3) 検出遺構と出土遺物

第2層から出土した遺物のなかで図化できたものは、壺(1)と壺(2)の2点である。(1)は上外方へ直線的に伸びる口縁部を有する直口壺で、内外面ともにヨコナデした後に縦方向にハケ目(5~7本/cm)を施す。胎土中には長石・石英が多量に含まれ、色調はにぶい褐色を呈する。(2)の壺は上方に摘み上げる口縁端部を有し、口縁部上位に1条の接合痕が見られる。調整は外面が細目のタタキ目(4~5本/cm)、内面はエビオサエの後ヘラケズリが施される。胎土中には長石・角閃石が多量に含まれ、色調は暗褐色を呈する。生駒西麓産と思われる。

第3層から出土した遺物の中で図化できたものは、調査区の北西隅で検出した大型壺(3)の1点のみである。壺の口縁部は欠損しているが、体部以下の遺存状況は良好であり、復元した結果、体部最大径43cm、頸部から底部までの残存高48cmを測るものであることがわかった。発見時、調査の類例から「壺棺」としての性格を有するものと推測し、周辺の土層観察を行ったが掘形は確認されず、壺内にも人骨らしきものは見つからなかった。大型壺の調整は、外面上半が横方向のヘラミガキに対して下半は縦方向のヘラミガキが施され、後に部分的にハケ目(5~7本/cm)が



第3図 基本層序模式図(S=1/40)



第4図 第2層(1・2)、第3層(3)出土遺物実測図( $S = 1/4$ )

施される。内面は上位がユビオサエ、中位はヘラナデ、下位は縦方向のヘラミガキが施される。また、接合痕が外面に4条、内面に2条見られる。胎土中には長石が非常に多く含まれ、色調は黄橙色を呈する。

### 3.まとめ

今回の調査では、現代の搅乱によって面的には遺構面を捉えることができなかつたが、現地表下1.6~2.0m(T.P.+7.1~7.5m)間で古墳時代初頭(庄内式期古相)に比定される2層の堆積層を確認することができた。ここで北西約40m地点で平成4年度に八尾市教育委員会によって実施された調査結果をみると、一時期新しい古墳時代前期の居住域が検出されているが、出土した土器の中には古墳時代初頭のものも含まれており、当地との有機的な関係が示唆される。また、壺棺

の可能性もある大型壺の検出は、周囲の遺物量の希薄さと併せて墓域を想定させる。

今回の調査での下層確認ともいえる現地表下2.0~4.0m(T.P.+5.0~7.0m)間については、八尾市下水道部および工事関係者の協力を得て掘削にあたったが、当初予想された弥生時代の遺構・遺物は皆無であった。調査区内の土層でみる限り、水成によるシルト~砂質シルト、および植物遺体を挟む粘土層からは、沼沢地等の土地景観を想起させる。ここで周辺における既往の調査を見ると、北東約100m地点の当研究会による第1次調査(A T82-1)で弥生時代後期の遺物を検出している以外、該期の遺構・遺物は現在のところ見つかっていない。先述の八尾市教育委員会の調査(92-164)および当地から東方の当研究会による第22次調査においても、その調査結果から当地とレベル的および層位的に類似した沼沢地を示唆する層相が確認されている。これらを勘案すれば、当地周辺が弥生時代後期以前は生活を営むには不向きな土地条件であったことが想像できる。

#### 参考文献

- ・高木真光 1983.3「第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・安井良三 他 1991『跡部遺跡発掘調査報告書 一大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸-』(財)八尾市文化財調査研究会報告31
- ・西村公助 1983「11.跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査 -その成果と概要-』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1989「19 跡部遺跡(第4次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1998「I 跡部遺跡第22次調査(A T96-22)」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・酒 斎 1993.3「16.跡部遺跡(92-164)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会



北壁面 (T.P. +7.0m~8.0m付近)  
(南東から)



完掘状況 (T.P. +5.3m前後) (西から)



北壁内 大型壺出土状況 (T.P. +7.1m前後)  
(南から)



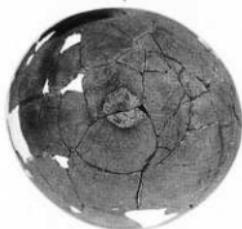
同上



掘削状況 (T.P. +6.0m前後) (南西から)



3



第3層出土 大型壺(3)

## 言　　詞

本報（以下略）一九三九年九月二十一日登載了本報社論題「我國之七十年」，  
在該社論中說：「……我們希望這次的調查能為我們提供一些有關中國近來社會、經濟、政治、軍事等方面的情況，以便我們能夠更準確地評論中國的前途。」

### III 跡部遺跡第30次調查 (A T 98-30)

## 水　　目　　本

（以下略）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市跡部本町4丁目地内で実施した公共下水道工事（10-106工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第30次調査（AT98-30）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第526号 平成10年12月10日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年1月20日～1月27日（実働夜間2日）にかけて高萩千秋・森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は31.2m<sup>2</sup>を測る。
1. 内業整理は現地調査終了後、隨時を行い、平成11年8月に終了した。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

## 本　文　目　次

1. はじめ .....	13
2. 調査概要 .....	13
1) 調査の方法と経過.....	13
2) 基本層序.....	13
3. まとめ.....	14

### III 跡部遺跡第30次調査 (AT98-30)

#### 1. はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置する遺跡で、現在の行政区画では跡部北の町1~3丁目、跡部本町1~4丁目、春日町1~4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、跡部南の町1・2丁目、安中町3丁目の東西約1.5km、南北約0.7kmがその範囲と推定されている。地理的には、河内平野のほぼ中央部を流れる旧大和川主流の長瀬川左岸の自然堤防上に立地し、同地形上においては北に久宝寺遺跡、南に太子堂遺跡、東に植松遺跡、西に亀井遺跡が存在している。

今回の調査地は第28次調査地から南へ約400mの地点に当たる(本書I参照)。

#### 2. 調査概要

##### 1) 調査の方法と経過

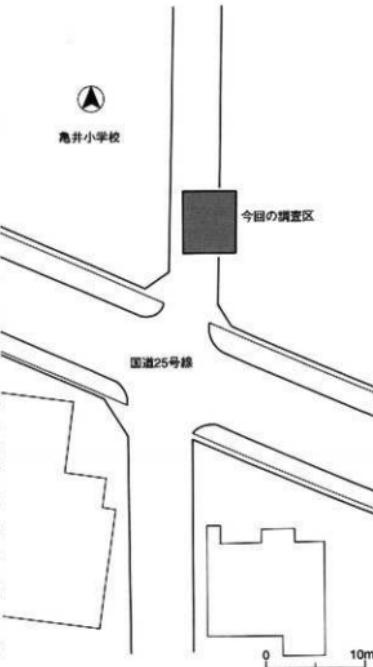
今回の発掘調査は公共下水道工事(10-106工区)に伴う調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で行った第30次調査にあたる。調査対象となったのは立坑1箇所のみで東西幅約5.2m、南北幅約6.0m、面積は約31.2m<sup>2</sup>を測る。

今回の調査区は国道25号線に近接しており、周辺の交通事情から日中は調査が行えなかったため、平成11年1月20~21日、26~27日の夜間に調査を行った。

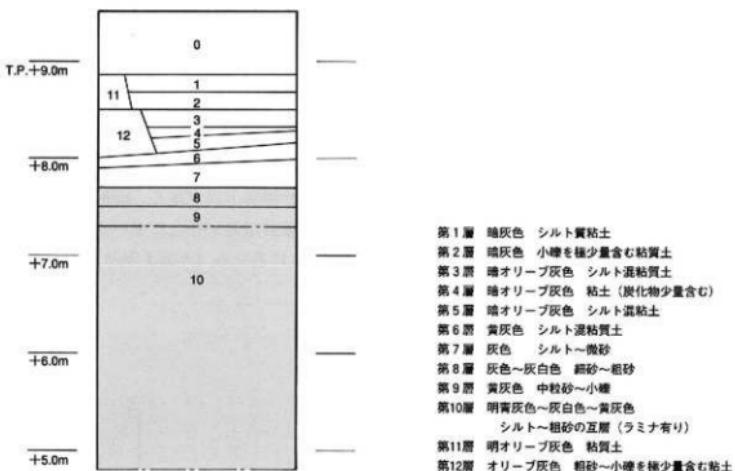
現地表(T.P.+9.52m前後)下約0.5mは覆鋼板設置のため掘削されており、以下を現地表下約4.7m(T.P.+4.8m)まで機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

##### 2) 基本層序

基本層序は第2図のとおりである。夜間調査であるという制約上、土色についてはやや不安な点が残る。調査では当調査区北約30mに位置する第8次調査においてT.P.+8.3m前後で鎌倉時代の遺構面、T.P.+7.8m前後で奈良時代の遺構面が検出されていたため、それぞれ対応する面の検出に努めた。しかし遺構面は検出できず、断面観察の結果からも包含層や遺構面に相当する層は確認できなかった。また、T.P.+7.7m前後で確認した砂層は掘削範囲である現地表下4.7m(T.P.+4.8m)まで続いていた。第8層以下は湧水が激しく、断



第1図 調査区位置図(S=1/500)



第2図 基本層序模式図(S=1/50)

面観察も充分には行えなかったが、シルトから粗砂が互層をなしており、これらの層には木片などの植物遺体が多く含まれていた。

### 3.まとめ

今回の調査では遺構・遺物とも検出できなかつたため各層の時代を決定するのは難しい。しかし、第8層以下は大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現・財團法人大阪府文化財調査研究センター)が調査した『亀井』・『亀井北(その3)』で検出された古平野川に相当する河川堆積層であると思われる。『亀井北(その3)』で検出された古平野川は川幅約195mと推定されており、弥生時代前期から平安時代にかけての遺物が出土している。また砂の堆積は1.7~2.0m前後と報告されているが、今回の調査区では確認できただけでも3m近く砂が堆積しており、当調査区周辺は水の流れの中心に近い地域であったことが想定できる。

### 参考文献

- ・高島 徹・廣瀬雅信他 1983『亀井』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・竹原伸次・大槻康宏 1986『亀井北(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・高萩千秋・近江俊秀 1989『亀井遺跡-南亀井町4丁目41-1の調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告19(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1993「II.跡部遺跡第8次調査(AT92-8)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告39(財)八尾市文化財調査研究会



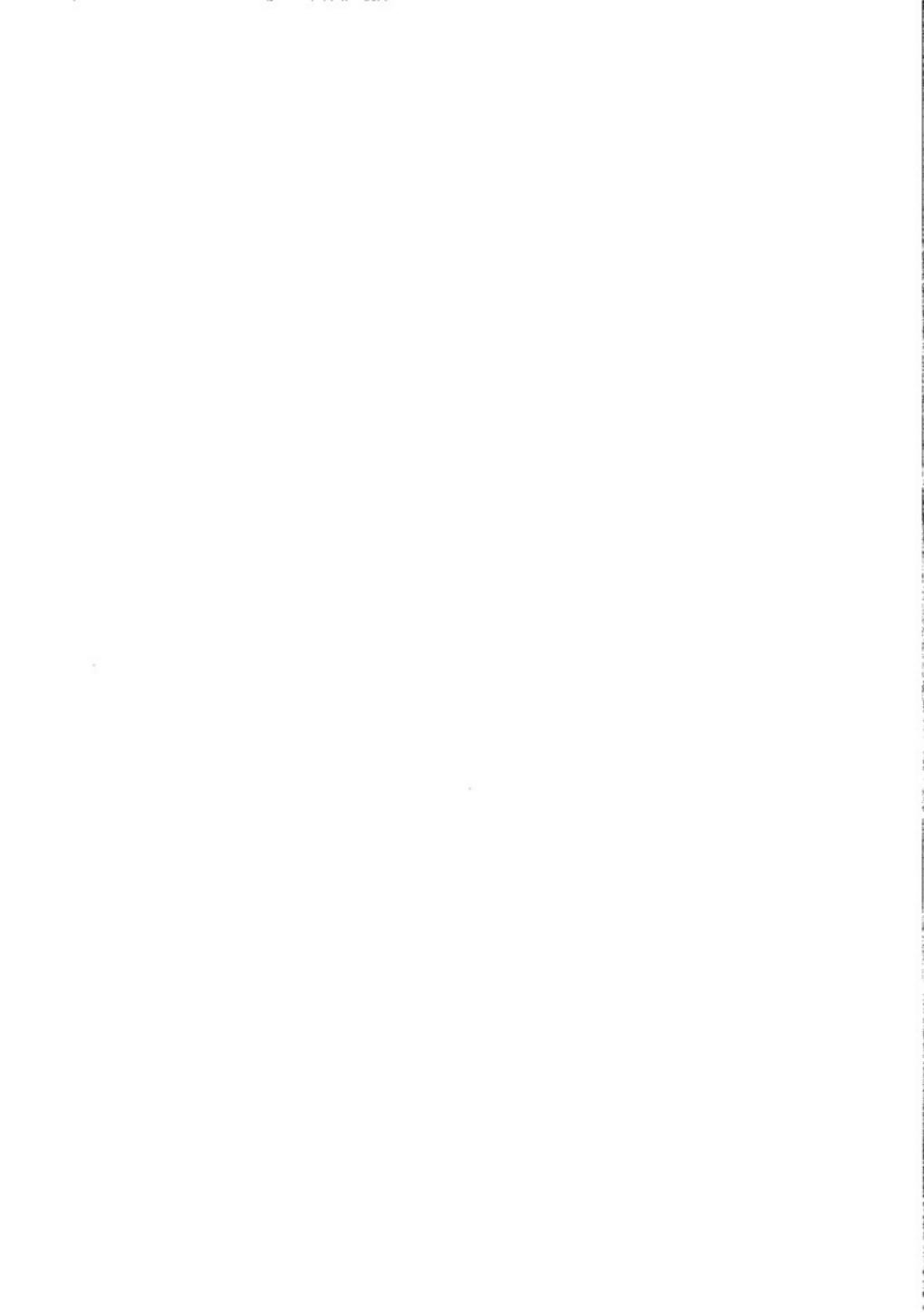
南壁断面(T.P. +8.9~8.0m)



南壁断面(T.P. +7.0~6.5m)



最終状況(西から)



## 目 錄

總論  
第1章 植松遺跡の歴史と現状  
第2章 植松遺跡の構造と機能  
第3章 植松遺跡の文化背景  
第4章 植松遺跡の調査方法と手順  
第5章 植松遺跡の調査結果と考察

### IV 植松遺跡第7次調査(UM98-7)

## 大 日 異 本

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市永畠町2丁目地内で実施した公共下水道工事（10-17工区）に伴う発掘調査である。
1. 本書で報告する植松遺跡第7次調査（UM98-7）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理302号 平成10年8月17日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年10月19日～10月29日（実働5日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約34m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては松本貴匡・山口拓也・飯塚直世・中西明美が参加した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー田島和恵が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	17
2.調査概要.....	18
1) 調査の方法と経過.....	18
2) 基本層序.....	18
3) 検出遺構と出土遺物.....	20
4) 出土遺物観察表.....	23
3.まとめ.....	24

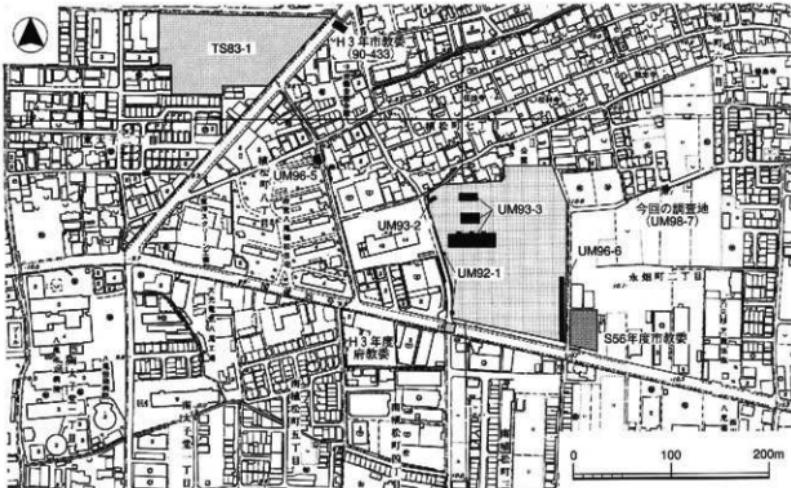
## IV 植松遺跡第7次調査 (UM98-7)

### 1. はじめに

植松遺跡は八尾市の中西部にあたり、現在の行政区画では植松町3~8丁目、永畠町2・3丁目を中心と所在する。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸一帯に広がる沖積地の自然堤防上に位置する。

当遺跡では、昭和56年に八尾市教育委員会により実施された調査では平安時代前期の掘立柱建物1棟・溝などが確認されたのみにとどまっている。その後、大阪府教育委員会・市教委が数回の遺構確認調査の実施したことによって古墳時代前期から中世に至る遺物包含層を確認している。また、今回の調査地の西部では当調査研究会が共同住宅建設に伴う第3次発掘調査(UM93-3)を実施している。この調査では弥生時代前期から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

当遺跡の周辺には南東に老原遺跡、南に植松南遺跡・木の本遺跡、南西に八尾南遺跡、西に跡部遺跡・太子堂遺跡・龜井遺跡が同一沖積地上に存在している。また、今回の調査地の近隣では、古くは大和王権のころに物部一族と蘇我一族との戦いの古戦場に建立された勝軍寺がある他、北西へ300mの所には「旧大和川の一つである長瀬川東辺にあった龍華寺の大門付近にまつられてあったのが移された」と言い伝えられている大門地蔵、さらにそこから西へ200mの所には植松の式内社で、「物部一族の祖神をまつった」と言われている渋川神社がある。調査地南部にはこ



第1図 調査地位置図及び周辺図(S=1/5000)

これらの交通の往来として盛んに使用されたとされる奈良街道がある。この街道は現在国道25号線と称して、今なお八尾市の交通的主要道路となっている。調査地点は植松町3丁目交差点より北へ進入し、植松の旧村に続く道の新興住宅地内的一角にある。

当調査地は当遺跡推定範囲の中西部にあたり、南西約150mの所では昭和56年に八尾市教育委員会が店舗建設に伴う発掘調査<sup>註1</sup>を実施し、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物を確認している。また西約200mの所では平成5年度に当調査研究会が共同住宅建設に伴う第3次発掘調査（UM93-3）<sup>註2</sup>を実施し、弥生時代前期から鎌倉時代の遺構・遺物を確認している。さらに南西約150mの所では平成8年度に当調査研究会が公共下水工事に伴う第6次発掘調査（UM96-6）<sup>註3</sup>を実施し、平安時代前期の土馬を検出している。

## 2. 調査の概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（10-17工区）に伴うもので、八尾市・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は平成10年10月19日～10月29日（実働5日）である。調査面積は約34m<sup>2</sup>を測る。この調査は、当調査研究会が当遺跡で実施する第7次調査（UM98-7）である。

調査区は公共下水道工事の発進立坑の1ヶ所である。立坑は縦6.0m×横5.6mを測る（第2図）。調査では鋼矢板を打ち付けた後、第1段目の梁までを1次掘削、第2段目の梁までを2次掘削、最終工事掘削深度までを3次掘削として調査を実施した。掘削は層理にしたがって人力掘削及び機械の併用で行った。最終調査深度は工事掘削深度である現地表下約4.6mまでである。その間で確認できた土層について調査した。



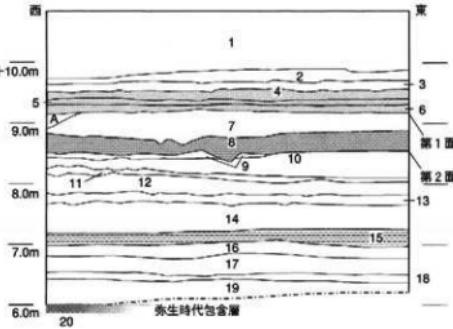
第2図 調査地位置図(S=1/500)

### 2) 基本層序

調査区では掘削時に観察した全体の土層状況と北壁を基調とし、断続的に残した土層の観察・実測を行った。基本層序は以下のとおりである。

第1層 盛土（層厚0.8～1.5m）。地表面は標高10.8m前後を測る。道路部は道路の築造で、

- 南の借地部分は下水道の立坑工事のために北側の道路面まで埋められた土である。
- 第2層 耕土（層厚20cm）。現地表下約0.8m（標高9.8m前後）を測る。道路側の一部では水道等の公共の埋設物により搅乱されている。南側（借地部分）は下水道工事まで水田としていた耕作土である。
- 第3層 青灰色粘質シルト（層厚20cm）。中世以降の土器の小片がごく少量含まれている。旧耕土と同様、道路（西）側の一部で確認した程度でほとんどが搅乱されている。
- 第4層 灰茶色シルト（層厚10~20cm）。中世以降の遺物を含む。
- 第5層 灰青色粘質シルト（層厚20cm）。
- 第6層 灰青色シルト混細砂（層厚20cm）。奈良～中世までの遺物を含む。
- 第7層 青灰色シルト（層厚20cm）。上面より切り込み溝を検出しており、第1面として調査した。上面高は標高9.1m前後を測る。
- 第8層 青灰色粘土（層厚30cm前後）。7~8世紀ごろの遺物を少量含む。
- 第9層 青灰色微砂（層厚10cm）。上面で奈良時代～平安時代初頭ごろの造構が切り込まれており、第2面とした。標高は8.5m前後を測るフラットな面である。東側で途切れる。
- 第10層 灰白色粗砂（層厚20~40cm）。微砂を含む細砂に近い砂である。東側では第2面となる。
- 第11層 青灰色微砂（層厚10cm前後）。植物遺体を少量含む。
- 第12層 乳灰色シルト混細砂（層厚20cm前後）。
- 第13層 暗灰色粘土（層厚20cm前後）。やや硬くしまった粘土層である。
- 第14層 淡灰青色微砂（層厚50cm前後）。
- 第15層 暗灰色粘土（層厚20cm前後）。イネ科系の植物遺体がラミナ状に2~4条 T.P.+10.0m みられる。
- 第16層 灰青色粘質シルト（層厚20cm前後）。植物遺体が少量含む。
- 第17層 青灰色粘土（層厚30cm前後）。粘性の強い粘土である。
- 第18層 暗灰青色粘土（層厚10~15cm）。シルト系の粘土。
- 第19層 青灰色粘土（層厚40cm前後）。粘性の強い粘土である。
- 第20層 黒灰色粘土（層厚0.2m以上）。弥生時代の包含層と考えられる層である。

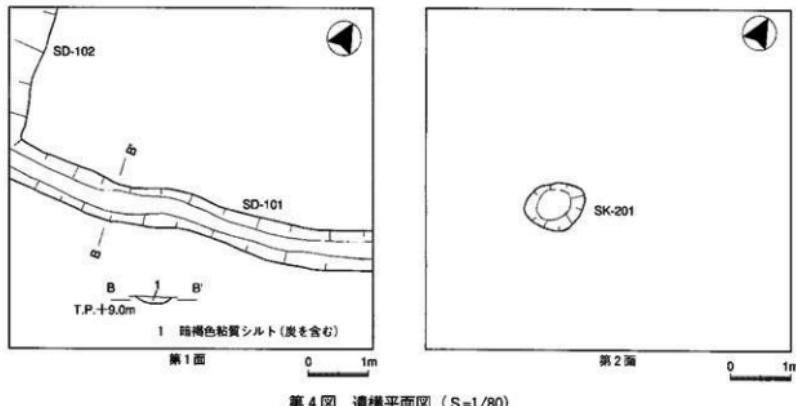


1	盛土	11	青灰色微砂
2	耕土	12	乳灰色シルト混細砂
3	青灰色粘質シルト	13	暗灰色粘土
4	灰茶色シルト	14	淡灰青色微砂
5	灰青色粘質シルト	15	暗灰色粘土
6	灰青色シルト混細砂	16	灰青色粘質シルト
7	青灰色シルト	17	青灰色粘土
8	青灰色粘土	18	暗灰青色粘土
9	青灰色微砂	19	青灰色粘土
10	灰白色粗砂	20	黒灰色粘土

第3図 北壁断面図(S=1/80)

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約4.8m (T.P. +5.95m) で弥生時代の包含層上面を確認した。現地表下約2.1m (T.P. +8.5m) で奈良～平安時代初頭の土坑1基 (SK-201) [第2面]、現地表下約1.7m (T.P. +9.0m) で中世の溝2条 (SD-101・102) [第1面] を検出した。遺物は遺構および中世包含層・奈良時代の包含層内からコンテナ箱にして約1箱を出土した。以下、検出した遺構について記す。



#### 奈良時代～平安時代初頭（第2面）

##### 土坑 (SK)

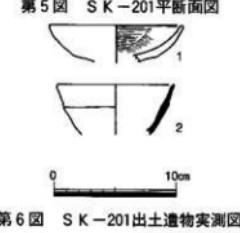
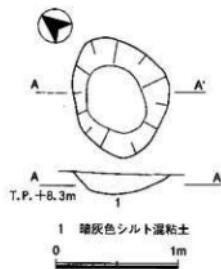
###### SK-201

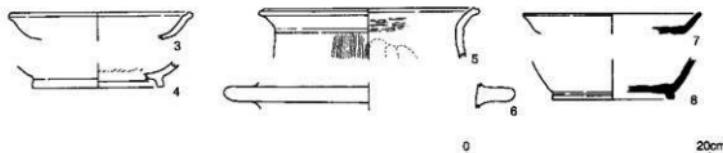
調査区の南西部で検出した土坑である。平面形状はやや梢円形を呈し、径0.8～1.0m、深さ0.2mを測る。断面形状は皿状形を呈する。堆積土は暗灰色シルト混じり粘土の一層である。遺物は7～8世紀代の土師器・須恵器の小片をごく少量出土した。図示できたものは土師器の杯(1)・須恵器の壺の口縁部(2)の2点である。

#### 平安時代後期～鎌倉時代（第1面）

##### SD-101

調査区中央で検出した東西方向に伸びる溝である。この溝は現地表下約1.7m (T.P. +9.1m) 前後の第7層より切り込まれる。幅約0.6～0.7m、深さ0.1～0.12mを測り、緩やかなS字を描く。





第7図 SD-101出土遺物実測図

調査区の西壁でSD-102と合流する。堆積土は暗灰褐色粘質シルトの一層で、内部から7~10世紀に比定される須恵器の小片を主とした土器類が少量出土している。そのうち、図示できたものは6点(第7図)である。(3)は奈良時代後期の皿(盤)である。(4)は黒色土器の椀で、しっかりととした断面方形の高台をもつ。(5)は体部外面に縦方向のハケナデを施した壺の口縁部分である。(6)は生駒西麓の砂粒が含まれる羽釜の鋸の部分である。7世紀ごろにみられる胴長の体部をもつ羽釜の鋸部分であろう。(7・8)は7世紀末ごろの須恵器で、(7)が皿、(8)が高台をもつ杯である。

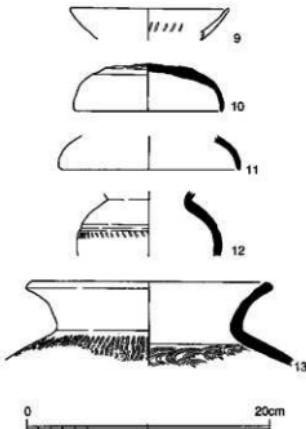
## SD-102

調査区北西部で検出した南北方向に伸びる溝で、西肩は調査区外で規模などは不明である。この溝の南側ではSD-101と合流している。堆積土はSD-101と同一層である。遺物は出土していないが、時期はSD-101と同時期と考えられる。

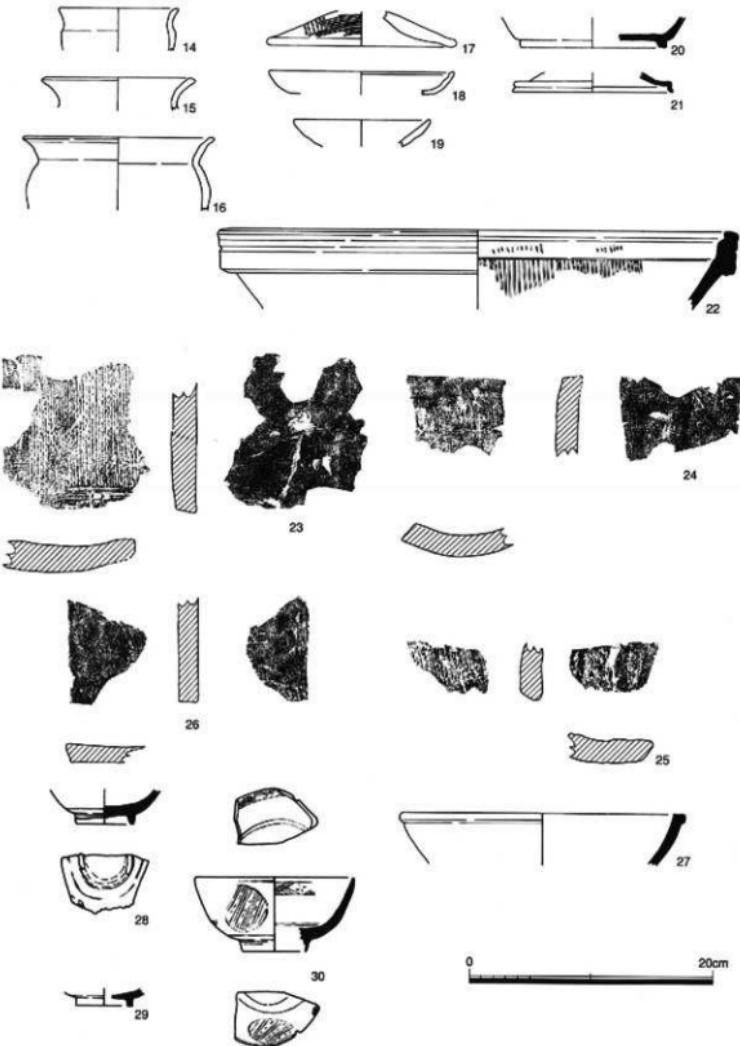
## 遺構に伴わない出土遺物

第8層内(包含層2)より古墳時代~平安時代前期にかけての土師器・須恵器の破片、第2~4層(包含層1)内より古墳時代~近世にかけての土器類の小片をごく少量出土した。そのうち、第8層で出土した遺物内に図示できたものは7~8世紀ごろの土器5点(第8図)である。(9)は土師器の高杯の杯部、(10~13)は須恵器で、(10・11)は杯蓋、(12)は壺、(13)は甕である。これらは陶邑編年のII型式の範疇に入るものである。

第2~4層内で出土した遺物内に、図示できたものは17点(14~30)である。(14~17)は古墳時代後期の土師器で、(14)は鉢、(15)は壺、(16)は甕、(17)は高杯の脚部である。(18~21)は奈良時代~平安時代前期のものである。(18・19)は土師器で、(18)は皿(盤)、(19)は杯である。(20・21)は須恵器である。(20)は高台付杯、(21)は高杯の脚部の枢部分である。(22~30)は平安時代後期~近代の遺物である。(22)は備前系の擂鉢、(23~25)は凹面に布目、凸面に繩目のある平安時代後期ごろの平瓦片である。(26)は現在とほぼ同じ平瓦であることから江戸時代のものと思われる。(27~30)は江戸時代後期~明治時代にかけての国産陶磁器である。(27)は陶質の鉢、(28~30)は染付磁器碗である。



第8図 第8層出土遺物実測図



第9図 第1面 遺構に伴わない出土遺物実測図

## 4) 出土遺物観察表

遺跡番号	器種 出土地点	法身(cm)	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1	杯 十輪器 SK-201	口径 8.2	内面: ヘラミガキ 外面: ナデ、口縁端部ヨコナデ	内外にぶい 橙色 断面: 暗灰色	密(2mm以下の砂粒有り)	良好	1/12	
2	蓋 須恵器 SK-201	口径 9.4	外外面: 回転ナデ	灰色	密(長石)	良好	1/6	自然釉
3	皿 土師器 SD-101	口径 14.5	内外面: ナデ、口縁部外面凹部 縁1条有り	外: 暗灰黄色 内: 灰黄色	密(5mm以下の砂粒含む)	良好	1/2	
4	碗 馬色土器 SD-101	底径 10.6	外面: ヨコナデ 内面: ヘラミガキ	橙色	密	良好	底部1/6	
5	蓋 土師器 SD-101	口径 17.1	外面: ハケ目、ヨコナデ、口縁 部四線有り 内面: ハケナデ、指拌え	外: 暗灰黄色 内: ぶい橙 -灰黄褐色	密(0.5mm以下の 砂粒含む)	良好	1/10	
6	羽釜 土師器 SD-101	銅径 20.0	ナデ	外: 暗-黒褐色 内: 暗灰褐色	3mm以下砂粒を 含む	良好	銅1/5	
7	皿 須恵器 SD-101	口径 14.6 底径 11.5	同上	灰色	密	良好	1/4	
8	杯 須恵器 SD-101	底径 10.0	外外面: 回転ナデ、底部外面凹 部: ハラケズリ	外: 灰白色 内: 灰色	密	良好	1/2	
9	高杯 土師器 包含層2	口径 12.8	外面: ヨコナデ、内面に放射 状: ヘラミガキ有り	内外: 橙色 断面: 明褐色	細砂粒をやや多 量に含む	良好	1/9	第8層
10	杯蓋 須恵器 包含層2	口径 11.8	外面: 回転ナデ、外表面ラケ スリ、内面静止ナデ	内外: 灰色 断面: 灰白色	細砂粒(長石、 褐色酸化鉄)を多く含む	良好	1/3	◆
11	杯蓋 須恵器 包含層2	口径 14.6	外外面: 回転ナデ	灰色	細砂粒(長石) を多く含む	良好	1/10	◆
12	蓋 須恵器 包含層2	洞部径 10.6	内外面: 回転ナデ	外: 青灰色 内: 灰色 断面: 灰白色	密	良好	1/4	◆
13	甕 須恵器 包含層2	口径 19.0	外面: 口縁部ヨコナデ、体部 内面同心円タスキ、外表面格子タ スキ後カキ目	暗灰色	2.5mm以下の砂粒 含む	良好	1/6	◆
14	同上	口径 9.2	外外面: ヨコナデ	橙	2mm以下の砂粒含 む	良好	1/8	
15	同上	口径 11.8	同上	澄-褐色	3mm以下の砂粒を 含む	良好	1/10	
16	同上	口径 14.8	外外面: ヨコナデ、体部外表面 剥: のため調整不明	暗灰色	2mm以下の砂粒を 含む	良好	1/6	焼付着
17	高杯 土師器 包含層1	柄部径 14.8	外面: ヘラミガキ 内面: ハケナデ、ナデ	外: 明赤褐色 内: 橙色	2mm以下の砂粒を 含む	良好	1/8	第2層～ 第4層
18	皿 土師器 包含層1	口径 14.6	外外面: ヨコナデ	外: ぶい黄 橙色 内: ぶい橙	密(微粒砂を少 量含む)	良好	1/16	◆
19	杯 土師器 包含層	口径 8.8	同上	外: 明赤褐色 内: ぶい赤 褐色	2mm以下の砂粒含 む	良好	1/8	◆
20	同上	底径 11.6	外外面: 回転ナデ	灰白色	緻密	良好	1/5	◆
21	高杯 須恵器 包含層1	脚部径 13.0	同上	外: 暗灰色 内: 灰黃褐色 断面: 暗灰色	密	良好	1/8	◆
22	箱鉢 須恵器 包含層1	口径 40.6	外外面: ヨコナデ 内面: オリ目	外: 暗赤褐色 内: ぶい赤 褐色	密	良好	1/10	◆
23	平丸 包含層1	厚み 2.0	凹面: 布目 凸面: 製目	灰白色	4mm以下の砂粒含 む	良好	破片	◆
24	平丸 包含層1	厚み 1.8	凹面: 布目 凸面: 製目	灰白色	3mm以下の砂粒含 む	良好	破片	◆
25	同上	厚み 2.0	同上	灰褐色	3mm以下の砂粒含 む	良好	破片	

遺跡番号	器種 出土地点	法量 (cm)	調査・技法等の特徴	色 調	胎 土	焼成	遺存状況	備 考
26	同上	厚み 1.4	凹凸面：ナデ	灰色	2mm以下の砂粒含む	良好	破片	
27	鉢 内装 包含層 1	口径 11.4	内外面：回転ナデ、全体に釉薬	内外赤褐色 断にぶい橙色	緻密 (2mm以下の砂粒含む)	良好	1/7	
28	碗 伊万里焼 包含層 1	底径 2.4	内外面：回転ナデ、全体に釉薬	白色	緻密	良好	1/5	
29	同上	口径 11.4	内外面：回転ナデ、青色による 飛付、全体に釉薬	白色	緻密	良好	1/7	
30	同上	口径 11.4 底径 5.0	飛付、全体に釉薬	白色	緻密	良好	1/7	

### 3.まとめ

今回の調査は、第3次調査(UM93-3)で検出している弥生時代前期～中期・古墳時代前期～中世の遺構・遺物が当調査地にも存在する可能性が考えられ、その調査の成果を踏まえた調査を進めた。調査の結果、ほぼ同様の堆積状況であることが確認できた。調査では2面の遺構面を調査できた。以下、検出した各時代について記す。

#### 弥生時代前期～中期

工事掘削深度より約0.2m下の現地表下約4.8m(T.P.+6.0m)前後で、この時期の包含層と思われる黒灰色粘土層の上面を検出した。層厚や包含する遺物量、遺構の有無については工事掘削深度より深部に存在するため未確認である。この層は第3次調査地から東部へ約200mの当地まで続いているようであり、広範囲に存在することが予想される。

#### 奈良時代～平安時代初頭

この時期は層序の第9層上面で土坑1基(SK-201)を検出している。この上層(層序第8層内)には6～8世紀頃の遺物が主として出土しており、飛鳥時代ごろからの遺構面ではないかと考えられる。遺構の存在や出土遺物の量からみて集落域とはやや考えにくい。

#### 平安時代後期～鎌倉時代

第7層上面で溝2条(SD-101・102)を検出している。この溝はほぼ東西・南北方向に伸びており、中世条里の方向に合うものと思われ、検出状況からみて生産域に関連する水路の一部と考えられる。

調査では確認されていないが、調査区の南西部で公共下水道工事の一環としてボーリング調査を実施している。その地質結果では現地表下1.5～4.0mの間に砂層の堆積が確認されており、第3次調査の北部で検出した河川跡の上流部分の可能性が考えられることから、東～西方向の河川の流路であることが言えるであろう。また、河川は旧大和川の一つである長瀬川との関連についても、今後の調査が進むにつれ、相互関係が明らかになるものと思われる。

#### 註記

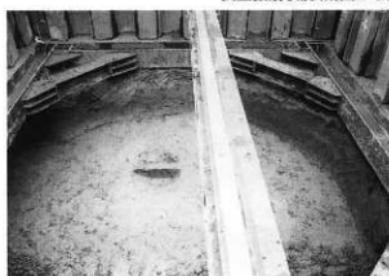
- 註1 高木真光 1983.8「第2章 植松南遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告2
- 註2 高萩千秋 1997「I 植松遺跡第3次調査」「財团法人八尾市文化財調査研究会報告59」
- 註3 原田昌則 1998「IV 植松遺跡(第6次調査)」「財团法人八尾市文化財調査研究会報告60」



表土掘削状況(南西から)



第1調査面(西から)



第2調査面(東から)



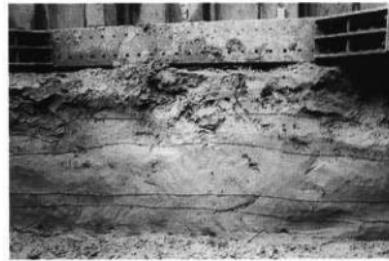
第2調査面SK-201(東から)



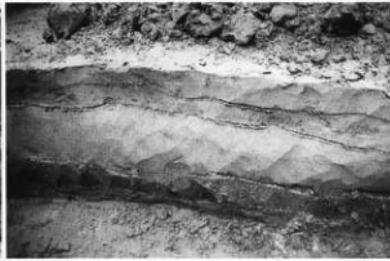
最終掘削(南から)



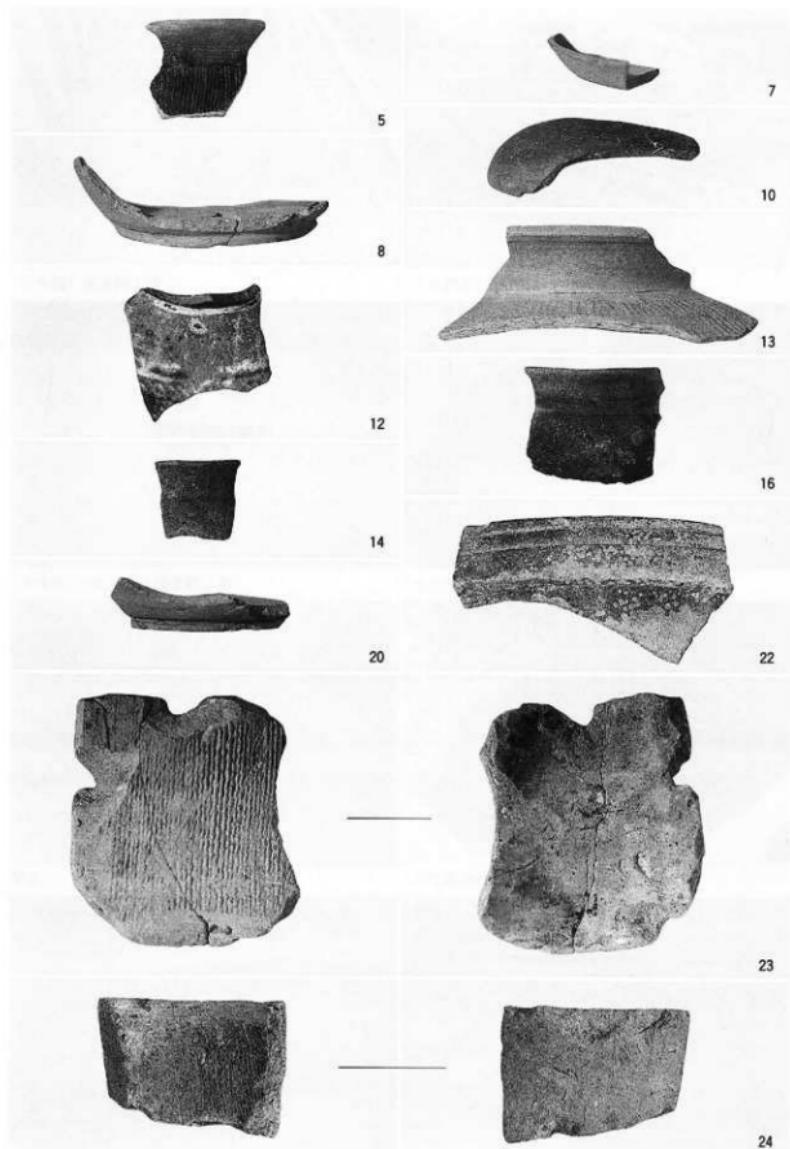
北壁



北壁



北壁



V 太田遺跡第3次調査（OOT98-3）

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市太田2・3丁目地内で実施した公共下水道工事(9-8工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太田遺跡第3次調査(OOT98-3)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋225-2号 平成9年7月23日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10月6月10日～平成11月3月19日〈実働10日〉にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は71m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては市森千恵子・中西明美・松尾実が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一中西、図面レイアウト トレースー中西、西村が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	27
2.調査概要.....	27
1)調査の方法と経過.....	27
2)検出遺構と出土遺物.....	28
3.まとめ.....	33

## V 太田遺跡第3次調査(OOT98-3)

### 1. はじめに

八尾市の南部に位置する太田遺跡は、南から北に伸びる羽曳野丘陵の縁辺部に位置する。当遺跡は、現在の行政区画では、太田3・4・9丁目、太田新町1・3丁目に存在しており、東西約0.5km・南北約1.3kmの地域を占めている。

当遺跡の周辺には、南に大正橋遺跡、西に八尾南遺跡、北に木の本遺跡があり、大和川を挟んで南側には津堂遺跡(藤井寺市)が存在している。

同遺跡内では、近年数件の発掘調査を実施している。なかでも、今回の調査地の北約20mで平成5年度に市教委が調査(市93-81)を行っており、古墳時代後期の遺構や遺物を検出している。<sup>註1</sup>また、平成6年度には西約70mの地点で市教委が調査(市94-149)を行っており、平安時代中期の遺構を検出している。<sup>註2</sup>

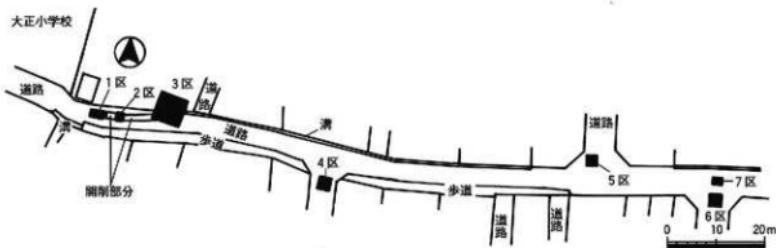
### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道(9-8工区)工事に伴う発掘調査である。人孔2箇所、開削部分1箇所、立孔4箇所、ライナー1箇所が調査の対象である。調査区の内、最も西側に位置している部分を1区とし、東へ2区・3区…7区と番号をつけた。なお1区は人孔部分と開削部分である。調査は3区→7区→5区→6区→4区→1区→2区の順で行った。



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区位置図

掘削は、現地表下約0.5~1.2m前後までを機械で行った後、以下0.5m前後について人手で行い遺構・遺物の検出に努めた。なお2区と3区の間の開削部分は、既設の埋設管(水道管など)があり搅乱されており本来の堆積層は残っていなかった。

## 2) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、1区では現地表下約0.8mで平安時代中期頃の河川を1条(NR-101)、3区では現地表下約1.3mで古墳時代~平安時代の溝を1条(SD-301)、5区では現地表下約1.0mで古墳時代後期頃の溝を1条(SD-501)、6区では現地表下約0.9mで古墳時代後期以前の畦畔を1条(畦畔601)検出した。以下、各調査区で検出した遺構および出土した遺物の概要を記載する。

### 1区

人孔と開削部分の調査区で、今回の調査地の最も西側に位置している。現地表面はT.P.+12.1mを測る。堆積土は0層~6層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。1層は旧耕作土である。以下2層~6層はほぼ水平堆積しており、各層からの遺物の出土はなかった。

現地表下約0.8mの3層上面(T.P.+11.3m)で、河川を1条(NR-101)検出した。

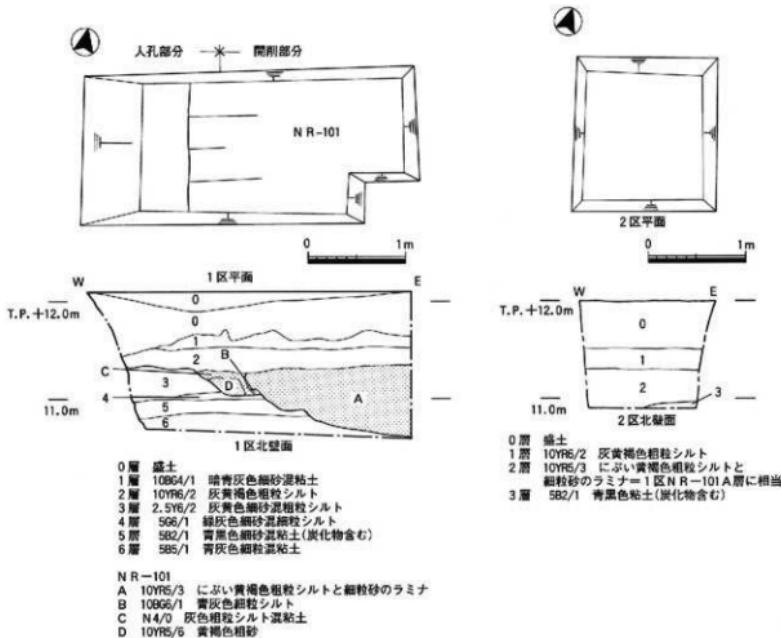
NR-101は西肩のみの検出で、規模は不明であるが、深さ0.7m以上を測り、南北方向に伸びると推定される。埋土は10YR5/3にぶい黄褐色粗粒シルトと細粒砂〔ラミナ構造あり〕、10BG6/1青灰色粗粒シルト、N4/灰色粗粒シルト混粘土、10YR5/6黄褐色粗砂で、河川内からは遺物の出土はなかった。NR-101の時期は不明であるが、構築している3層が平成6年度市教委調査地(市94-149)での層位の11層に相当し、平安時代中期に比定されていることから、同時期のものと思われる。

なお、1区の開削部分である東側の長さ約2m、幅約1.5mには、水道管が現地表下約1.5mの深さに埋設していたため、搅乱されており本来の堆積層は残っていなかった。

### 2区

人孔の調査区で、現地表面はT.P.+12.0mを測る。堆積土は0層~3層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。1層は旧耕作土である。2層は1区で検出した平安時代中期の河川の埋土に相当するシルトと細粒砂のラミナ層である。各層からの遺物の出土はなかった。

現地表下1.0mの3層上面(T.P.+10.9m)で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。



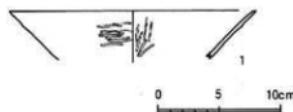
第3図 1区・2区 平断面図

## 3区

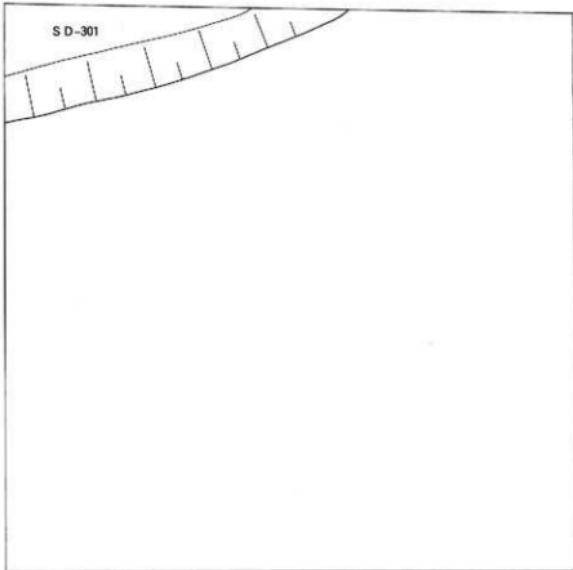
立坑の調査区で、現地表はT.P. +12.0mを測る。堆積土は0層～4層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。この調査区では既設の道路工事によって旧耕作土は削平されていた。1層～4層はほぼ水平堆積している。2層内からは土師器の破片が1点出土したが、小破片であり、遺物の時期は不明である。

現地表下1.3mの2層上面(T.P. +10.7m)で、溝1条(SD-301)を検出した。

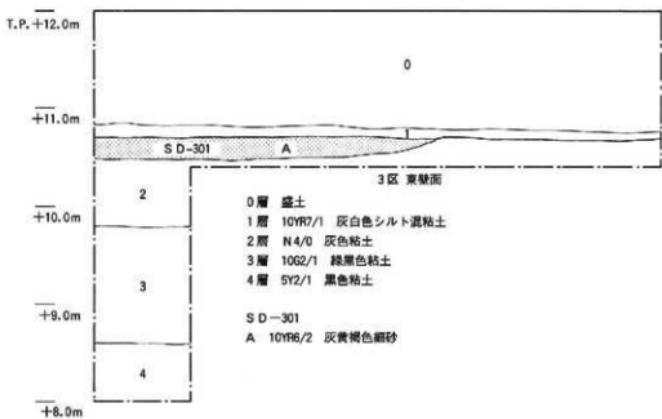
SD-301は南西～北東方向に直線に伸び、幅1.5m以上を測る。断面形状は皿形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色細砂で、遺構内からは土師器の高杯(1)が出土した。(1)は内外面へラミガキを施し、古墳時代前期に比定できるものである。



第4図 3区 SD-301(1)出土遺物



3区 平面 0 1m

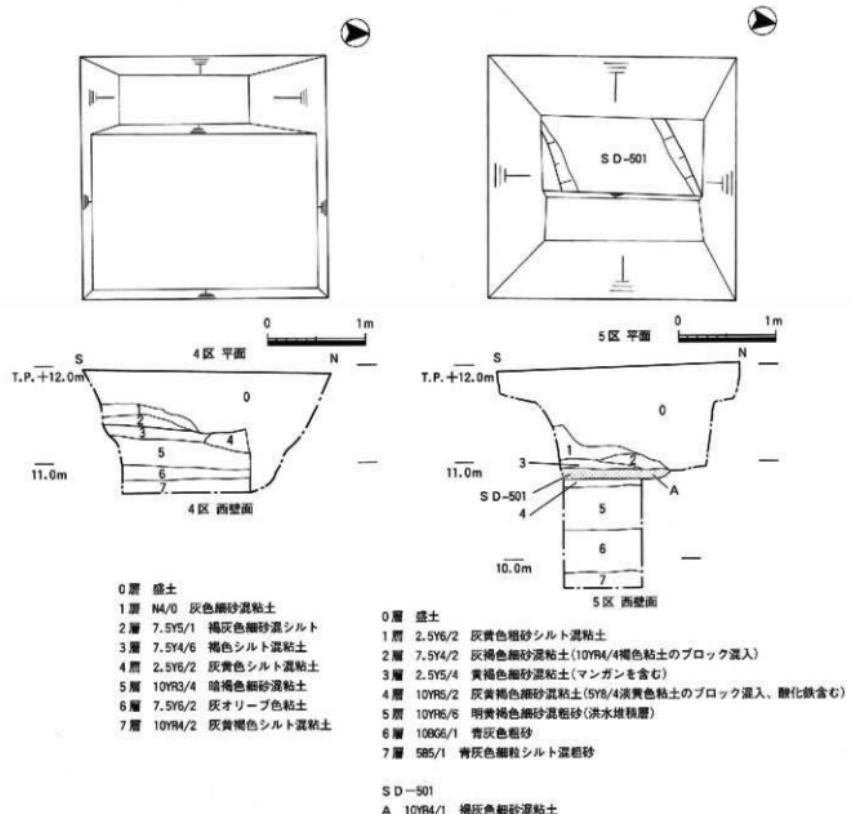


第5図 3区 平断面図

## 4区

立孔の調査区で、現地表はT.P.+12.0mを測る。この調査区では、東側と北側は概設の道路工事によって旧耕作土以下は削平されていたため、掘削範囲の約3分の1の調査となった。堆積土は0層～7層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。1層は旧耕作土に比定できる。以下2層～7層はほぼ水平堆積しており、このうち3層内からは土師器の破片が1点出土した。出土した遺物は小片で、詳しい時期は不明である。しかし、3区や5区と本調査区との堆積土層を検討すると、3層はおそらく平安時代頃に比定できると思われる。

なお、現地表下0.6mの3層と4層の上面(T.P.+11.4m)で調査を行なったが遺構の検出はなかった。



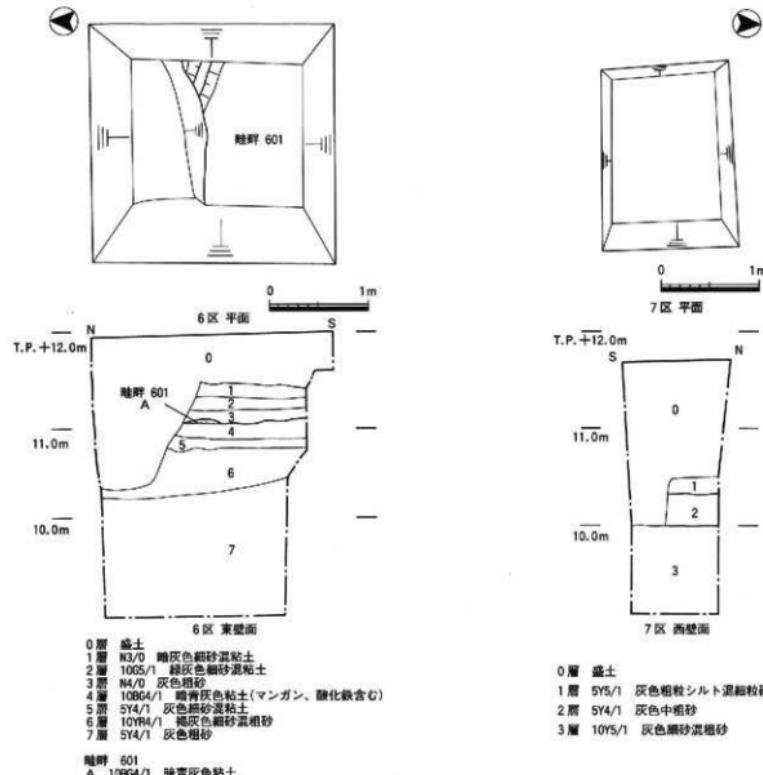
第6図 4区・5区 平断面図

## 5区

立孔の調査区で、現地表はT.P. +12.0mを測る。堆積土は0層～7層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。1層は旧耕作土である。4層は酸化鉄を多く含む土壤化層である。5層は洪水堆積層と思われる砂層である。各層からの遺物の出土はなかった。

現地表下1.0mの4層上面(T.P. +10.9m)で、溝1条(S D-501)を検出した。

S D-501は南西～北東方向に伸び幅約1.2mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.15mを測り、埋土は10YR4/1褐灰色細砂混粘土である。遺物が出土していないため遺構の時期は不明である。しかし、遺構を構築している4層は、平成5年度市教委調査地(市93-81)での層位の21層に相当し、古墳時代後期以前に比定されていることから判断すると、この溝は古墳時代後期頃に比定できる。



第7図 6区・7区 平断面図

## 6区

立孔の調査区で、現地表はT.P. +12.0mを測る。堆積土は0層～7層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。1層は旧耕作土である。4層は粘性の強い粘土で、水田耕土と推定される。6層は河川内堆積層と思われる砂である。各層からの遺物の出土はなかった。

現地表下0.9mの4層上面(T.P. +11.1m)で、南西方向～北東方向に伸びる畦畔を1条(畦畔601)検出した。

畦畔601は上幅約0.15m、下幅約0.4m、高さ0.05mを測り、10BG4/1暗青灰色粘土を盛り上げている。出土遺物はなかった。4層は、平成5年度市教委調査地での層位の21層に相当し、古墳時代後期以前に比定されていることから判断すると、この畦畔は古墳時代後期以前の水田に伴うものである可能性が高い。

## 7区

ライナーの調査区で、現地表はT.P. +11.7mを測る。堆積土は0層～3層を確認した。0層は盛土で、現在の道路を構築する際の整地土を含んでいる。この調査区では既設の道路工事によって旧耕作土は削平されていた。以下1層～3層は水平堆積層で、各層からの遺物の出土はなかった。

現地表下1.4mの2層上面(T.P. +10.3m)で調査を行なったが、遺構の検出はなかった。

## 3.まとめ

今回の調査地の西部にあたる1区・2区では平安時代中期頃に比定できる河川を、3区では古墳時代前期頃に比定できる溝を検出した。また、東部にある5区・6区では古墳時代後期頃と推定される溝や水田を検出した。

各調査区の調査範囲が狭いため不明な点が多いが、平安時代や古墳時代の遺構を確認できたことから、周囲に生産域や居住域が存在している可能性が考えられる。

## 註記

- 註1 吉田野乃 1994.3「4. 太田遺跡(93-81)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29 八尾市教育委員会
- 註2 米田敏幸 1995.3「1. 太田遺跡(94-149)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業 八尾市教育委員会

## 参考文献

- ・福田英人 1989.3『八尾南遺跡』—旧石器出土第3地点—大阪府文化財調査報告書第36號 大阪府教育委員会
- ・亀島重則 1990.10『太田遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- ・酒 素 1994.3「3. 太田遺跡(92-585)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29 八尾市教育委員会
- ・中野篤史・西村公助 1996『太田遺跡(第2次調査)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告53』財團法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・酒 素 1997.3「3. 太田遺跡(96-266)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36 八尾市教育委員会



1区 全景(南から)



1区 周辺(西から)



2区 全景(南から)



3区 全景(南から)



3区 周辺(南西から)



4区 全景(東から)



4区 周辺(北東から)



5区 全景(東から)



5区 周辺(南西から)



6区 全景(西から)



7区 全景(東から)



7区 周辺(南から)



VI 亀井遺跡第7次調査 (KM98-7)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市亀井町3丁目地内で行った、公共下水道工事(10-100工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する亀井遺跡第7次調査(KM98-7)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第572号 平成11年1月7日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年2月12日～2月23日(実働2日)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約4m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査には、加茂靖通・高橋宏幸が参加した。
1. 本書の執筆・編集は成海が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	37
2.調査概要.....	38
1) 調査の方法と経過.....	38
2) 検出遺構と出土遺物の概要.....	38
3.まとめ.....	39

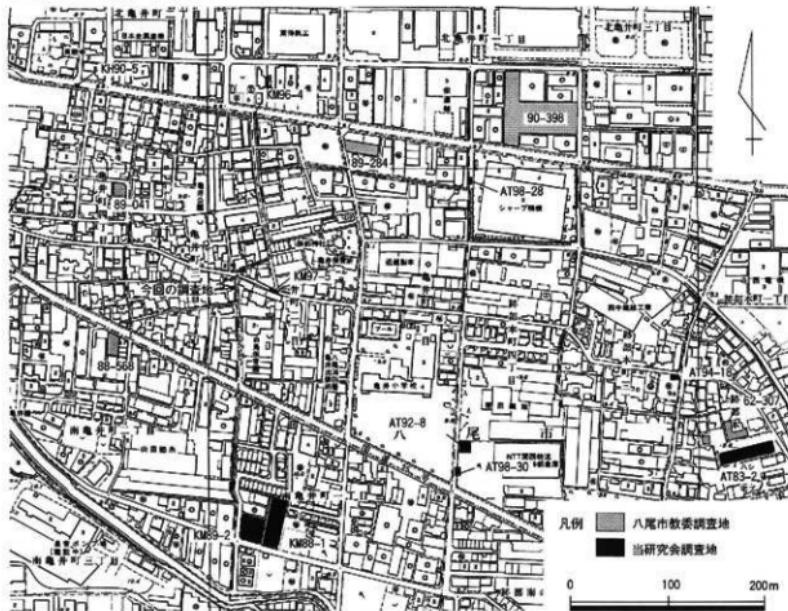
## VI 亀井遺跡第7次調査 (KM98-7)

### 1. はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町1～4丁目、南亀井町1～5丁目一帯に所在し、旧大和川の支流である長瀬川の右岸の沖積地に位置する。周辺には東に跡部遺跡・西に竹瀬遺跡・北に久宝寺遺跡・加美遺跡(大阪市)があり、南側には長原遺跡(大阪市)・城山遺跡などがある。

当遺跡は、昭和43(1968)年、平野川改修工事の際、多量の弥生土器が出土したことによって発見された遺跡である。それ以後、大阪府教育委員会による5回にわたる遺跡範囲確認調査が行われ、昭和44(1969)年、近畿自動車道予定地内では、(財)大阪文化財センターによる試掘調査が始められた。その後、昭和53(1978)年からは長吉ポンプ場築造工事に伴う発掘調査、昭和55(1980)年からは近畿自動車道建設に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによつて行われている。その結果、東西・南北500m以上の範囲をもつ複合遺跡であることが明らかにされている。

今回の調査地は、平安時代までの埋没河川(旧大和川の一支流である「古平野川」)上に営まれている亀井旧聚落内の道路敷下にあたり、平成9年度実施の亀井遺跡第5次調査(KM97-5)地点から西50m地点に位置している。



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成10年度第一工区)に伴うもので、当研究会が亀井遺跡内で実施した7度目の調査にあたる。当地では、現地表より1.2m程度までは、既設の水道管やガス管などの切り替え時に掘削されていることがわかつていたため、それ以下の掘削について2月12日から調査を行うことになった。

擾乱・盛土などを除去すると現地表下1.5m程度で含水量の多い粗砂に至り、現地表下2.6m程度で掘削不能となつたため、急速地盤改良を行うことになった。地盤改良終了後の2月23日にそれ以下の掘削を行うことになり、同日、工事掘削終了時点までの掘削に立会い、写真撮影・断面図作成などの記録保存作業を行って調査を終了した。

### 2) 検出構造と出土遺物の概要

今回の発掘調査は、土層断面の観察にとどまった。観察できた土層は盛土以下の7枚である。

第1層 黄褐色粗砂、層厚1.1m、含水量はきわめて多い。  
この層の下部で須恵器片1片が出土した。須恵器片の出土位置は現地表下2.4m、T.P.+6.6m付近である。

第2層 青灰色中砂、層厚0.25m。

第3層 灰色粘質シルト、層厚0.07m、河川底に堆積したと思われる層である。

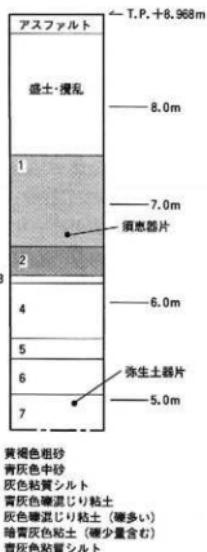
第4層 青灰色疊混じり粘土、層厚0.6m、上面の標高はT.P.+6.2m前後である。

第5層 灰色疊混じり粘土(疊多い)、層厚0.2m前後、均一な礫をきわめて多量に含む。

第6層 暗青灰色粘土(疊少量含む)、層厚0.3m前後、均一な礫をごく少量含む。

第7層 青灰色粘質シルト、層厚0.4m以上、この層上部で弥生土器片が1片出土した。土器片の出土位置は現地表下4.0m、T.P.+5.0m付近である。

このうち第1層～第3層が埋没河川「古平野川」に関連するもので、東50m地点の(KM97-5)では、現地表下1.2m以下の1.5m間(T.P.+6.25～7.75m)に河川内堆積土があり、層中から土師器片や古墳時代後期以降の須恵器片が若干出土している。



第2図 柱状図(S=1/50)



上層掘削状況(北から)



下層掘削状況(北西から)

また、KM97-5では、この埋没河川の底より約0.5m下の青灰色粘土(T.P.+5.6~5.8m)で、弥生時代後期初頭の落ち込み状遺構から壺が数点まとまって出土しており、さらにその下約0.5mの緑灰色粘質シルト・青灰色砂質土・オリーブ灰色砂質シルト中(T.P.+5.0~5.2m)には弥生時代中期後半(第IV様式)の遺物が含まれていた。当地で検出された第7層中の弥生土器片は、これらの遺物と同時期のものと考えてよいだろう。

### 3.まとめ

当地で検出した埋没河川は、長瀬川から分岐して、植松・太子堂・跡部を経て亀井・竹渕へ至る大河「古平野川」にあたり、のちの奈良街道と重複するものである。現在の地図から追える「古平野川」の流路は、横松3丁目付近で長瀬川から南北方向に分岐した後、国道25号太子堂交差点付近を最南端として弧状にめぐり、亀井町1丁目付近を最北端として再び弧状にめぐるS字状のカーブを持ち、中央環状線亀井交差点付近で現在の平野川に一致している。S字状のカーブを持つ部分は、現在の平野川より北側に位置している。

この埋没河川と一致する近辺の調査では、河川内の堆積土層中からは古墳時代前期~奈良時代の遺物が出土しており、河川上面では、奈良時代~平安時代後期以降の生活面が検出されている。

これらのことから、「古平野川」は古墳時代前期以降奈良時代ころまでは奈良街道と重複するコースを流れているが、次第に流路が南下・縮小したと同時に、自然堤防は安定し、そこを選んで居住地として利用されるに至ったものと考えられる。

#### \*参考 「古平野川」流路上のおもな発掘地

市教委→八尾市教育委員会、研究会・(財)八尾市文化財調査研究会

遺跡名	調査主体(略号)	所在地	埋没河川と遺構・遺物の関係	文献番号
跡 部	研究会(AT83-2)	跡部本町2-46	河川上面に平安時代後期~鎌倉時代の集落遺構	①・④
	市教委	跡部本町2-44-1		②
	市教委(62-307)	跡部本町2-47-1		③
太子堂	研究会(AT94-18)	跡部本町3地内	河川中に奈良時代の遺物 河川底に古墳時代前期(布留式古)の遺物	⑥
	研究会(TS91-3)	太子堂2地内	河川上面に奈良時代前期の溝	⑦
	研究会(TS93-5)	東太子1地内	河川中に奈良時代の遺物	⑧
亀 井	研究会(TS94-6)	太子堂3・4地内	河川中に古墳時代前期(庄内・布留式古)の遺物	⑨
	研究会(KM97-5)	亀井町1・2 跡部本町4地内	河川中に土器類・須恵器片(古墳時代後期以降) 河川下0.5mに弥生時代後期初頭の遺構 河川下1.0mに弥生時代中期(IV)の遺物	⑩

#### 参考文献

- 西村 歩 1984「9. 跡部遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告5』(財)八尾市文化財調査研究会
- 鶴村友子 1985「1. 跡部遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告19 八尾市教育委員会
- 米田敏幸 1988「1. 跡部遺跡(62-307)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I』八尾市文化財報告19 八尾市教育委員会
- 米田敏幸・西村 歩 1991「跡部遺跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要5』八尾市教育委員会
- 高萩千秋 1994「X太子堂遺跡第5次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則 1997「IV跡部遺跡第18次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会
- 成海佳子・藤田道子 1997「VII太子堂遺跡第3次調査」同上
- 成海佳子 1997「VIII太子堂遺跡第6次調査」同上
- 古川晴久 1998「7. 亀井遺跡第5次調査(KM97-5)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』



VII 亀井遺跡第8次調査 (KM98-8)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南龜井町4丁目地内で実施した公共下水道工事（10-21工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査で報告する龜井遺跡第8次調査（KM98-8）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第499号 平成10年11月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年3月23日～3月26日（実働夜間3日）にかけて、岡田清一・樋口 薫を担当者として実施した。調査面積は約48m<sup>2</sup>を測る。
1. 本文の執筆は2. 調査概要 2) 基本層序は樋口、その他は岡田が行った。編集は岡田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	41
2.調査概要.....	42
1) 調査の方法と経過.....	43
2) 基本層序.....	43
3) 検出遺構と出土遺物.....	45
3.まとめ.....	45

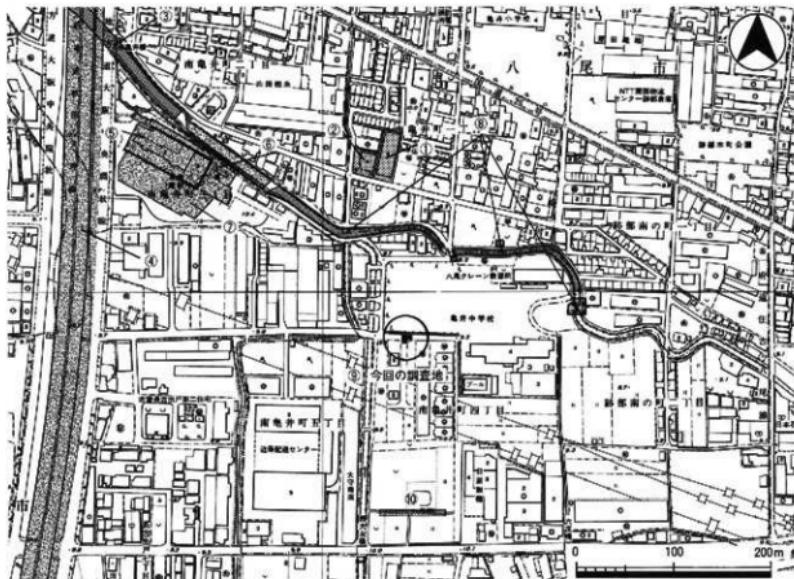
## VII 亀井遺跡第8次調査 (KM98-8)

### 1. はじめに

亀井遺跡は、旧東除川と旧平野川の二河川に挟まれた自然堤防上に立地する。行政区画上の遺跡範囲は亀井町1～4丁目・南亀井町1～5丁目で、南北約0.8km・東西約0.6kmがその範囲とされている。当遺跡周辺には、北に加美南遺跡（大阪市）・久宝寺遺跡、東に跡部遺跡、南に城山遺跡（大阪市）・長原遺跡（大阪市）、西に竹渕遺跡が隣接する。

当遺跡は、昭和43年の平野川改修工事に伴う調査<sup>③</sup>によってはじめて遺跡の存在が判明し、以後、大阪府教育委員会および財団法人大阪文化財センター（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）による長吉ポンプ場・近畿自動車道建設に伴う調査が順次実施され、弥生時代～中世に至る複合遺跡であることが明らかになった。なかでも1978年～1980年に実施された長吉ポンプ場築造に伴う調査<sup>⑤</sup>では、弥生時代中期に比定される竪穴住居・井戸・土坑・溝といった居住域を構成する数多くの遺構が大量の遺物とともに発見され、「拠点集落」としての性格を示すものとして注目された。今回の調査地は、ここから南東に約300mの地点に位置する。

今回の調査地周辺では、現在までに数件の調査が実施されている。当地から北へ約200m地点で昭和63年に当研究会によって実施された第1次調査<sup>①</sup>では、弥生時代中期（畿内第IV様式）<sup>註3</sup>



第1図 調査地位置図 (S = 1/5000)

第1表 周辺における調査一覧表

地図番号	調査地	調査面積	調査期間	調査機関	文献
①	八尾市南龜井町4丁目 41-1	約200m <sup>2</sup>	昭和63年11月7日～ 24日	(財)八尾市文化財調査研究会	「(財)八尾市文化財調査研究会報告19」
②	八尾市南龜井町1丁目 39-2・6・40-2	約200m <sup>2</sup>	平成元年6月12日～ 7月4日	(財)八尾市文化財調査研究会	「(財)八尾市文化財調査研究会報告19」
③	八尾市南龜井町2丁目 ・竹瀬東1・2丁目 地内他		昭和43年～	大阪府教育委員会	「八尾市龜井遺跡発掘調査概要」
④	八尾市南龜井町1・2 丁目 大阪市加美南5丁目・ 長吉出戸7丁目		昭和54年6月1日～ 昭和61年2月15日	大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター	「龜井」 「龜井(その2)」 「龜井(その3)」
⑤	八尾市南龜井町3丁目 地内他		昭和53年5月24日～ 昭和55年3月25日	(財)大阪文化財センター	「龜井・城山」
⑥	八尾市南龜井町3丁目 地内他		昭和55年6月1日～ 昭和56年10月31日	(財)大阪文化財センター	「龜井遺跡I」 「龜井遺跡II」
⑦	八尾市南龜井町3丁目 地内他	2,819m <sup>2</sup>	平成3年5月～ 平成5年11月	大阪府教育委員会	「1992・1993年度龜井遺跡発掘調査概要」
⑧	八尾市南龜井町1丁目 ～跡部南の町1丁目		昭和63年9月～ 平成元年3月	大阪府教育委員会	「1998年度 龜井遺跡発掘調査概要」
⑨今回の 調査地	八尾市南龜井町4丁目	約48m <sup>2</sup>	平成11年3月23日～ 26日	(財)八尾市文化財調査研究会	本報告
⑩	八尾市南龜井町4丁目 44-1・45-1	約174m <sup>2</sup>	平成9年10月22日～ 30日	(財)八尾市文化財調査研究会	「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」

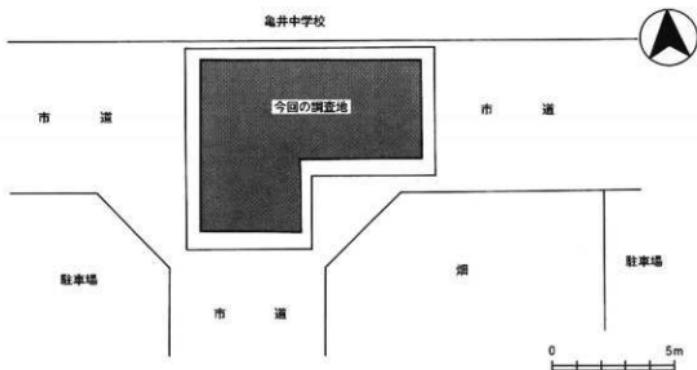
の土器棺を伴う周溝墓1基、弥生時代後期末の土坑4基・溝1条・落込み状造構1箇所が検出されている。また同年、当地から北へ約100m地点で大阪府教育委員会によって実施された平野川改修工事に伴う調査⑧では、弥生時代の集落を画すると考えられる溝群、古墳時代の小区画水田跡、中世～近世にかけての重複した水田造構がみつかっているほか、古代の水田床土内からは、26枚もの和同開弥が、縛錆の状態で出土している。また、第1次調査地の西側で平成元年に当研究会によって実施された第2次調査②では、弥生時代後期の溝5条・土坑2基・小穴4個、弥生時代中期初頭～中期末の溝状の落込みが検出されている。そして、本調査地の南西に位置する地点で平成9年に当研究会によって実施された第6次調査⑩では、奈良時代の落込み4箇所、平安時代前期の溝1条が検出されている。なお、第6次調査を実施するにあたっては、八尾市教育委員会による造構確認調査が平成3年に実施され、T.P.+7.6～8.0m間の地層内から平安時代前期頃に比定される完形の瓶子をはじめ多数の須恵器片がみつかっている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当研究会が龜井遺跡内で実施した第8次調査にあたる。調査は、付近の工場関係の大型車による物資搬出入に障害をきたす等の諸事情から、夜間に実施する事となった。調査対象となる立坑は、南北長7m・東西長9mで南東部が窪み、平面形は「L」字形を呈する。面積は、約48m<sup>2</sup>を測る。

掘削は、現地表(T.P.+9.25m)下1.3m前後に堆積する水道・ガス管等の埋設時の客土・盛土を重機により排除した後、以下T.P.+5.7mを測るまでの2.25m前後の地層については、機械

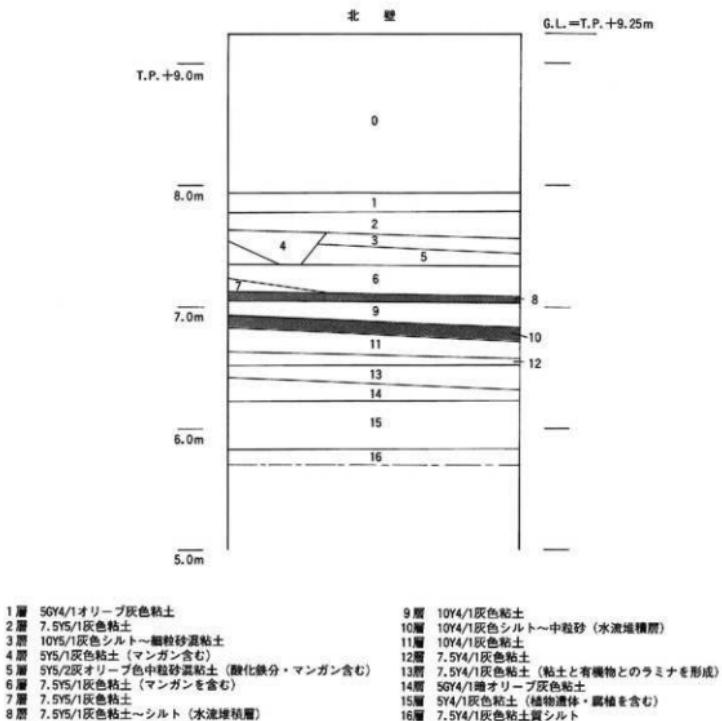
第2図 調査区位置図 ( $S = 1/200$ )

と人力を併用して層毎に掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

## 2) 基本層序

本調査では、現地表(T.P.+9.25m前後)下3.55m前後までを、機械と人力を併用して掘削を進めていった。その結果、現地表下1.25m前後までが擾乱および客土層に相当し、この部分を0層とした。以下、現地表下1.25~3.55m(T.P.+5.7~8.0m)までの2.3m内の地層については、粘土優勢の水平な堆積が認められ、比較的安定した堆積様相を呈する。なおここでは、調査区の北壁において実施した地層断面観察で確認された普遍的に存在する17層を摘出して基本層序とした。

- 0層 7.5Y4/2灰オリーブ色中疊混極粗粒砂～細疊。本調査地内の北部にはコンクリート暗渠が既存しており、本層はそれらの敷設に伴う搅乱および客土層に該当する。
- 1層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。グライ化の著しい地層である。このグライ化は地下水位の上下によるものではなく、0層の影響によるものと思われる。
- 2層 7.5Y5/1灰色粘土。マンガンを雲状に含む。
- 3層 10Y5/1灰色シルト～細粒砂混粘土。雲状にマンガンを多量に含む地層である。本層の上方は土壤化の影響でよく締まっている。
- 4層 5Y5/1灰色粘土。管状のマンガンを多量に含む地層である。本層の上方では酸化鉄分斑も見られる。酸化鉄やマンガンの影響か、よく締まった地層である。本層は3層上面から切り込む遺構の埋土の可能性も考えられる。
- 5層 5Y5/2灰オリーブ色中粒砂混粘土。上方において雲状にマンガンを、下方において雲状に酸化鉄分をそれぞれ多量に含む地層である。上方部分は土壤化しているものと思われる。
- 6層 7.5Y5/1灰色粘土。5層よりも粘性に富んだ地層である。層内には管状にマンガンが散在している。
- 7層 7.5Y5/1灰色粘土。6層よりも粘性に富んだ地層である。夾雜物をまったく含まない純粹な粘土層である。



第3図 基本層序模式図 (S = 1/4)

- 8層 7.5Y5/1 灰色粘土～シルト。粘土～シルトで形成された水平ラミナ層である。シート状に入る洪水堆積物であるが、本層がどの方向から供給されたものかは不明である。
- 9層 10Y4/1灰色粘土。夾雜物をまったく含まない純粹な粘土層である。
- 10層 10Y4/1灰色シルト～中粒砂。シルト～中粒砂で形成された水平ラミナ層である。西から東に向かうに連れて層厚を増し、粗粒度組成も粗くなる。本調査区より西方に供給源をもつ洪水堆積物と考えられる。
- 11層 10Y4/1灰色粘土。夾雜物などをまったく含まない純粹な粘土層である。
- 12層 7.5Y4/1灰色粘土。地層内に炭酸鉄が散在する。
- 13層 7.5Y4/1灰色粘土（粘土と有機物によるラミナ）。粘土と植物遺体や腐植などの有機物と

で形成された水平ラミナ層である。閉塞した湿地帯のような環境を呈していたものと思われる。

14層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。夾雜物などをまったく含まない純粹な粘土層である。

15層 5Y4/1灰色粘土。植物遺体や腐植を多量に含む。

16層 7.5Y4/1灰色粘土質シルト。

## 2) 検出遺構と出土遺物

遺構および遺物は検出されなかった。

### 3.まとめ

今回の調査では遺構・遺物は確認されなかった。しかし、本調査地に近接する地点で実施された第6次調査では、奈良時代～平安時代の遺構が検出されており、本調査においても同レベルのT.P. +7.6m付近<sup>註8</sup>で3層上面から切り込まれる4層が存在し、層位的・レベル的に勘案すれば、当該期に相当する遺構内埋土である可能性が高い。その下層約0.2m～0.5m間(T.P. +7.1m～6.8m)に堆積する8層・10層については、平野川改修工事に伴う調査成果から照合すると、レベル的に古墳時代前期以降に比定され、旧平野川の氾濫を起因とする洪水堆積物と思われるが、あくまで推測の域であり、今後の周辺の調査に委ねたい。さらにその下層で確認し得た12層～16層(T.P. +5.7m～6.8m)については、植物遺体や炭酸鉄を含む地層が観察されることから、当地が少なくとも居住域を形成するには不向きな環境であったことを示すものと言える。

#### 註記

- 註1 石神 怡 1971.3『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 註2 寺川史郎・金光正裕 1980.12『亀井・城山 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター
- 註3 近江後秀 1984.4『亀井遺跡－南亀井町4丁目41-1の調査－』(財)八尾市文化財調査研究会報告19
- 註4 森井貞雄 1989.3『1988年度 亀井遺跡発掘調査概要 一八尾市南亀井町・跡部南の町所在一』大阪府教育委員会
- 註5 成海佳子 1989「10.亀井遺跡(KM89-2)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28
- 註6 高萩千秋 1998「8. 亀井遺跡第6次調査(KM97-6)」『平成9年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財團法人 八尾市文化財調査研究会
- 註7 清 肇 1992.3「17. 亀井遺跡(91-255)の調査」『八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書
- 註8 前掲註6



北壁西部〈T.P.+5.7m～8.0m付近〉(南東から)



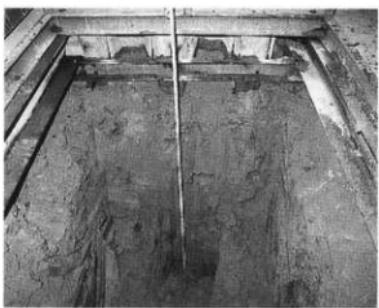
北壁東部〈T.P.+5.7m～8.0m付近〉(南から)



北壁最深部〈T.P.+5.7m付近〉(南東から)



南東部〈T.P.+5.7m付近〉(東から)



南東最深部〈T.P.+5.0m付近〉(東から)



調査風景(南西から)

VIII 心合寺山古墳第3次調査（S O98-3）

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大竹5丁目地内(「新池」)で行った、堤体改修工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する心合寺山古墳第3次調査(SO98-3)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第409号 平成10年10月7日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成10年10月26日～平成11年1月20日(実働31日)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は193m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査・内業整理に参加した補助員は、以下のとおりである。  
飯塚直世・岩本順子・河本清・北潟良江・高橋宏幸・田島和恵・都築聰子・松尾実(現(財)大阪府文化財調査研究センター嘱託)・宮崎寛子・山口拓也(五十音字順)。
1. 本書への執筆・編集は成海が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	47
2.調査の方法と経過.....	49
3.検出遺構と出土遺物.....	49
1)層序.....	49
2)検出遺構.....	49
3)出土遺物.....	50
4)出土遺物観察表.....	58
4.まとめ.....	60

## VII 心合寺山古墳第3次調査(SO98-3)

### 1. はじめに

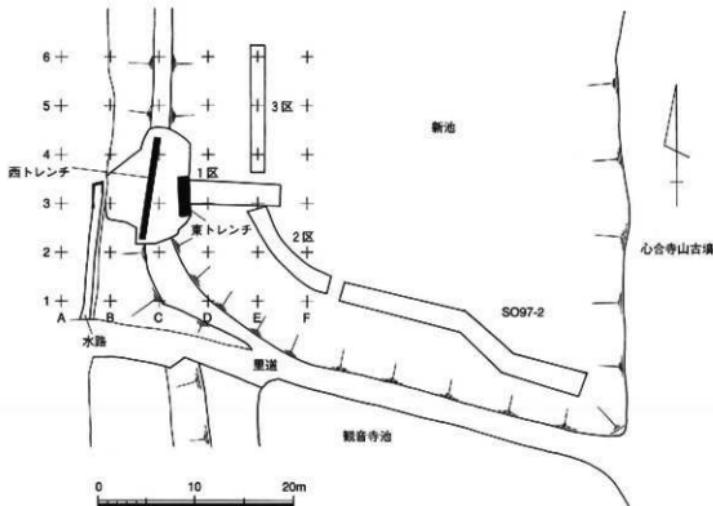
心合寺山古墳の位置する八尾市北東部の大竹・楽音寺地区一帯には、西の山古墳(古墳時代前期末)・花岡山古墳(同中期初頭)・心合寺山古墳(同中期前葉)・鏡塚古墳(同中期後葉)などが存在している。心合寺山古墳は、現在のところ、中河内で最大の規模をもつ前方後円墳で、周濠を含めた全長は250m前後である。また、心合寺山古墳の南西側では古くから瓦が採集されており、南西側の周濠(観音池)内からも礎石や屋瓦が出土したことから、古墳の南西側に秦氏一族の氏寺と考えられる心合寺跡が推定されている。



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

八尾市教育委員会では、史跡整備のための発掘調査を、平成4(1992)年度から行っており、数々の成果が得られている。平成9(1997)年度の調査では、墳丘西側くびれ部の平坦面で埴輪列が検出され、3段集成の古墳であることが確認されたことから、從来140m前後とされてきた墳丘長は、160m以上になることがわかった。また、平成10(1998)年度の調査では、前方部頂部の平坦面にも埴輪列のあったこと、またその内側には葺石により区画された方形壇状遺構のあったこと、後円部の墓壙の確認などが行われ、この地域一帯の首長墓にふさわしい内容が明らかにされた。さらに平成11(1999)年度の調査では、墓壙内部で3基の粘土櫛が検出されたほか、短剣や衝角付冑・短甲などの副葬品が検出されている。当調査研究会では、平成元(1989)年度に北西側周濠「新池」の北西隅で樋管取り替え工事に伴う発掘調査(SO89-1)を、同9(1997)年度に「新池」南~東の岸で堤体改修工事に伴う発掘調査(SO97-2)を行っており、今回の調査は第3次調査(SO98-3)にある。

今回の調査は、平成9~11(1997~1999)年度の3年間にわたって行われる予定の「新池」堤体改修工事(第2期)に伴うものである。当初の予定では、平成10年10月26日~平成11年1月8日の日程で、樋管改修部分約150m<sup>2</sup>・堤体法面基礎部分約93m<sup>2</sup>を調査することとなっていたが、業者の不都合により、平成10年12月2日から平成11年1月10日までの間、作業を中止せざるを得なくなった。このことから工期のがたることとなり、市下水道部・市教育委員会・当調査研究会の三者協議によって、調査面積を減じる処置が講じられた(埋蔵文化財調査指示の変更について 八教社文第573号 平成11年1月7日付)。変更後の調査面積は、堤体法面基礎部分の北部50m<sup>2</sup>分を減じた約193m<sup>2</sup>である。



第2図 調査地設定図 (S = 1/500)

## 2. 調査の方法と経過

調査地はSO97-2地点の西～北の延長線上にあり、新池の南西部にあたる。既存の樋門が池の南西コーナーに位置しており、そこから堤を横断する形で、西へ樋管が据えられている。調査区は、既存の樋管改修部分と昨年同様池の法面基礎部分からなり、便宜上前者を1区、後者のうち取水部(樋門)より南東側を2区、北側を3区と呼び、1区から調査を行うこととした。

1区は、里道となっている堤頂部を断ち割る形で調査を進めるため、周辺の整理・養生などは特に厳重に行なった。また、池の周囲から堤にかけて草木が茂っていたため、草刈り、伐採などに数日を費やした。それらの作業終了後、1区の堤部分から掘削をはじめることとなった。

まず、1区堤部分の表土(0.3～0.9m)を重機により除去した後、既存の樋管(樋-1)底までをすべて人力で掘削し、樋-1のほか、土坑を検出した。その後、西側斜面・東側池底を人力によって掘削し、樋-2の直上部まで全体的に掘削が進んだ頃、2区・3区の調査を併行して行い、ともに調査終了後、即座に工事にとりかかった。1区での平面的な調査を終了した後、樋管掘形より外側(北側)を重機によって掘削し、堤横断面の写真撮影・図化等の記録作業を行い、すべての調査を終了した。なお、樋-2の取水部(樋門)については、排水作業が順調に行えず、周囲がヘドロ状となつたため、人力掘削は断念した。その構造等については、各部材を重機によって引き上げた後、復原したものである。

地区割については、工事用の測量杭を利用して、東西・南北の5m方眼を用いた。調査区全域を覆う方眼を設定し、南西隅を基準点とし、東西線は南から1・2・3……、南北線は西からA・B・C……と呼んだ。南北の軸は真北に沿っている。

## 3. 検出遺構と出土遺物

### 1) 層序

1区では、第1層表土以下第57層までの土層を確認した。このうち、2区・3区では、第18層～第23層が認められた。

堤上面の標高はT.P.+30.2～30.5mを測り、第1層表土の厚さは0.3～0.4m程度、堤頂部および東西の斜面を覆っている。第2層～第4層は、明黄色～明褐色微砂～シルト主体、第5層～第6層は褐色シルト主体となる。いずれも厚さは0.1～0.3m程度、堤中央部で高く、弓なりに堆積している。第6層上面で、樋-1・樋-2の上部掘形を検出し、この層上面を第1面(堤-1)とした。第1面最高部の標高はT.P.+29.7mで、現在より約0.8m低い。

第7層も褐色シルト主体の土層であるが、ほぼ水平に堆積し、東側は第8層～第10層によって削られており、第8層～第10層を除去した面を第2面(堤-2)として捉えた。この第8層～第10層は堤の東側斜面にのみ存在するもので、巨礫が多く含み、シルトや微砂がブロック状に混入している。第2面の標高はT.P.+29.5mである。

第11層は黄褐色粗砂がほぼ水平に堆積するもので、この層上面まで、前述の第8層～第10層が切り込んでいる。以下、第12層～第15層までは、緑灰色シルト～微砂や茶褐色粘土質シルト～小礫などがほぼ水平に薄く堆積しており、「版築」を思わせる堆積状況を示している。

第16層～第23層は、堤東側斜面裾部～池内部に堆積するものである。第16層は表土直下に位置するもので、厚さは0.2～0.4m、上面の標高は27.1～27.2m、東へゆるやかに下がっている。中央

部には幅0.6m・深さ1.5m程度の掘り込みがあり、その内部の上層に第16層・下部に第17層が堆積している。第16層・第17層は淡茶褐色疊混シルトに灰色粘土・褐色粘土の細かいブロックが多量に含まれており、樋一2掘形2段口の埋土に似ていることから、樋一2補修の際の掘り込みと考えられる。第18層～第20層は黄褐色粗砂～疊主体で灰色粘土のブロックが混入する。第21層～第23層は明褐色～茶褐色のシルトからなる。第24層～第27層は堤中央部から東側斜面に堆積するものである。いずれも茶褐色系の疊混じりシルトからなり、第24層には灰白色シルトの混入が見られる。第24層～第26層はおむね堤の上面に堆積しているが、第27層は堤部東側斜面、第26層の下に堆積している。第24層上面で土坑を検出した。この層上面を第3面(堤一3)と呼んだ。上面の標高はT.P.+28.7mを測る。

第28層～第34層も堤中央部から東側斜面に堆積するものである。主に茶褐色疊～シルト主体の土層に灰色・茶褐色の粘土～シルトのブロックが混入するが、第28層は緑灰色シルトの薄い堆積、第34層は緑灰色シルト～疊で、頂部にシルト、裾部に疊が多く含まれており、これら2層は裾部へ向かって厚みを増している。このうち、第29層からは上師器羽釜(4)・瓦器小型椀(24)、第33層からは瓦器椀(25)・瓦質羽釜(8)などが出土している。第36層～第43層は東側斜面ではみられず、シルト・微砂・粗砂からなる互層で、下ほど砂粒は粗くなり、色調も青みを帯びる。第44層・第45層は現在の堤中央部から西側にのみ堆積するもので、第44層は茶褐色疊混粘土質シルトに灰色粘土の細かいブロックが混入し、第45層は明褐色のシルト～粗砂で、ここでも上から下へ砂粒は粗くなる。

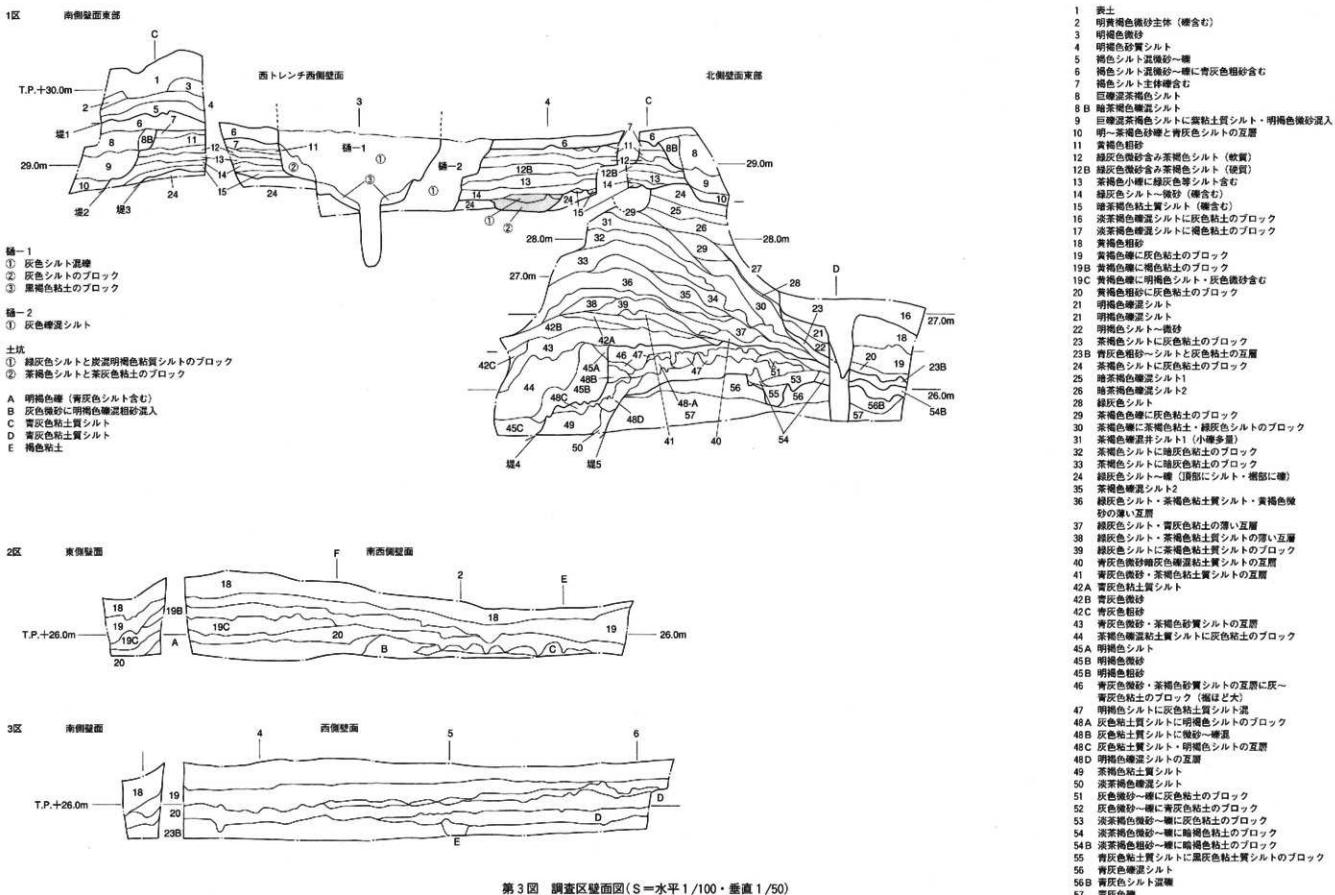
第46層以下は現在の堤中央部から東側にかけて堆積するもので、第46層上面は平坦で、東側へは緩やかに下り、西側は直線的に切り立っている。第46層は青灰色微砂と茶褐色砂質シルトの互層に灰～青灰色粘土のブロックが混入している。第47層は明褐色シルトに灰色粘土質シルトが混入するもので、堤部にしかみられない。第48層～第50層は西側斜面に堆積するもので、第48層は灰色粘土質シルト～明褐色シルトのブロックや互層、第49層・第50層は淡茶褐色粘土質シルト・疊混シルトである。第51層～第55層は疊～シルトに粘土～粘土質シルトのブロックを多量に含む層である。第52層以外は西側で部分的にしかみられない。壁面観察からでは、第53層～第55層が第57層の上面を切り込んで構築される遺構内部の堆積土層のように見える。第52層・第53層からは瓦の小破片が出土している。これらのことから第46層上面に堤形成の画期があるものと考え、第46層～第55層を堤一4とした。堤一4上面の標高はT.P.+26.4～26.6mを測るが、東側は堤一3に伴う池内部の堆積土層である第27層に切られている。

第56層・第57層は現在の堤中央部以東に見られ、青灰色の色調を呈する疊混シルト～疊で、西側では、第48層～第50層に切られるように、急激に落ち込んでおり、東へはゆるやかに下っている。ここにも堤形成の画期があるものと考え、ここを堤一5とした。堤一5上面の標高はT.P.+25.9～26.2mを測る。

## 2) 検出遺構

調査の結果、1区では樋2本(上から樋一1・樋一2)ほか土坑が検出され、おびただしい量の瓦のほか、埴輪や奈良時代以降中近世の土器・陶磁器類がごく少量出土した。2区・3区では池内部の土層堆積を確認した。ここでは、1区の概要のみ記す。

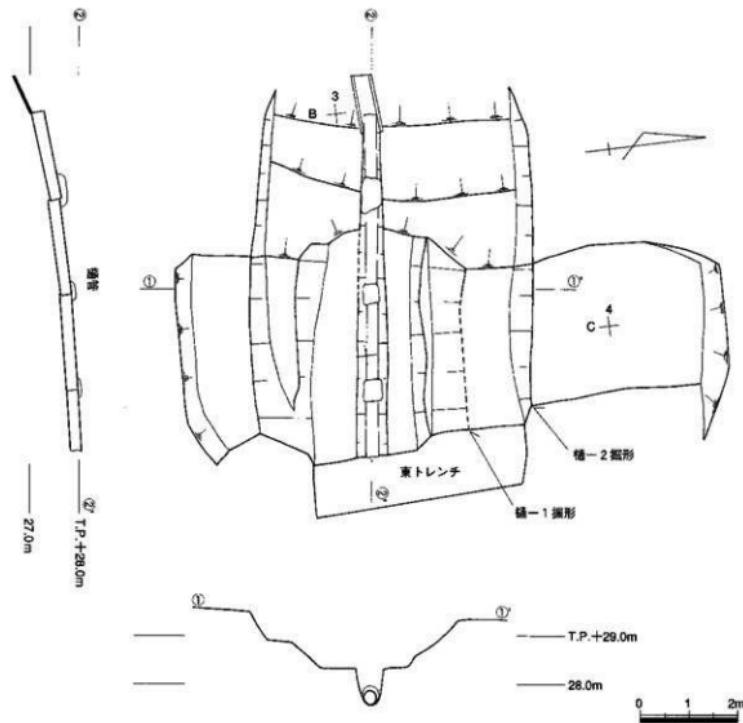
■ 心合寺山古墳第3次調査(SQ98-3)



1区は堤を東西に横断する調査区で、堤頂部である里道上面の標高はT.P.+30.3~30.6mを測り、南が高く北が低い。里道部分および堤斜面の表土以下第5層までの土層(厚さ0.3~1.0m)を機械掘削した後、幅1m程度の段を設けて人力掘削を行い、調査を進めた。ここでは、頂部から約1m下の標高29.3~29.6mの第6層上面で桶-1・桶-2の掘形を検出した(第1面)。また、そこより0.1~0.2m下の第7層上面(T.P.+29.2~29.3m)では、堤の東側が1段下る地形を検出した(第2面)。さらに、T.P.+28.7m前後の第24層上面では土坑を検出した(第3面)。

### 桶-1

第6層上面で検出したが、構築面は表土直下であろう。現在の堤部分でのみ検出した。桶管は長さ1.8mのヒューム管4本からなり、継ぎ目はコンクリートで充填されている。取水部(桶門)もコンクリート製で、堤と池の境界線上にある。西側の排水部には、コンクリート製のU字溝が、西側の水路にまで伸びている。掘形の最大幅は約4mで、高まりである堤の中央部では2段掘りとしているが、斜面にあたる部分では、ほぼ垂直に掘り下げられている。その後、掘形底のやや南により、幅0.5m・深さ0.8m程度を溝状に掘り下げ、ヒューム管を据えて埋め戻している。



第4図 桶-1 平断面図(S=1/100)

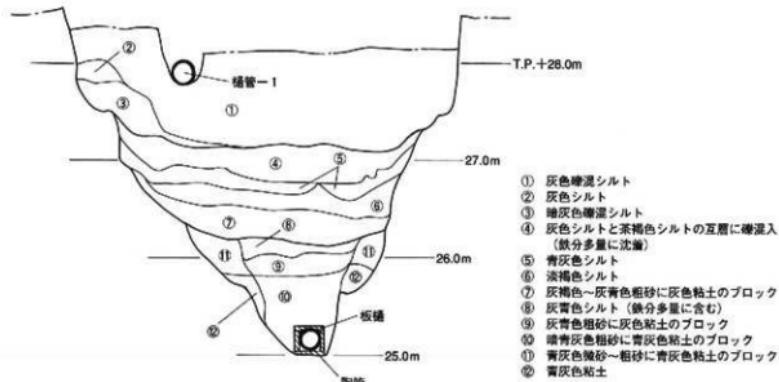
樋管底の標高は、東端がT.P. +27.75m、西端がT.P. +26.61mを測り、東西約8mの距離で1.14mの比高差がある。掘形内部は、ほとんどが①層疊混じり灰色シルトで充填されているが、南側の肩に②層疊に灰色シルトのブロック(きわめて硬い)、下段の樋管掘形際に③層黒褐色粘土のブロックがある。①層から土師器羽釜(3)、瓦質擂鉢(10・11)、平瓦(70)・軒丸瓦(51)、③層から軒丸瓦(55)、道具瓦(65)、樋管掘形内部から寛永通宝(38)、丸瓦(67)等が出土している。

### 樋一2

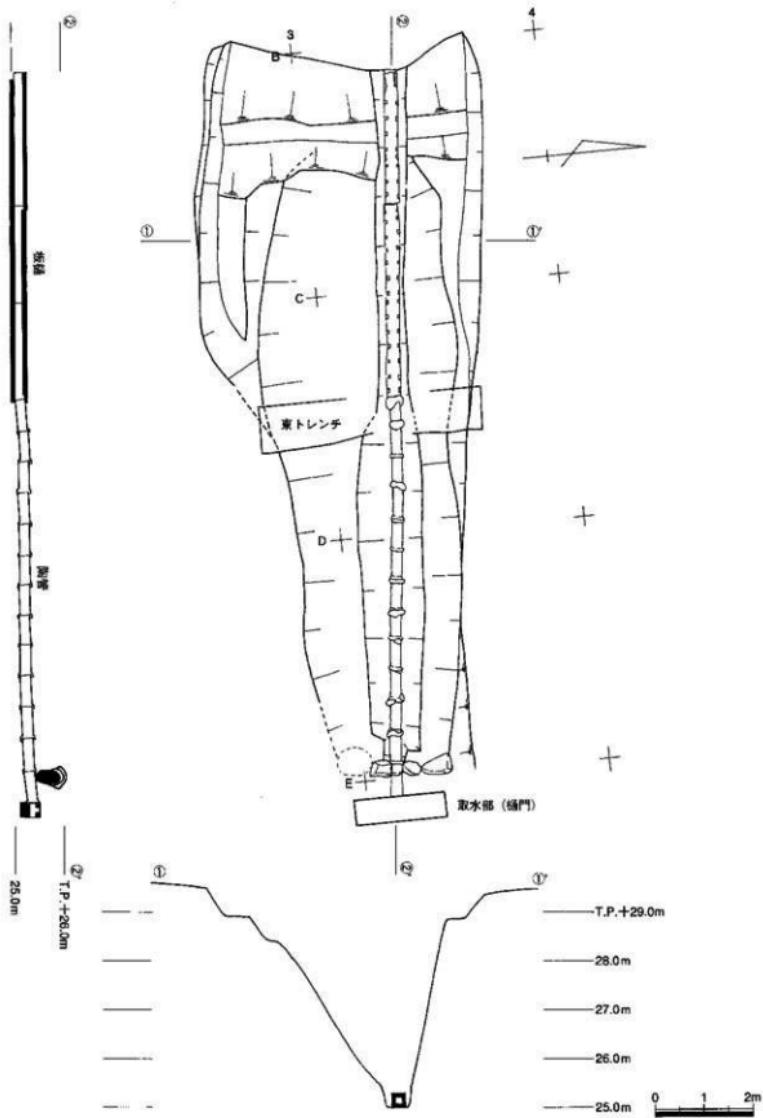
樋一1とはほぼ同一レベルで掘形を検出した。南側の肩は樋一1と共に、北側は0.7m程度広い。東側の取水部(樋門)は石製、樋管は東側の池部分では陶管、西側の堤部分では板樋が用いられており、西側の排水部はコンクリートで補修されている。

掘形の幅は3.1~5.8mで、東の池側が狭く、堤中央部以西が広くなっている。池側では2段掘りで、上段の幅2~3m・深さ0.3~1.8m、2段目の幅は1.2m・深さ1.0~1.5mを測り、底に陶管を据えて埋め戻している。堤部分では、上から1m前後を2段に掘り、その後3m以上を急角度で掘り下げて、最終的に幅0.5~0.6m・深さ0.5m程度の溝状に掘り窪めた底に板樋を据えている。各陶管の接合および陶管と板樋の接合には漆喰が用いられている。樋管底の標高は、東端がT.P. +25.17m、西端がT.P. +24.93mを測り、約14.5mの距離で比高差は0.24mである。

掘形内部の埋土は、1段目(①~③)・2段目(④~⑦)・3段目(⑧~⑫)からなる。1段目は堤部でしか見られないもので、①層は灰色疊混じりシルトできわめて硬く、②層灰色シルト・3層暗灰色シルトは、南側で部分的に見られるものである。2段目は上層に④層灰色シルトと茶褐色シルトの互層に疊が混入するもので、鉄分を多量に含んでいる。中層に⑤層灰青灰色シルト・⑥層層淡褐色シルト、下層に⑦層暗褐色~灰青色粗砂に灰色粘土のブロックが堆積する。3段目は掘形外側と内側に分かれ、内側には上から⑧層灰青色シルト(鉄分多量に含む)、⑨層灰青色粗砂に灰色粘土のブロック、⑩層暗青灰色粗砂に青灰色粘土のブロック、外側には⑪層青灰色微砂~粗砂に青灰色粘土のブロック、⑫層青灰色粘土が堆積する。



第5図 東トレンチ西側壁面図(S=1/50)



第6図 桁-2平断面図( $S = 1/100$ )

取水部(桶門)の上部構造は、板状に加工した花崗岩3枚を鳥居のように組み合わせたもので、天井部の石材中央部には方形の穴があけられ、そこを通して角材2本が取り付けられている。

取水口にも直方体に加工した花崗岩が用いられており、上面・東側面(池側)・西側面(陶管側)の3方に円形の穴があけられている。上面の穴には先の角材が、東側面の穴には楔形の木製品が「栓」のように据えられており、西側面の穴には陶管が挿入されていた。

調査前には、天井部の石材の上に梯子が取り付けられていたことから、ここに上って2本の角材を操作して栓を動かし、水位の調整を行ったものと推測される。

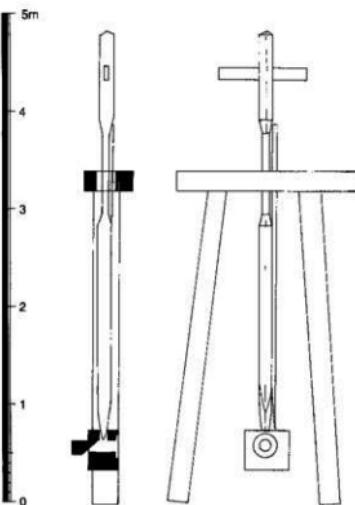
取水部の各部材の法量・特徴等は表1にまとめた。

表1 取水部(桶門)部材一覧表

部 位	法量 (cm)			特 徴
	長さ	幅	厚さ	
天 井 部	145	51	21	中央部 一边20cmの方形の穴が貫通する。 一边10cm・深さ5cmの方形の穴(桶穴状)
				一边10cm・高さ5cmの方形の穴山部を掘り出す。(柄状)
脚 部	321	25~26	17~22	上 一边10cm・高さ5cmの方形の穴山部を掘り出す。(柄状) 東~西 径12cmの円孔が貫通し、背面は径26cm・深さ2cmに広げられる。
				上 径12cmの円孔が中ほどまであけられ、東~西の孔と交わり連丁字形を呈する。
取 水 部	25	30	40	上 端 45度の角度で四隅が切り落とす。 下 端 尖る。取水部に挿入する。
				上端から90~45cmの範囲は太さ10cm四方に減じる。
角 材 (太)	410	15	15	上端から45cmの位置に把手状の板材(90×9×4.5cm)が差込まれる。
				下 端 尖る。
角 材 (細)	310	7	5	下 端 尖る。
栓	20	9	9	西 端 一边を三角形に切り落とし、取水部に挿入する。

表2 板樋部材一覧表\*各部材の番号は西から1・2・3...とした

部 位	法量 (cm)			接続部の加工	釘穴の位置
天板1*	275	26~28	4	東 端 北邊を4×20cmの三角形に切る。	33cm間隔で8個×2列
				西 端 北邊を4×35cmの三角形に切る。	20~33cm間隔で7個×2組
天板2	403	28~30	4	東 端 裏 2×10cmの範囲を斜めに削る。	
				東 端 内 2×10×5cmのL字形に切る。	
鶴板1 (南)	270	14	6~7	東 端 外 2×10cmのL字形に切る。	西端から67cmと230cm
				東 鋼 内 3×6cmのL字形に切る。	
鶴板1 (北)	266	14	6~7	西 端 外 2×10×5cmの台形に切る。	
				東 鋼 外 4×30cmのL字形に切る。	
側板2 (南)	206	14	7	西 端 内 4×30cmのL字形に切る。	西端から28cmと139cm
				東 端 凸字形に切る。	
側板2 (北)	209	14	7	西 端 凸字形に切る。	
				東 端 四字形に切る。	
側板3 (南)	209	14	7	東 端 内 10cm分をL字形に切る。	西端から12cmと176cm
				西 端 凸字形に切る。	
底板1	246	26	6	東 端 内 13cm分を丸く切る。	西端から15cmと178cm
				底板2 205 28 7 南側 端 3cm幅の溝状に彫り込む。	
底板3	211	30	5		



第7図 取水部(桶門)立面図 (S = 1/50)

陶管(第10図-49)は一方が受け口状にふくらむ円筒形を呈しておらず、受け口の部分を東に向かって計13本が組み合わされていた。東端は取水口に、西端は板樋に取り付けられている。板樋との接合および各陶管との接合部には水漏れを防ぐためか、漆喰が塗布されている。

板樋(第10図-50)は天板・側板・底板を箱型に組み合わせたもので、天板2枚・側板3枚・底板3枚からなり、全長6.78m・幅25~27cm・高さ22~26cm・板の厚さ4~7cmを測る。

2枚の天板は、両側縁に釘穴が穿たれており、接続部には切る・削る等の加工が施されている。側板は3組・6枚からなり、接続部には天板同様の加工が施されている。上端面にのみ、釘穴が4個ずつ穿たれ、天板・底板とは釘(第9図-39)で打ち付けられている。底板は、西端の底板1の内側面にのみ、側板に沿った浅い溝状の彫り込みが認められるが、他に釘穴等の加工はみられない。各部材の法量・特徴等は表1にまとめた。

表3に見られるように、掘形内部からは多量の遺物が出土したが、そのうち図示したものは以下の29点である(第9図~第12図)。

掘形1段目から出土したものは、瓦質大型壺(第9図-13)、瓦器椀(26)、砾石(36)、瓦質土管(第10図-40・42)、軒丸瓦(第11図-52・57)、軒平瓦(62)、道具瓦(66)である。

掘形2段目から出土したものは、土師器羽釜(第9図-4)、瓦質羽釜(9)、信楽焼擂鉢(12)、土師器中皿(18・19)、瓦器小型椀(24)、唐津焼碗(30)、唐津焼小皿(31)、伊万里焼碗(34)、瓦質土管(第10図-43)、軒平瓦(第11図-60)、鬼瓦(63・64)、平瓦(75)である。

掘形3段目から出土したものは、瓦質土管(第10図-41・44~47)、軒平瓦(第11図-61)である。

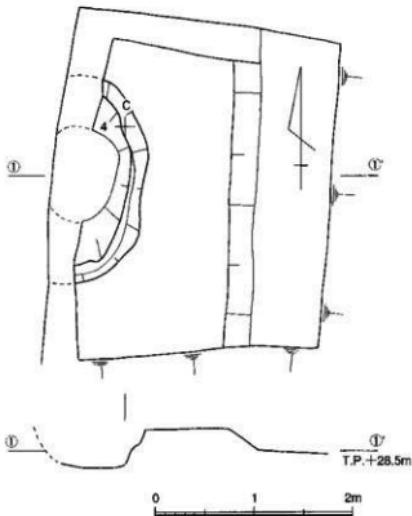
### 土坑

堤部北側西部、T.P.+28.7mの第24層白灰色シルト~微砂上面で検出した。西側は西トレンチおよび西セクションと一致したことから、東側の1/3程度しか検出できていない。

平面の形状は南北に長い楕円形で、規模は南北(長径)2.15m・東西(短径)は1.3m程度に復元でき、深さは0.35mを測る。断面の形状は2段の掘形を持つ逆凸字形で、底は平坦である。

内部堆積土は、上層の①層緑灰色シルトと明褐色粘質シルト(炭混じり)のブロック層、下層の②層茶褐色シルトと茶灰色粘土のブロック層からなり、平安時代後期以降の土師器皿(第9図-20)・鉢(22)のほか瓦器椀や平瓦(第12図-76)などが少量出土している。

土層堆積状況は、第3図 調査区壁面図を参考にされたい。



第8図 土坑平断面図(S=1/50)

### 3) 出土遺物

表下以下堤盛上や掘削形埋土の各層から、弥生時代後期から近世・近代に至るまでの雑多な遺物が出土している。出土量はコンテナ箱(60×40×20cm)に69箱である。

破片数で量のもっとも多いものは平瓦、次いで丸瓦、奈良時代以降の土師器、埴輪、瓦質土管などであるが、いずれも良好な資料とは言い難い。出土遺物の内訳・法量・特徴等は、表3・4および出土遺物観察表に示した。

表3 出土遺物内訳表

種類	弥生		埴輪		土師器(古)		須恵器(古)		土師器(新)		須恵器(新)		黒色土器		瓦質(瓦器)		
	端面の有無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
無																	
第1層～第5層	6		5	27						25	20					6	5
第6層		1	1	13				1		2	20	2				1	1
第7層										1	1						
第11層～第13層			6	1	1					4	13		1	1		5	7
第14層・第15層		1	3			1				5	33		1			4	8
第24層									1		1					2	1
第29層			9					1		5	19	2				2	3
第33層	1	1	1	19		2	1			12	14	2	7		3	9	5
埴門1										2							
埴1 挿形	2	1	4	29						20	20	21	3			1	14
埴管1 挿形	1		2	3													
埴2 挿形1段目	1		4	16			2		9	24		15	1		8	7	
埴2 挿形2段目	2	4	6	41	1		1	2	26	54		15			13	6	
埴2 挿形3段目	1		8	48						11	42	1	2		9	3	
埴西石垣裏込				1							6					1	
第2面東落込				1						2	2		1			2	
土坑			1	4						14	29		3				9
2区第18層			1	3												1	
2区第20層		2	10							2	2		5				
3区第18層				2												1	
計	14	7	45	226	2	4	6	3	140	300	26	54	3	5	72	70	

種類	磁器		陶器		土管		丸瓦		平瓦		軒丸瓦		軒半瓦		その他瓦		その他の	
	端面の有無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	
出土位置																		
無																		
第1層～第5層	3	4	1	1	25	32	96	45	394	426	14	2					キセル	
第6層					26		14			165	111	1						
第7層							4		39	24								
第11層～第13層	1					3	1	6	62	85								
第14層・第15層	1					1	9	7	44	63	2							
第24層							2			9	6							
第29層				4	11	17	5	94	90									
第33層				11	9	57	28	189	176	4		1						
埴門1			1				1	1	12	4	12	2						
埴1 挿形				12	21	24	31	402	297									
埴管1 挿形			1		2	8		7	4								寛永通宝	
埴2 挿形1段目	2	3	2	1		10	21	29	314	392	3	1	1	1	楕石			
埴2 挿形2段目	4		2	3	23	2	112	92	745	816		3	2					
埴2 挿形3段目	2	5	1		23	57	62	60	239	251		1						
埴西石垣裏込						1				4								
第2面東落込							2	1	3	2								
土坑							1	1	20	22								
2区第18層	2	1	1				6	4	18	19								
2区第20層			1			1	17	6	4	27	1							
3区第18層							5	6	16	3								
計	15	13	8	7	123	150	459	322	2826	2822	25	7	6					

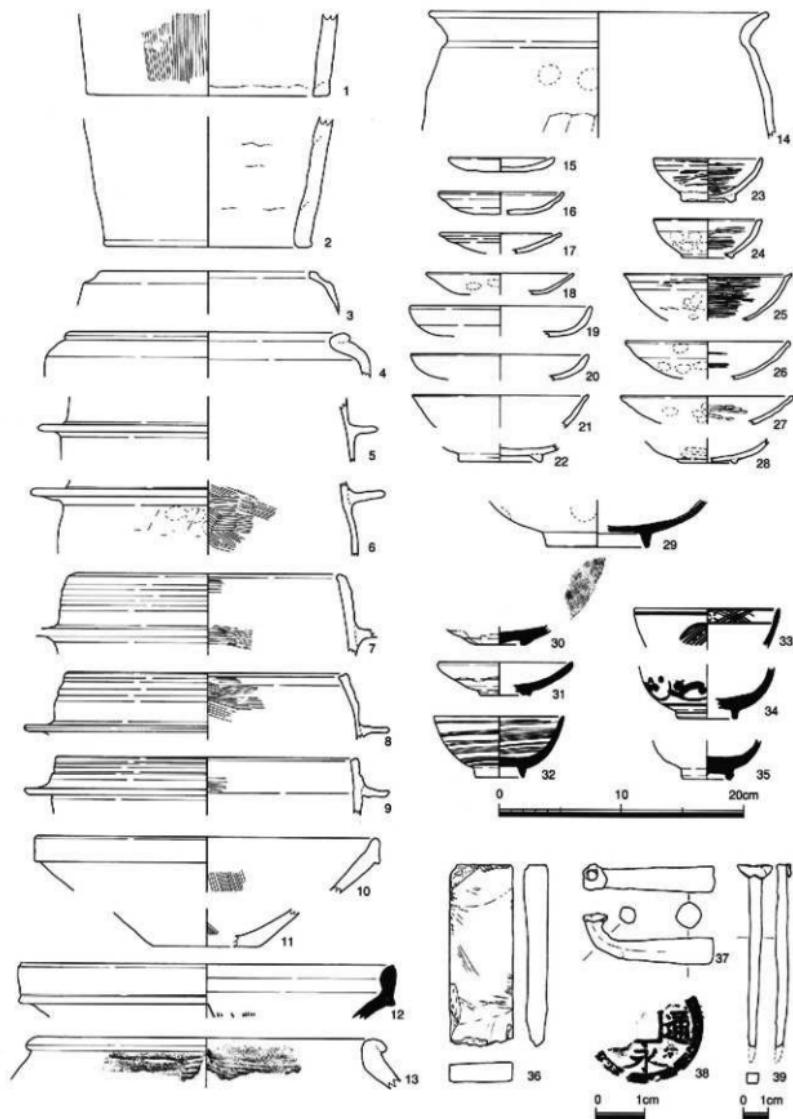
表 4 瓦細分表

\* 横田タクナ

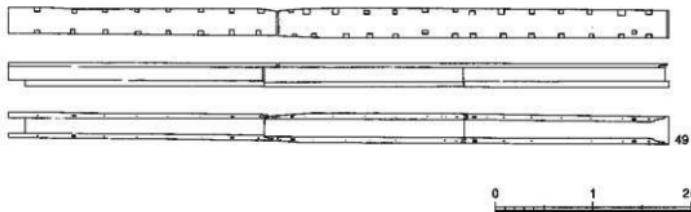
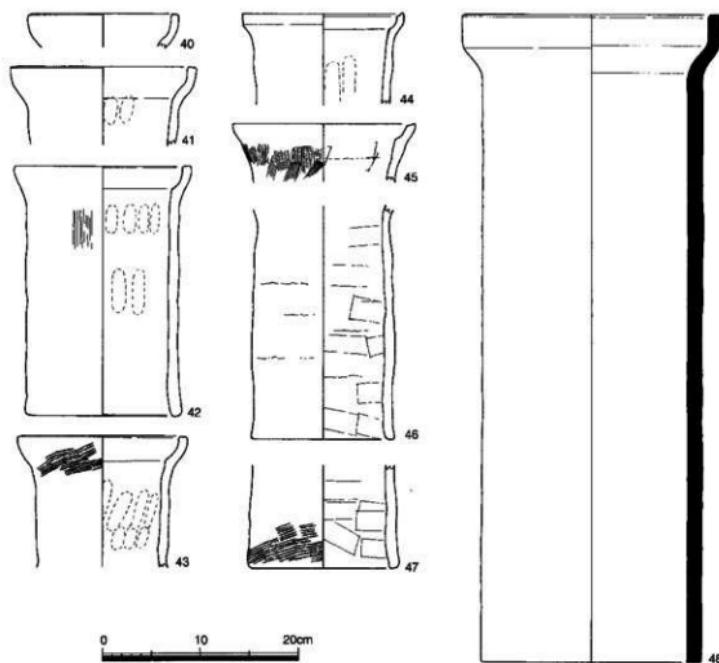
文様タタキ

D	総目次
E	「キ」の字形
F	「山」の字形
G	龜形
Z	その他・不明

\*末尾に「[2]」を付しているのは各タスキの後ナ字をあらわす



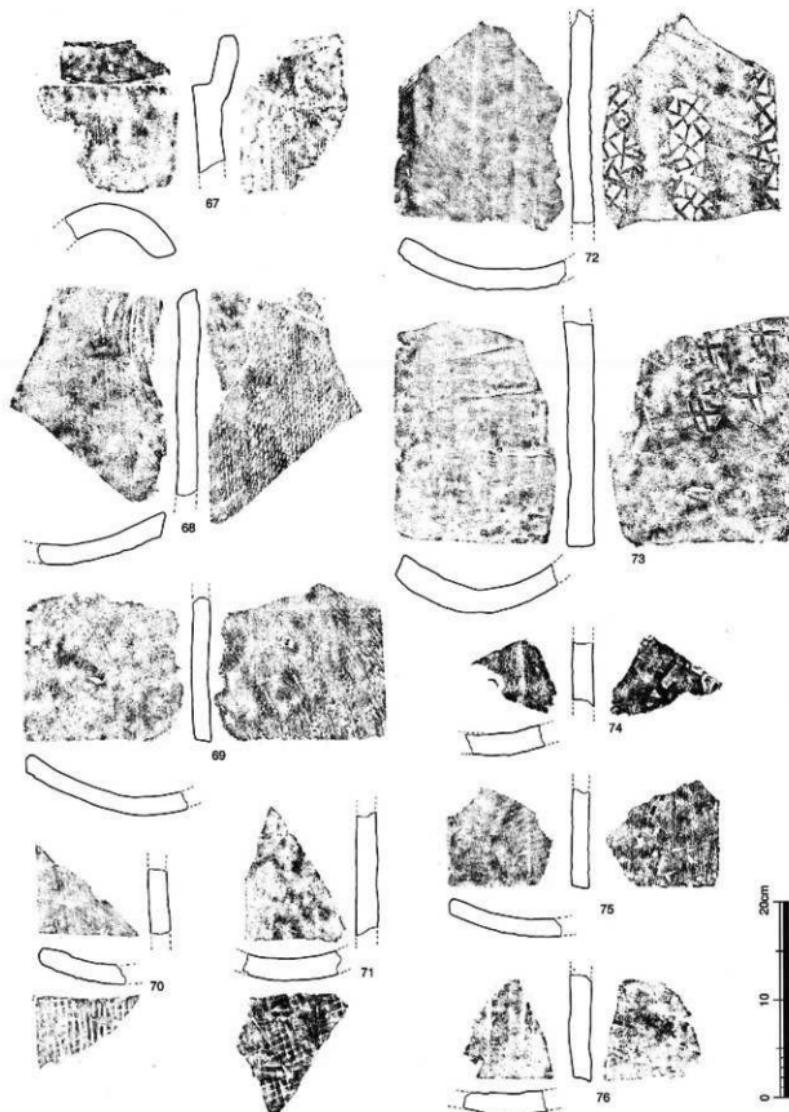
第9図 出土遺物実測図-1 (銭 S = 1/1、キセル・釘 S = 1/2、その他 S = 1/4)



第10図 出土遺物実測図-2 (土管 S = 1/5、板樋 = 1/50)



第11図 出土遺物実測図-3 (S = 1/5)



第12図 出土遺物実測図-4 (S=1/5)

## 4) 出土遺物觀察表

番号/器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	特徴	残存	出土地点
1 円筒埴輪	直径 20.0	淡赤褐色	やや粗	良好	外) 縫ハケ 内) ナデ ・ 黒斑あり	縫部 極小	第1~5層
2 円筒埴輪	直径 17.0	淡灰褐色	密~やや粗	良好	外) ナデ・ハケ 内) ユビオサエ・ナデ	縫部 1/4	第7層
3 土師器羽釜	口径 16.9	淡黄褐色	やや粗	良好	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ	口縁部 1/4	横-1 捜形 ①層
4 土師器羽釜	口径 22.2	淡灰褐色	やや粗~粗	良好	・ 調整不明(表皮剥離)	口縁部 1/8	第29層
5 土師器羽釜	直径 27.8	淡灰褐色	やや粗	良好	外) ナデ 内) ナデ	縫 1/4	第14~15層
6 土師器羽釜	直径 29.0	灰白~明橙褐色	やや粗~密	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ハケ	縫 1/5	第12層
7 瓦質羽釜	口径 21.8	黒灰色 (中) 白灰色	やや粗	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ハケ・ヨコナデ ・ 口縁部に凹鍵孔の段	口縁部 極小	第11層
8 瓦質羽釜	口径 22.8 鉢径 30.0	淡灰褐色~灰黑色	やや粗	良好	外) ヨコナデ 内) ハケ ・ 内面に焼付着	口縁部 1/6	第33層
9 瓦質羽釜	口径 24.6 鉢径 30.0	暗黒灰色 (中) 灰白色	やや粗	良好	外) L1縫部ヨコナデ 内) 鉢以下ヘラケズリ ・ ハケ ・ 烧基面に焼付着	口縁部 1/8	横-2 捜形 2段目④層
10 瓦質擂鉢	口径 28.0	灰黑色	粗	良好	外) ヨコナデ 内) ヨコナデ ・ スリ目16本/2.8cm	口縁部 1/8	横-1 捜形 ①層
11 瓦質擂鉢	底径 8.6	暗灰黑色	粗	良好	外) ヘラケズリ 内) スリ目残存	底部 1/8	横-1 捜形 ①層
12 陶器擂鉢	口径 30.6	灰褐色 (中) 淡灰色	やや粗	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ ・ 摂り目残存	口縁部 1/5	横-2 捜形 2段目④層
13 瓦質大型壺	口径 27.6	灰黑色 (中) 白灰色	密~やや粗	良好	外) 横タキ、口縁部ヨコナデ 内) 横ハケ、口縁部ヨコナデ	口縁~肩部 1/8	横-2 捜形 1段目①層①層
14 土師器壺	口径 27.6	にぶい黄褐色	やや粗	良好	外) 体部ユビオサエ・ケズリ後ナデ 口縁部ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ ・ 口縁部と体部の境に接線	口縁~体部 1/6	第14~15層
15 土師器小皿	口径 8.6 器高 1.2	淡黄褐色	密	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ	口縁~底部 1/4	西側斜面 第1~5層
16 土師器小皿	口径 10.0 器高 1.9	明黄褐色	密	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ	口縁~底足 1/4	西側斜面 第1~5層
17 土師器小皿	口径 9.8	にぶい黄褐色	密	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ	L1縫部 1/8	第2面 東落ち込み
18 土師器中皿	口径 12.0 器高 1.8	淡黄褐色	密	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ	口縁~底部 1/2	横-2 捜形 2段目④層

番号/器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	特徴	残存	出土地点
19 土師器中皿	口径 14.6	にぶい灰褐色	やや粗	良好	- 溝整不明(表皮剥離)	口縁~底部 1/3	横-2振形 2段目④層
20 土師器小皿	口径 14.4	明黄褐色	密	良好	外) ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ	口縁部 極小	土坑
21 黑色土器椀	口径 14.2	黒色 (中)暗褐色	密	良好	外) ナデ、口縁部ヨコナデ 内) ナデ	口縁部 極小	第14・15層
22 土師器杯	高台径 6.5 高台高 0.5	橙褐色	やや粗	良好	外) ナデ 内) ナデ	高台完存	土坑
23 瓦器小型椀	口径 8.8 器 高 3.6 高台径 3.9 高台高 0.3	灰黒色 (中)白灰色	密	良好	外) 内) - 口縁部凹線状にくぼむ	口縁~底部 1/4	西側斜面 第1~5層
24 瓦器小型椀	口径 8.9 器 高 3.2 高台径 4.2 高台高 0.2	灰黒色	密	良好	外) ヨコナデ・ナデ 内) ヨコナデ・ヘラミガキ -	口縁~底部 1/6	第29層
25 瓦器椀	口径 13.8	灰黒色	密	良好	外) ヨコナデ・ナデ 内) ヨコナデ・ヘラミガキ(密) - 口縁端部に沈澱、	口縁部 1/8	第33層
26 瓦器椀	口径 16.3	灰黒色	密	良好	外) ナデ、ヘラミガキ(粗) 内) ナデ	口縁~底部 1/5	横-2振形 1段目①層
27 瓦器椀	口径 14.0	淡灰褐色	密	良好	外) ヨコナデ・ナデ 内) ヘラミガキ	口縁部 1/8	西側斜面 石垣裏込
28 瓦器椀	高台径 4.6 高台高 0.2	淡黄褐色~ にぶい黄褐色	密	良好	外) ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内) ナデ・ヨコナデ - ヘラミガキ痕跡	高台 1/3	第6層
29 陶器鉢	高台径 8.4 高台高 1.1	(輪裏)淡黃色 (胎土)白黄色	密	良好	外) 体部下位に2ヶ所の窪み 内) 見込みに風景画? - 高台脇~裏面露胎	体部~高台 1/4	西側斜面 第1~5層
30 唐津燒碗	高台径 4.1 高台高 0.4	(輪裏)灰黃色 (胎土)白黄色	やや粗	良好	外) カンナケズリ 内) - 兜巾高台、高台脇~裏面露胎	高台 1/2	横-2振形 2段目④層
31 唐津燒小皿	口径 12.0 器 高 2.7 高台径 4.1 高台高 0.3	(輪裏)灰緑色 (胎土)白黄色	密	良好	外) カンナケズリ 内) - 高台脇~裏面露胎	口縁~高台 1/6	横-2振形 2段目④層
32 唐津燒碗	口径 10.5 器 高 5.0 高台径 3.8 高台高 0.9	(輪裏)透明 (胎土)白黄色 - 灰茶色	密	良好	外) 白泥によるハケ目 内) 白泥によるハケ目 - 高台脇~裏面露胎	口縁~高台 1/3	2区第18層
33 磁器碗	口径 11.9	(輪裏)白色 (外須)暗青色 (胎土)灰白色	やや粗		外) 体部に丸文 内) 口縁部に斜格子文(繪垣文?) - 外須の発色悪い	口縁部 1/8	西側斜面 第1~5層
34 磁器碗	高台径 4.7 高台高 0.8	(輪裏)灰綠色 (外須)暗青色 (胎土)白灰色	密 黑色粒含む	良好	外) 花卉文 内) - 外須の発色悪い	体部~高台 1/2	横-2振形 2段目④層
35 陶器碗	高台径 3.8 高台高 0.5	(輪裏)灰黃綠色 (胎土)淡黄色	密	良好	外) 内) - 高台脇~高台は露胎	高台 1/3	第13層
40 瓦質土管	口径 15.4	淡灰色	密	良好	外) ナデ 内) ナデ	口縁部 1/7	横-2振形 1段目①層

番号/器種	法縦(cm)	色調	胎土	焼成	特徴	残存	出土地点
41 瓦質土管	口径 19.0	淡灰褐色	密	良好	外)ナデ 内)ユビオサエ・ナデ	口縁~体部 1/8	桶-2 桶形 3段目⑧層
42 瓦質土管	口径 17.9 基径 15.9 器 高 25.5	淡灰褐~淡褐色	密	良好	外)横ハケ 内)ユビオサエ・ナデ	口縁~器部 1/2	桶-2 桶形 1~3段目
43 瓦質土管	口径 17.4	灰色 (内)淡灰褐色	密	良好	外)口縁部横タキ・ナデ 内)ユビオサエ・ナデ	口縁~体部 1/8	桶-2 桶形 2段目⑤⑥層
44 瓦質土管	口径 16.4	灰黑色	密	良好	外)ナデ 内)ユビオサエ・ナデ	口縁~体部 極小	桶-2 桶形 3段目⑥層
45 瓦質土管	口径 18.7	灰白色	密	良好	外)ナデ・ヨコナデ・ハケ 内)ヨコナデ・ナデ	口縁~体部 1/4	桶-2 桶形 3段目⑥層
46 瓦質土管	基径 14.6	灰色 (内)茶褐色~淡茶色	密	良好	外)ナデ 内)ヘラナデ	口縁~体部 1/4	桶-2 桶形 3段目⑨層
47 瓦質土管	基径 15.4	灰黑色 (内)淡灰茶色	密	良好	外)右上がりタタキ・ナデ 内)ヘラナデ	体部~器部 1/5	桶-2 桶形 3段目⑩層
48 陶器土管	口径 26.5 基径 22.5 器高 66.5	灰赤褐色 (中)暗灰色	密	良好	外) 内)	完存	強管 2
50 軒丸瓦		茶褐色	密	良好	蓮華文 ・瓦当裏面ナデ		第11~13層
51 軒丸瓦		灰褐色 (中)明褐色	密	良好	蓮華文 ・瓦当裏面ナデ		桶-1 桶形 ①層
52 軒丸瓦		茶褐色	やや粗	良好	蓮華文 凸)ナデ 凹)ナデ		桶-2 桶形 1段目①層
53 軒丸瓦		灰褐色	やや粗	やや不良	蓮華文 凸)ナデ 凹)布目痕		第1~5層
54 軒丸瓦		灰褐色	やや粗	良好	巴文 凸)ナデ 凹)布目痕		第1~5層
55 軒丸瓦		黒灰色	密	良好	巴文 ・瓦当裏面ナデ		桶-1 桶形 ②層
56 軒丸瓦		灰黑色	やや粗~粗	良好	・瓦当接合部 凸)ナデ 凹)布目痕、ヘラによる斜格子の刷み		第1~5層
57 軒丸瓦		灰綠~青色	やや粗~粗	良好	・瓦当接合部 凸)ナデ 凹)ヘラによる斜格子の刷み 凹)布目痕		桶-2 桶形 1段目①層
58 軒丸瓦		淡灰褐色	やや粗	良好	・瓦当接合部 凸)ヘラによる斜格子の刷み 凹)布目痕		2区第20層
59 軒平瓦		晴灰白色	やや粗	良好	唐草文 凹)布目痕、広端面際に指頭圧痕 凸)桶口タタキ(斜)後ナデ 裏面に布目痕		第1~5層

番号／器種	法量(cm)	色調	胎土	焼成	特徴	残存	出土地点
60 軒平瓦		灰黑色	やや粗~粗	良好	唐草文 (凹)布目痕 (凸)ナデ		橋-2撮影 2段目⑤⑥層
61 軒平瓦		黒灰褐色	やや粗	良好	唐草文 (凹)布目痕 (凸)ナデ ・ケズリ		橋-2撮影 3段目⑩層
62 軒平瓦		黒灰色	やや粗~粗	良好	唐草文 (凹)布目痕 (凸)ナデ		橋-2撮影 1段目①層
63 鬼瓦		灰色	密	良好	・ 平坦面から丸く突出する部分。		橋-2撮影 2段目⑤⑥層
64 鬼瓦		黒褐色	密	良好	・ 脚部、竹香押圧文 ナデ調整		橋-2撮影 2段目⑤⑥層
65 道具瓦		淡灰色	密	良好	凸)純目タタキ(窓)後ナデ (凹)布目痕 端)ケズリ ・ 縫合と滑面の角度は鋭角		橋-1撮影 ②層
66 道具瓦		淡灰色 (中)黒灰色	密	良好	凸)ナデ (凹)布目痕、縫の痕跡 端)ナデ ・ 当端がねじれた形態を呈する。		橋-2撮影 1段目①層
67 丸瓦		黒灰色	やや粗~粗	良好	凸)純目タタキA2 (凹)布目 端)ケズリ後ナデ		橋-1撮影 ③層
68 平瓦		灰白~黒褐色	密	良好	(凹)布目 凸)純目タタキA 端)ケズリ後ナデ		第33層
69 平瓦		白灰色	密	良好	(凹)純目タタキB2 (凸)布目 端)ナデ		第33層
70 平瓦		灰色	密	良好	(凹)布目B (凸)文様タタキZ 端)ケズリ		橋-1撮影 ①層
71 平瓦		暗灰色	やや粗	良好	(凹)布目B (凸)文様タタキZ(A+B)		第33層
72 平瓦		黒褐色	密	良好	(凹)布目B+ケズリ (凸)文様タタキD 端)ケズリ		第6層
73 平瓦		褐色	密	良好	(凹)布目B+ケズリ (凸)文様タタキE 端)ケズリ		第6層
74 平瓦		淡黄褐~黒灰色	やや粗	良好	(凹)布目B (凸)文様タタキG		第33層
75 平瓦		黒褐色	密	良好	(凹)布目B (凸)文様タタキF2 端)ナデ 端)		橋-2撮影 2段目③⑥層
76 平瓦		灰色	密	良好	(凹)布目B (凸)文様タタキZ2 端)ケズリ		土坑

#### 4.まとめ

堤-2については、東側に陶管が用いられ、西側の排水口にはコンクリートが用いられていることから、近年までに数回の補修が行われていることがわかる。堤下部には板棧が用いられており、底板は1次調査の瓦質樋管の礎板に似ることから、相前後して構築されたものであろう。また、1次調査でも、東側には同様の陶管が用いられていることから、改修の時期もほぼ同時期とみてよいだろう。出土遺物の中に、瓦質土管が比較的多量に含まれていることから、堤-2よりも古い堤が構築されていた可能性は高い。

堤については、断面観察の結果、明確な版築法は確認できず、おもに茶褐色シルト主体の層中に灰色粘土や礫がブロック状に混ざっている状態が多く見られた。1次調査同様、数回の画期が見られる(上から堤-1~堤-5)。

堤-1は堤-2設置までのもので、ほぼ現在と同じ形となっている。表土などを除去した後の頂部の標高はT.P.+29.5~29.7mで、現在よりも0.8m下である。

堤-2は第2面形成以前のもので、現在の堤東端から約1m西から急角度で落ち込んでいる。頂部の標高はT.P.+29.2~29.3mで、現在より1m以上低い。

堤-3は第3面形成時までのもので、西側へ拡張した後東側へも拡張されており、その比高差は2m以上と大規模な盛土がなされている。頂部には平坦面が作られており、上面の標高はT.P.+28.7mである。この上面で検出した土坑からは、土師器中皿・杯または鉢・平瓦などが出土した。また、盛土中の第21層(第3面ベース)・第29層・第33層からは、図示した土師器羽釜(4)・瓦質羽釜(8)・瓦器小型椀(24)・瓦器椀(25)のほか、黒色土器・瓦質土管などが出土していることから、堤-3の構築時期は鎌倉時代ころまで下ることがわかる。

堤-4は西側へ拡張されており、東側へはなだらかな傾斜で池へと続き、最高部の標高はT.P.+26.6mを測る。上面は削平されたようにはぼ水平な平坦面をなし、西端の上部は削り取られたかのようにはぼ垂直近くに落ち込んでいる。盛土中には、瓦等が少量含まれているが、小片のため、時期は明確にできない。

堤-5は今回確認できた最下のもので、第1次調査の1期の堤に対応するものかもしれないが、今回の調査では、建築時期が古墳時代にまで溯り得る確証は得られなかった。堤-4よりさらに東に狭まるもので、上面の標高は最高部でT.P.+26.2mを測る。堤-4同様西側へは急激に落ち込み、東へはなだらかに下っている。

これらのうち、もっとも大きな画期は、堤-4と堤-3の間で、この時期には現在と同じ幅の堤が作られ、その後数回の補修で現在の景観に至ったものと考えられる。

参考文献

- ・原田昌則 1990「心合寺山古墳(S O89-1)」「八尾市文化財調査研究会年報平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉川野乃 1996「史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」「八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業報告1」八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 1998「史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査概報」八尾市文化財紀要8 八尾市教育委員会
- ・成海佳子 1999「VI心合寺山古墳第2次調査(S O97-2)」(財)八尾市文化財調査研究会報告62 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・藤井淳弘 1999「史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査概報」八尾市文化財紀要9 八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1999「史跡 心合寺山古墳第7次発掘調査現地説明会資料」 八尾市教育委員会



写真1 1区調査風景(南から)



写真2 宽永通宝出土状況(北から)



写真3 桁一1東部(東から)

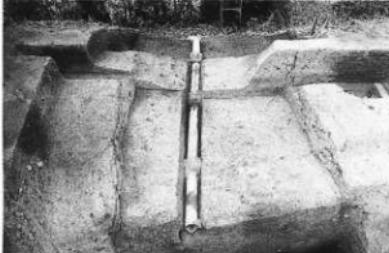


写真4 桁一完掘(東から)



写真5 堤頂部第2面(南から)



写真6 堤頂部第2面(北から)



写真7 調査風景(北西から)



写真8 第3面土坑(西から)



写真9 桶一2完掘(東から)



写真10 桶一2完掘(西から)



写真11 桶一2板樋(南から)

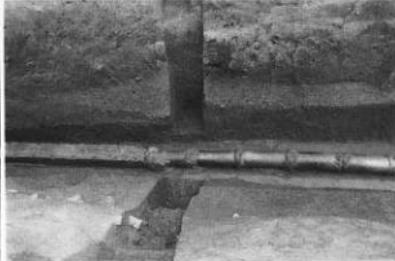


写真12 桶一2板樋・陶管(南から)

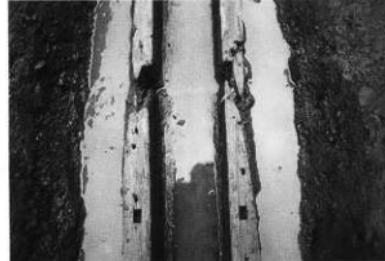


写真13 側板1(奥)・2(手前)接続部(東から)



写真14 側板2(奥)・3(手前)接続部(東から)



写真15 板樋・陶管接続部(東から)



写真16 桶一2取水部



## IX 成法寺遺跡第17次調査（SH98-17）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市光南町2丁目54番地（光南公園）で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第17次調査（SH98-17）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋666-2号 平成10年3月17日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年9月10日～9月17日（実働5日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約49m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては西岡千恵子・市森千恵子・中西明美・森本瑞江が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー田島和恵が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	73
2.調査概要.....	74
1) 調査の方法と経過.....	75
2) 基本層序.....	75
3) 検出遺構と出土遺物.....	75
3.まとめ.....	80

# IX 成法寺遺跡第17次調査 (S H98-17)

## 1. はじめに

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、行政区画では光南町1・2丁目・清水町1・2丁目・南本町1~4丁目・高美町1・2丁目・松山町1丁目・明美町1丁目・陽光園1丁目に所在する。地理的には、河内平野内の中央を北西方向に流下する長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上(標高9~10m)に立地している。当遺跡周辺の同一沖積地上には東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡、南に矢作遺跡、北に東郷遺跡が接している。

当遺跡範囲内では、昭和56年度以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会により発掘調査が継続的に実施されており、弥生時代中期~室町時代に至る複合遺跡であることが確認されている。今回の調査地付近では、市教委が昭和56年度に実施した発掘調査で古墳時代前期の方形周溝墓や古墳時代後期の掘立柱建物などの遺構を検出している。また、その市教委調査の隣接地では当調査研究会が平成元年度に実施した第5次調査(SH89-5)<sup>註1</sup>で古墳時代前期に比定される方形周溝墓の南西部の一部、新たに古墳時代中期の埴輪棺などの墓域を検出している。さらに当調査地より東北東へ約200mの市立成法寺中学校内で昭和57年~平成3年度の4回にわたり校舎建替工事などに伴う調査を実施し、古墳時代前期~中世の遺構・遺物を検出<sup>註2</sup><sup>註3</sup>している。



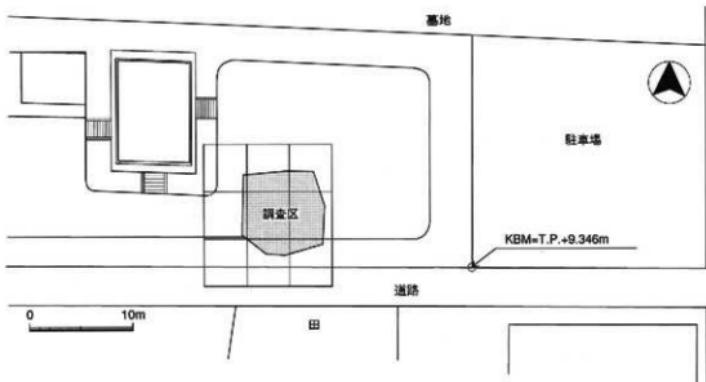
第1図 調査地位置図及び周辺図

出している。今回の調査地は当遺跡範囲内の南西部に位置し、当調査研究会が実施する第17次調査（SH98-17）にあたる。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、防火水槽設置工事に伴う発掘調柶である。発掘調柶は市教育委員会の指示書に基づいて工事申請者と協議を重ね、市教育委員会・申請者・当調査研究会の三者による協定書の締結を交わした。調査地は公共施設である公園敷地内の一角に設けられる防火水槽の設置場所を対象とした。防火水槽は直径7.0mを測る筒状で、その設置場所を囲う形で一辺7.0mの方形の調査区を設定した。調査面積は上面で約49m<sup>2</sup>を測る。掘削にあたっては、隣接地の調査成果を参照して設定した掘削深度にしたがって調柶を進行した。まず、現地表下1.2mまでの土層について慎重に機械掘削で排除し、対象となる古墳時代後期～中世に比定される時期の土層の検出を行ったが、中世期の遺物を含む土層を確認し、その下層上面で遺構の有無を確認したが調柶区内では検出できなかった。しかし調柶区の南西角で旧耕土直下から切り込む井戸1基を検出した。この井戸を残し、さらに弥生時代後期～古墳時代前期の時期の地層までの掘削を進めた。その結果、現地表下約2.5～2.8mで黒灰色の粘土層を検出し、それより以下について人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。



第2図 調柶区位置図及び設定図

### 2) 基本層序

調柶区では掘削時に観察した全体の土層状況および四方の壁面を総合し、基本となる13層を抽出して基本層序とした。基本層序は、以下のとおりである。

第1層 盛土。層厚0.6～1.5m。調柶区南部では東西方向の排水管路の埋設により深くまで削平されている。調柶区東部から北西部にかけて深く削平されている。

- 第2層 旧耕土。層厚0.1~0.3m。北西部に畝状の高まりがみられる。他はほぼ水平な堆積であるが、部分的に公園の造成工事により搅乱されている。
- 第3層 淡緑灰色砂質土。層厚0.1m。調査区北部の一部でみられた。
- 第4層 灰青色疊混じり砂質土。層厚0.3~0.5m。酸化鉄の斑点がある。南西部の一部のみ堆積する層厚0.1m前後の第4'層灰茶青色疊混じり砂質土である。
- 第5層 淡褐色疊混じりシルト。層厚0.1~0.4m。調査区北西部へ行くに従い層厚が薄い。
- 第6層 明褐色粘質シルト。層厚0.2~0.6m。中世期のものと思われる土器器・瓦器の小片をごく少量含む。
- 第7層 茶灰褐色シルト。層厚0.1m前後。この上面が中世面と考えられる。全体にフラットな面で、調査区北東部の一部で畦畔状に高く盛り上がった部分がある。
- 第8層 淡灰綠色微砂シルト。層厚0.2m。調査区南東部に堆積がみられ、起伏のある土層。
- 第9層 淡灰褐色粘土。層厚0.2~0.5m。全体に厚く堆積する層である。
- 第10層 青灰色粘質シルト。層厚0.1~0.2m。調査区東部に薄く堆積する層で、調査区の北西部では途切れている。
- 第11層 青灰色シルト質粘土。層厚0.1m前後。調査区北東部にのみ堆積する層である。
- 第12層 灰黒色粘土。層厚0.2~0.3m。12'は暗青灰色粘質シルトで調査区北西部のみみられる層である。この層内より古墳時代前期のものと思われる土器器の小片1点が出土している。この層は粘着性の強い粘土で、調査区北部にやや起伏がみられる。
- 第13層 淡灰青色粘質シルト。層厚0.3m以上。古墳時代前期のベース面と考えられるが遺構と思われるものはなかった。

### 3) 検出遺構・出土遺物

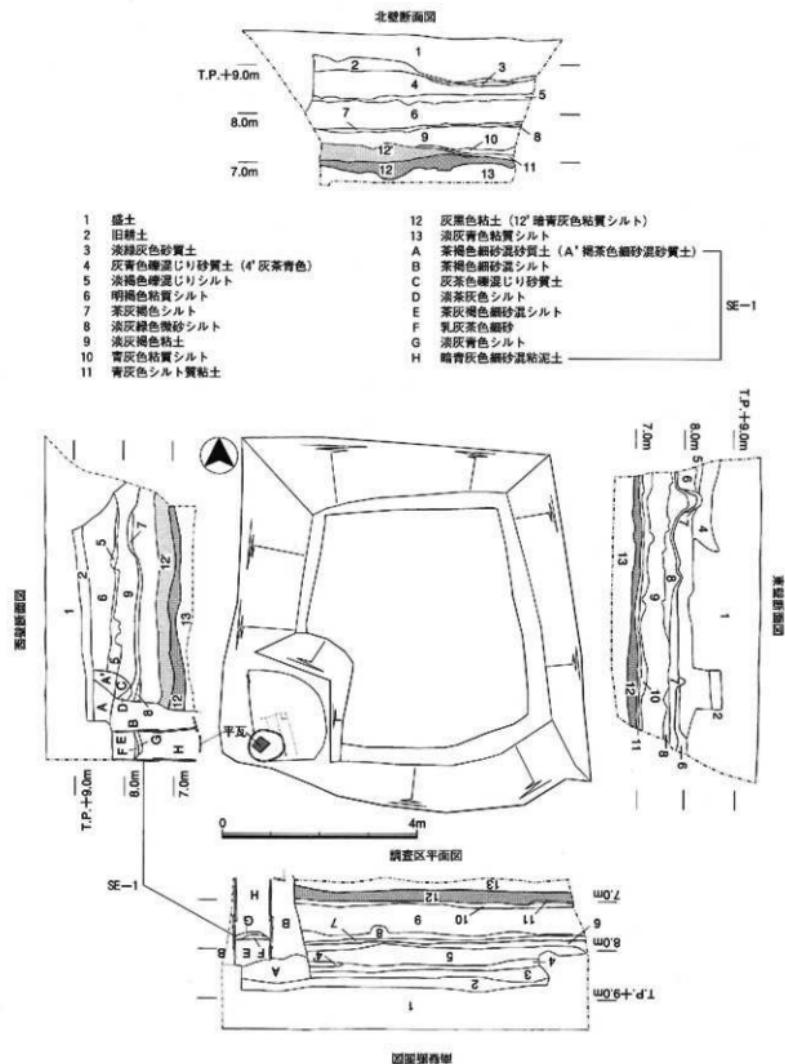
調査の結果、現地表下1.0m (T.P. +8.7m) 前後に存在する第4層上面で、近代の井戸1基 (S E-1) を検出した。また中世期の小片遺物を若干含んだ第6層直下の現地表下1.8m (T.P. +7.9m) 前後に存在する第7層上面で調査を実施したが、東壁の北側一部で畦畔状の高まり部分がみられただけで、遺構の検出はなかった。下層では現地表下約2.5~2.9m (T.P. +6.8~7.2m) に堆積する古墳時代前期の遺物を含む第12層下の第13層上面の調査を行ったが、北東から南西方向に緩やかに起伏しながら深くなるのがみられた程度で遺構と思われるものは存在しなかった。今回の調査で出土した遺物量はコンテナ箱2箱分で、ほとんどが井戸 (S E-1) の遺物である。

以下、検出した近世の井戸について記す。

#### 井戸 (S E)

##### S E-1

調査区の南西部角で検出した井戸側のある井戸である。検出面は耕土直下の現地表下約1.0m前後 (T.P. +8.7m) である。そこから約40cm下より桶⇒桶⇒方形枠組み側を組み合わせた井戸側を検出した。掘形は北東部のみの検出で、検出部で確認した径は約2.5mを測る。その掘形の中央付近に井戸側を設置していた。井戸側は桶状の木枠一段とその下部に設置された方形枠組み側で構成されている。一段目の井戸側は、長さ約0.8m、幅約0.1~0.15m、厚さ約0.025mの継長の板材17枚で構成された桶状の側で、上が径約0.7~0.75m、下が径約0.8mを測り、下がやや大きい口径の断面台形状を呈している。この桶の北東側にある板材(1)の中央やや上(縦約40cm、横約

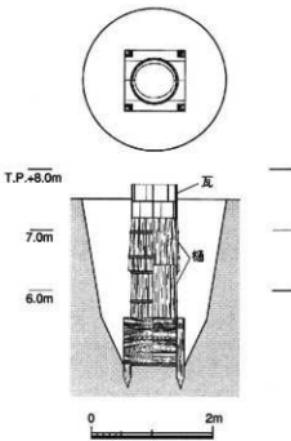


第3図 調査区断面図 (S=1/100)

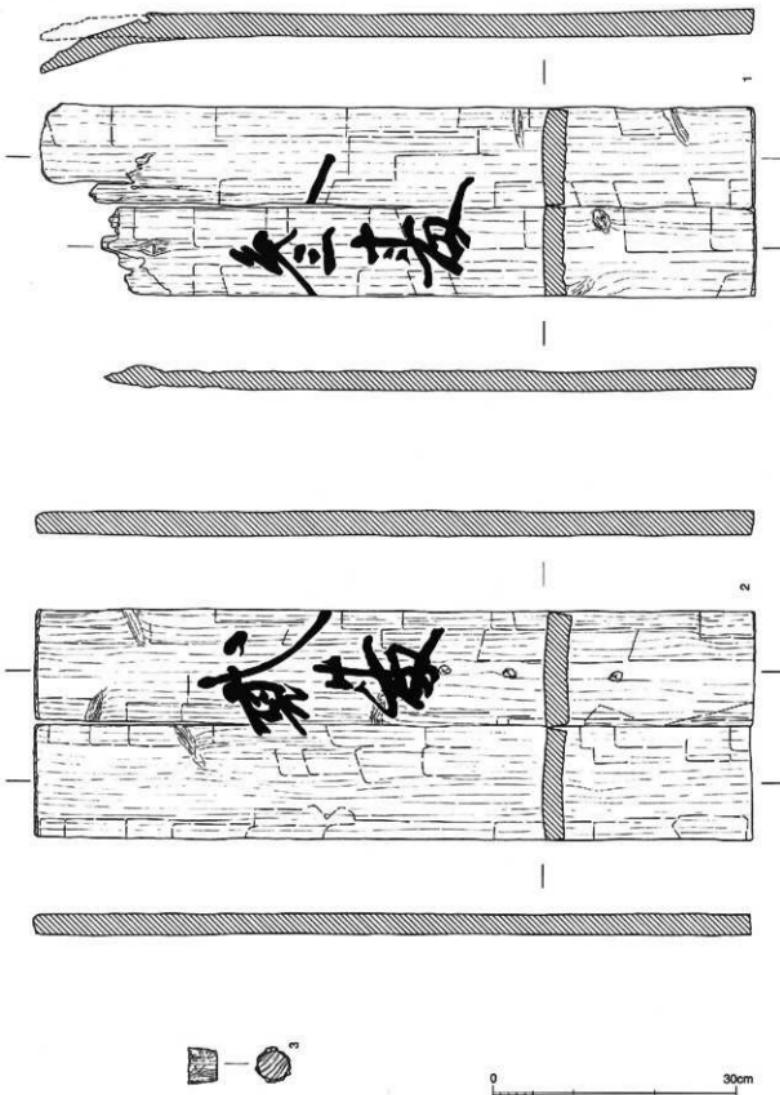
20cmの範囲)に「參番」と書かれた墨書があった。二段目の井戸側は、長さ約0.8m、幅約0.1~0.15m、厚さ約0.03mの縦長で一段目の桶と同じ17枚の板材で構成された桶側で、上が径約0.7~0.75m、下が径約0.8mを測る。下の口径が大きく断面台形状を呈する。この桶の東側にある板材(2)の外面の中央よりやや上(縦約40cm、横約20cmの範囲)に「貳番」と書かれた墨書があった。これらの桶は縦長の板材を固定するための縦がほぼ等間隔に各2箇所あった。桶は上部が口径の小さい方を上にして下段の桶に被せて積んでいる。最下段には方形枠組み側を設置している。角材(一辺約0.15m)4本を四隅の支柱とし、その支柱に縦方向に長い長方形の柄を横木に組み、外側からは、厚さ約1.5cmの縦長の板材(幅15~25cm)を一辺の面に3~4枚並べ固定している。上面には、縦長(幅0.3~0.4m、長さ約0.3~1.0m、厚さ約3cm)の板材を南~北方向に並べ、桶側の設置部分の内側を円形に加工している。東側の板材(4)には北側に升をかたどった「升の絵」が墨で描かれていた。また、この板材は支柱の角に納まるようにカットしている(カット部分に線引き墨が上面に残る)。上面には鋸痕、下面には手斧で加工した痕跡がみられる。さらに板面には釘を打ち付けた痕跡4箇所や釘の残存4箇所が残存しており、建築材などの廃材を再利用したものと思われる。

最下段の南西部および最下部については壁面崩壊による危険性があったため、調査を断念した。なお、井戸側の内部から井戸側用瓦と思われる平瓦(幅26cm、高さ24cm、厚さ2.8cm)が出土していることから、一段目の桶側の上に瓦組みの井戸側が設置してあったものと思われる。井戸の埋土は掘形内が上からA:茶褐色細砂混砂質土(A':褐茶色細砂混砂質土)・B:茶褐色細砂混シルト・C:灰茶色礫混じり砂質土・D:淡茶灰色シルトである。井戸側内は上からE:茶灰褐色細砂混シルト・F:乳灰茶色細砂・G:淡灰青色シルト・H:暗青灰色細砂混粘土で、F層・G層は自然堆積と思われるレンズ状を呈していた。出土遺物は、近世末期に比定される伊万里焼碗の小片や井戸側に使用されていたと思われる平瓦、桶に使用していたと思われる木製の栓(3)などが井戸側内より出土している。3は栓で円柱台形のかたちを呈し、最大径4.8cm、最小径4.0cm、高さ3.8cmを測るものである。

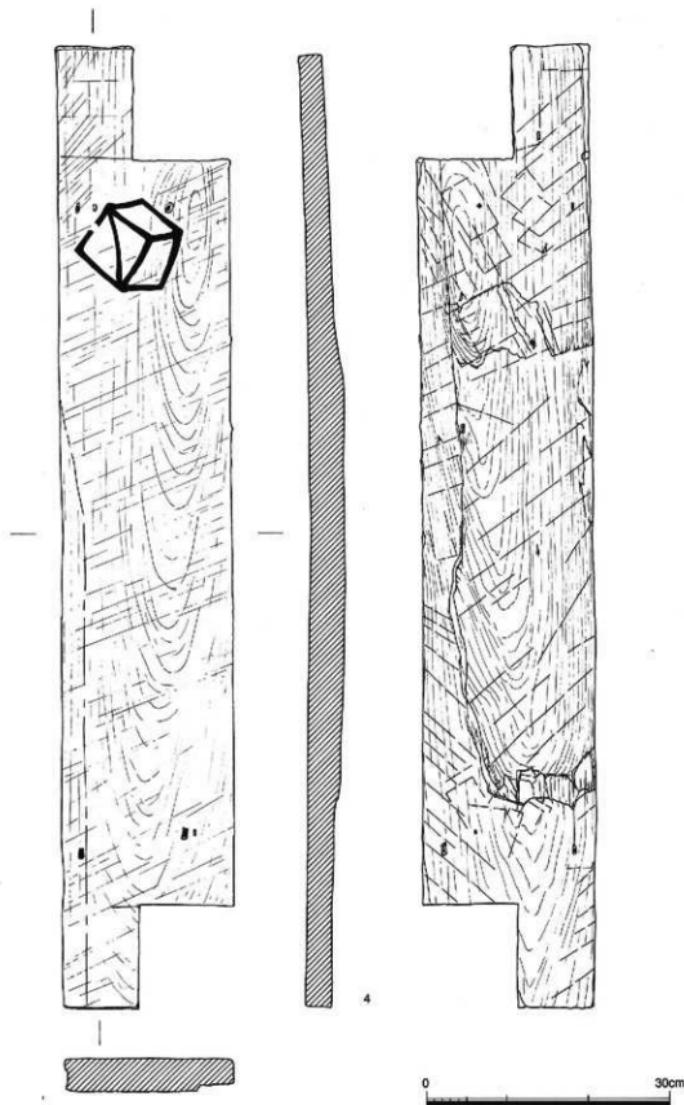
この井戸の時期は近代に比定されるもので、八尾市域の既往調査で検出されている近世~近代の井戸に多くみられる構築方法の井戸である。今回検出した井戸側には番号や升の絵が墨書きされたものとしては珍しい井戸のひとつである。



第4図 井戸模式図



第5図 SE-1 井戸側材実測図1



第6図 SE-1 井戸側材実測図2

### 3.まとめ

今回の調査は成法寺遺跡の南西部に位置し、遺構・遺物の存在が未知のところであった。調査地より約250m北部の既往の調査成果を参考にして発掘調査を進めたが、予想されていた弥生時代後期末～古墳時代前期、古墳時代中期～中世に比定される時期のものの存在を明確に掴むことができなかった。以下、検出した各時代について列記する。

古墳時代前期の時期は、土器片を出土した第12層の下層である第13層上面が遺構面と思われるが、北東から南西方向に緩やかな傾斜がみられた程度で生活の痕跡はみられない。しかし、北部の既往調査で検出されている方形周溝墓を主とする墓域範囲に想定できる可能性が考えられる。<sup>註4</sup>

中世の時期は、第7層上面がそれにあたる。その上面は畦畔状の高まりが東壁の一部でみられたのみで、フラットな面を呈しており、生産域の可能性が考えられる。<sup>註5</sup>

今回検出した近世の時期の井戸は、八尾市域の発掘調査でよく検出される一般的な形式のものである。しかし、今回のような井戸側に番号を記した墨書、また、屋号ないしは印と考えられる「升の絵」が描かれている井戸としては大変貴重な資料を提供してくれた。

#### 註記

- 註1 高萩千秋他 1986『成法寺遺跡』八尾市光南町1丁目29番地の調査（財）八尾市文化財調査研究会報告1
- 註2 高萩千秋 1992「I成法寺遺跡（第5次調査）」『平成4年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（II）』八尾市文化財調査研究会報告35
- 註3 原田昌則他 1991『成法寺遺跡』〈第1次～第4次・第6次調査報告〉（財）八尾市文化財調査研究会報告33
- 註4 前掲註1
- 註5 前掲註1



表土堤削状況(東から)



SE-1 井戸側墨書き(北東から)



調査区全景(東から)



SE-1 断割り(北東から)



SE-1 検出状況(北西から)



SE-1 井戸側(北東から)



SE-1 井戸側(北東から)



SE-1 井戸側(北東から)



1



1



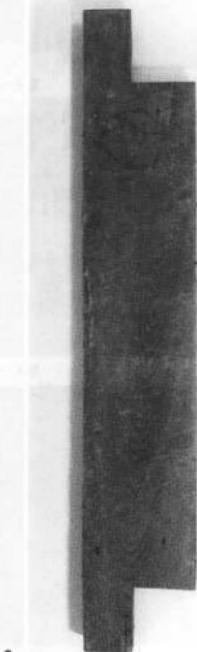
2



2



|



4



4

SE-1 井戸側材(1・2・4)、栓(3)

## X 太子堂遺跡第9次調査 (T S 98-9)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南太子堂3丁目地内で行った、公共下水道工事(10-24工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太子堂遺跡第9次調査(TS 98-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第586号 平成11年1月18日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年3月5日～3月24日(実働4日)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約54.4m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査・内業整理に参加した補助員は以下のとおりである。  
河本 清・澤村妙子・高橋宏幸・松本貴匡・山口拓也(五十音字順)
1. 本書の執筆・編集は成海が行った。

## 本 文 目 次

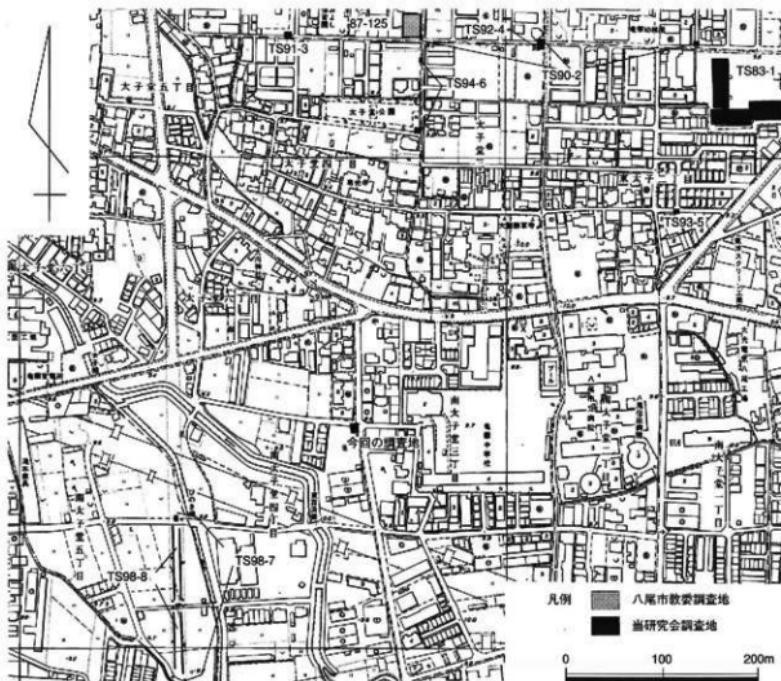
1.はじめに.....	83
2.調査概要.....	84
1)調査の方法と経過.....	84
2)検出遺構と出土遺物の概要.....	84
3.まとめ.....	85

## X 太子堂遺跡第9次調査 (TS98-9)

### 1. はじめに

太子堂遺跡は、八尾市南西部の太子堂3～5丁目、東太子2丁目、南太子堂1～6丁目をその範囲とし、旧大和川の支流である古平野川の旧堤防およびその後背湿地に位置する。周辺には南東に植松南遺跡・東に植松遺跡、北～西に跡部遺跡、さらに西には龟井遺跡などがある。遺跡の南方の大阪市域には城山古墳跡や六反古墳跡が位置している。

当地は、「日本書紀」・「続日本記」に記述があり、「大型勝軍寺」をはじめとして、蘇我氏・物部氏の戦いに因る伝承地があることで知られているが、考古学的に認識されたのは昭和58(1983)年3月に八尾市教育委員会が東太子2丁目で実施した試掘調査による。それをうけて当調査研究会が同地で行った第1次調査(TS98-1)では、古墳時代中期～後期の遺物包含層、奈良時代の遺構・遺物、鎌倉時代の耕作痕等が検出されている。とくに奈良時代の遺構には、船材転用の井戸側をもつ井戸2基、「南一」・「西一」・「北一」の墨書のある井戸側をもつ井戸1基、羽釜を用いた土器棺等があり、遺物には「高坏」・「西」の墨書のある土器、土馬、馬骨等が検出されている。



第1図 調査地周辺図

平成2(1990)年度以降、当調査研究会では、主に遺跡の北側で公共下水道工事に伴う調査を5件実施しており、数々の成果が得られている。遺跡南側では、平成9(1997)年度に南太子堂4・6丁目で公共下水道工事に伴う発掘調査(TS97-7)、平成10(1998)年度に南太子堂5丁目で、道路建設に伴う発掘調査(TS98-8)が行われている(周辺図・表参照)。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成10年度-第24工区)に伴うもので、当研究会が太子堂遺跡内で実施した9度目の調査にあたる。調査地の位置は、遺跡の南側、竜華中学校の西約50m地点の交差点南西側で、第7次調査地・第8次調査地から北東約250m地点である。

調査地は南北7.75m・東西6.8mの立坑で、周囲には鋼板柱が打設されており、北側・東側のはほとんどは道路敷下にあたっている。調査に際しては、工程に従って、機械・人力掘削を併用し、工事終了までの掘削に立会い、隨時、写真撮影・断面図作成などの記録保存作業を行った。

### 2) 検出遺構と出土遺物の概要

今回の発掘調査は、結果的には土層断面の観察にとどまった。観察できた土層は以下の23枚である。土層断面観察用の珪は東側に残した。調査地の現地表面の標高はT.P.+9.64~9.66m、最終的な掘削深度は現地表下7.3m、T.P.+2.3m前後である。盛土は0.6~0.7mあり、盛土直下では、調査区北部で東西溝の南の肩、南西部でコンクリート製の井戸側をもつ井戸を検出した。

第1層 浅黄橙色~淡黄色細砂・礫・粗砂の互層、層厚1.75m。現地表下0.9m前後(T.P.+8.75m)でこの層に達する。含水量はきわめて多い。上部で近世~近代の陶磁器の小破片、下部で古墳時代前期~平安時代の高杯・杯・甕などの土器片が少量出土したが、いずれも磨耗をうけている(第3図-1~4)。

第2層 灰白色細砂~中砂、層厚0.2~0.25m。

第3層 青灰色シルト~微砂、層厚0~0.25m。

第4層 灰色粘土、層厚0.7~0.8m、薄い植物遺体層が数枚みられ、炭酸鉄を含む。

第5層 青灰色粘土、層厚0.15m前後。炭酸鉄を含んでいる。

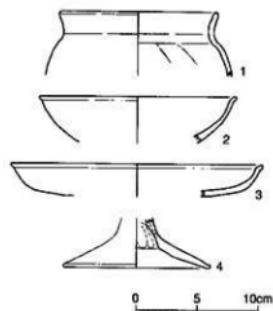
第6層 暗灰褐色粘土質シルト~微砂と植物遺体の薄い互層、層厚0.1m前後。

第7層 暗灰色粘土、層厚0.1m前後、炭酸鉄を含んでいる。

第8層 灰緑色粘土、層厚0.05~0.15m。

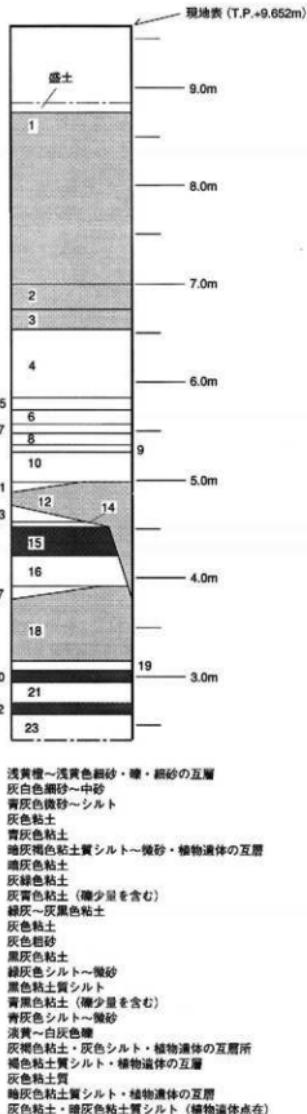
第9層 灰青色粘土、層厚0.1~0.2m、礫・植物遺体・炭酸鉄を含んでいる。

第10層 細灰~黒灰色粘土、層厚0.2~0.3m、上下が黒灰色、中央部が緑灰色を呈するが、色調の境目ははっきりしない。北側が厚く、南側が薄い。



第2図 第1層出土遺物実測図(S=1/4)

- 第11層 灰色粘土、層厚0~0.1m、中央以北でみられる。
- 第12層 灰色粗砂、層厚0~1.0m、北側ではみられず、中央部の第13層上面から切り込んでいる。南端で急激に落ち込み、第14~第18層上部までを切る。底に酸化鉄の沈着が見られる。上面の標高はT.P.+5.00m前後である。
- 第13層 黒灰色粘土、層厚0~0.2m、中央以北でみられる。植物遺体を極少量含んでいる。
- 第14層 緑灰色シルト~微砂、層厚0~0.05m、南端では第12層に切られる。
- 第15層 黒色粘土質シルト、層厚0~0.05m、少量の植物遺体が薄く堆積している。
- 第16層 青黒色粘土、層厚0~0.4m、礫を極少量含み、中央部では礫の多い部分もある。
- 第17層 青灰色シルト~微砂、層厚0~0.3m、北部に堆積し、含水量が多い。
- 第18層 淡黄~白灰色礫、層厚0.5~0.8m、ほぼ水平に堆積しているが、南端の上面は、第12層に切られている。含水量が多い。第17・18層上面の標高はT.P.+3.90m前後である。
- 第19層 灰褐色粘土・灰色シルト・植物遺体の互層、層厚0.05~0.15m、植物遺体が薄く縞状に堆積しており、上面には波状痕跡がわずかにみられる。
- 第20層 褐色粘土質シルトと植物遺体の互層、層厚0.1~0.15m、きわめて多量の植物遺体の薄層が数枚含まれる。
- 第21層 灰色粘土、層厚0.2~0.3m。
- 第22層 暗灰色粘土質シルト、層厚0.1m前後、少量の植物遺体が薄層をなしている。
- 第23層 灰色粘土・暗灰色粘土質シルトの互層、層厚0.3m以上、植物遺体がごくわずかに点在している。



第3図 地層模式図 (S=1/50)

### 3. まとめ

今回の調査で確認した第1層～第3層が、埋没河川「古平野川」に関連するものであろう。「古平野川」はこれまで当遺跡北側や跡部遺跡・亀井遺跡の範囲内で、平安時代後期以降には埋没したことが明らかにされている。この埋没河川と一致する近辺の調査では、河川内の堆積土層中から古墳時代前期～奈良時代の遺物が出土しており、河川上面では、奈良時代～平安時代後期以降の生活面が検出されている。今回の調査でも、第1層から古墳時代前期～平安時代の土器(第2図-1～4)が出土していることから、これまでの調査結果を裏付けたといえる。

当調査地はこの流路の最南端付近にあたり、北側の東西道路は、幕末～明治時代の地籍図に記載されている現平野川右岸に沿った道路に重複している。調査区北部で検出した東西溝は、この道路の側溝と考えられる。南西部で検出した井戸は、土地所有者が数年前まで使用していたとのことである。

それ以下の土層については不明瞭であるが、第14層・第17層上面(現地表下5.0～5.75m・T.P.+4.0～4.65m)が弥生時代の遺構面に、第20層・第22層(現地表下6.6～7.0m・T.P.+2.6～3.0m)が、暗色帶に相当する可能性が高い。

\*周辺の調査地一覧表

略号	所在地	調査成果		文献番号
		古墳時代中期～後期の遺物包含層	縄文時代の井戸・土坑・柱穴・土器棺(羽釜)・磨き石器・土馬・馬骨	
TS83-1	東太子堂2・1他	・奈良時代の井戸・土坑・柱穴・土器棺(羽釜)・磨き石器・土馬・馬骨		①
TS90-2	太子堂2・3地内	・古墳時代前期の溝内から多量の布留式土器		②
TS91-3	太子堂2地内	・埋没河川上面に奈良時代前期の溝		③
TS92-4	太子堂3地内	・古墳時代前期の溝		④
TS93-5	東太子堂1地内	・埋没河川中に奈良時代の遺物		⑤
TS94-6	太子堂3・4地内	・埋没河川中に古墳時代前期(庄内～布留式古)の遺物		⑥
TS97-7	南太子堂4・6地内	・平安時代後期の井戸・土坑・小穴・溝		⑦・⑧
TS98-8	南太子堂5地内	・北部で古墳時代～平安時代前期の遺構・遺物 ・南部で平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物		⑨

#### 参考文献

- ①関田清一 1993「I 第1次調査(T S 83-1)発掘調査概要報告」「太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査報告>」八尾市文化財調査研究会報告36 (財)八尾市文化財調査研究会
- ②坪田真一 1993「II 第2次調査(T S 90-2)発掘調査概要報告」同上
- ③成海佳子・藤田道子 1997「III太子堂遺跡第3次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告58 (財)八尾市文化財調査研究会
- ④高萩千秋 1993「IV太子堂遺跡第4次調査(T S 92-4)」(財)八尾市文化財調査研究会報告39 (財)八尾市文化財調査研究会
- ⑤高萩千秋 1994「V太子堂遺跡第5次調査(T S 93-5)」(財)八尾市文化財調査研究会報告42 (財)八尾市文化財調査研究会
- ⑥成海佳子 1997「VI太子堂遺跡第6次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告58 (財)八尾市文化財調査研究会
- ⑦西村公助 1998「14.太子堂遺跡第7次調査(T S 97-7)」「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑧西村公助 1999「14.太子堂遺跡第7次調査(T S 97-7)」「平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑨高萩千秋 1999「15.太子堂遺跡第8次調査(T S 98-8)」同上



第1層掘削状況(北西から)



東側壁面(T.P.+6.5~8.0m付近)



東側壁面(現地表～T.P.+7.5m付近)



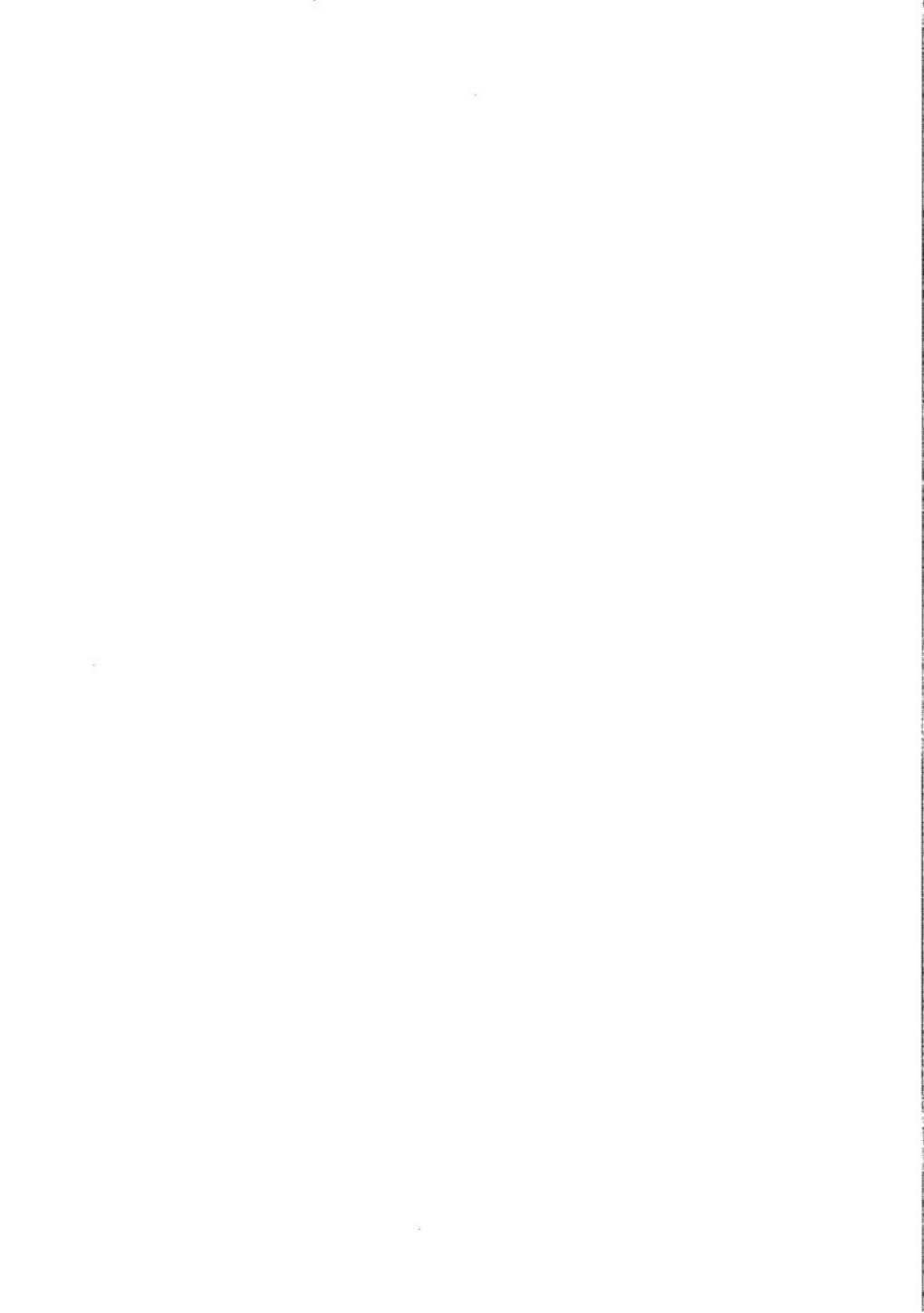
東側壁面(T.P.+4.4~6.5m付近)



下層部分掘削状況(北から)



東側壁面(T.P.+2.3~4.4m付近)



XI 田井中遺跡第18次調査 (TN98-18)

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市田井中4丁目地内で実施した公共下水道工事（9-33工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する田井中遺跡第18次調査（TN98-18）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第529号 平成10年11月25日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年5月29日～6月30日（実働5日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約42m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては松本貴匡・松尾 実・中西明美・市森千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー松本・桐本美香・田島和恵が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

## 本　文　目　次

1. はじめに.....	89
2. 調査概要.....	90
1) 調査の方法と経過.....	90
2) 基本層序.....	90
3) 検出遺構と出土遺物.....	91
4) 出土遺物観察表.....	94
3.まとめ.....	94

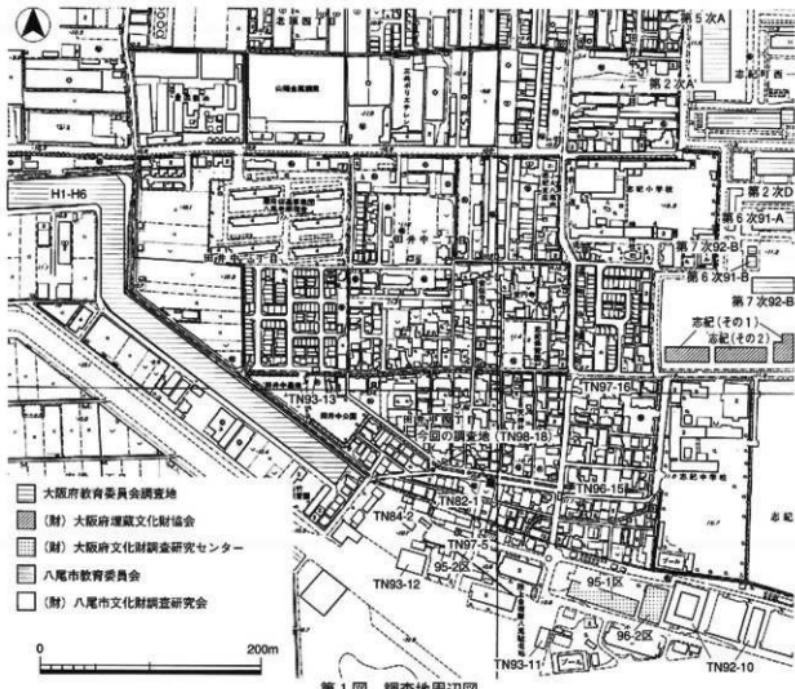
## XI 田井中遺跡第18次調査 (TN98-18)

### 1. はじめに

田井中遺跡は八尾市南部に位置し、現在の行政区画では田井中1～4丁目・空港1丁目の一部にかけて所在する遺跡である。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川左岸にあたる沖積地上にあり、同地形上には北に老原遺跡、東に志紀遺跡・弓削遺跡、南西には木の本遺跡が位置する。

当遺跡は、陸上自衛隊八尾駐屯地内の下水道工事に際して、弥生土器が出土したことにより周知のものとなり、昭和57年（1982）年度から当調査研究会による発掘調査をはじめ、八尾市教育委員会、大阪府教育委員会、（財）大阪府埋蔵文化財協会、（財）大阪府文化財調査研究センターの調査機関による数次の発掘調査が実施されており、縄文時代晩期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

平成5年度以降、陸上自衛隊八尾駐屯地内の建替工事および八尾空港北濠の平野川改修工事に伴う大規模な発掘調査により、弥生時代前期～中期にかけての遺構および遺物が広範囲に存在す



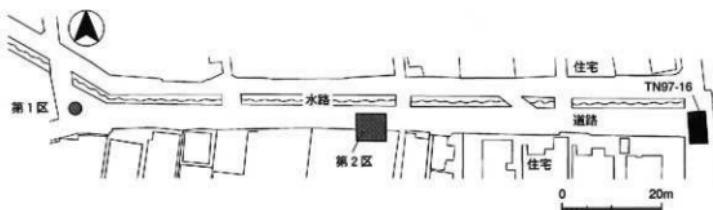
ることが明らかになっている。また、当遺跡の北東に隣接する志紀遺跡では、府営・市営の住宅建替工事に伴う調査により、弥生時代前期～近世にかけて連綿と稻作農耕が行われていた水田遺構が確認されており、互いに有機的な関連があったものと思われる。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事（9-33工区）に伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した第18次調査にある。調査区は2箇所で、円形（直径3.0m）を呈するNo2発進・到達立坑部分（第1区）と6×5mの規模をもつNo1発進立坑部分（第2区）である（第2図）。

第1区は立会調査のみであった。第2区は現地表（T.P.+11.25m前後）から約2.5m前後を機械掘削とし、それ以下約3.4mを人力掘削および機械掘削を併用しながら発掘調査を実施した。なお、地層状況の観察のため北壁を残しながら調査を進めた。



第2図 調査地位置図

### 2) 基本層序（第2区）

- 第1層：現代盛土。（アスファルト・パラスなどを含む。）
- 第2層：淡茶褐色微砂。層厚約30～40cm。
- 第3層：灰茶褐色粘土。層厚約20cm前後。斑点状にマンガン含む。
- 第4層：灰茶褐色微砂。層厚10～20cm。
- 第6層：黄褐色シルト混微砂。層厚約40～50cm。A層下ではグライ化により青灰色に染まっている。
- 第7層：灰青色粘土。層厚約10～30cm。
- 第8層：青褐色～灰青色微砂。層厚約5～10cm。噴砂によるものと思われる層である。砂が吹き出した痕跡が1箇所みられた。
- 第9層：灰色粘土。層厚30cm前後。
- 第10層：青灰色粘土I。層厚20cm前後。弥生時代中期ごろの遺物を少量含む。
- 第11層：灰黒色粘土。層厚15cm前後。弥生時代前期～中期の遺物を少量含む。
- 第12層：青灰色粘土II。層厚約10～20cm。弥生時代前期～中期の遺物を少量含む。

第13層：暗灰色シルト。層厚約60cm。上面で弥生時代中期の遺構を検出。下部で炭酸鉄と植物遺体を含む。

第14層：暗灰青色粘質シルトと青灰色細砂の互層。層厚40cm前後。5~10cmの厚みでラミナ状に堆積している。全体にやや右下がりである。

第15層：青灰色細砂。層厚10~20cm。ラミナ状に堆積する。全体にやや東下がりで、東側が層厚となる。

第16層：暗灰褐色粘質シルトと青灰色細砂の互層。層厚約30~40cm。第14層と同様、5~10cmの厚みでラミナ状に堆積している。全体にやや東下がりである。

第17層：淡灰色粗砂。層厚20cm以上。流木と思われる大木1本を検出。

A層：灰色粗砂。石炭の燃えかすを含む。戦前の飛行場の排水暗渠と思われる。

B層：灰黒色粘質シルト。落込み状遺構(SO-1)で、北東方向に深くなる。

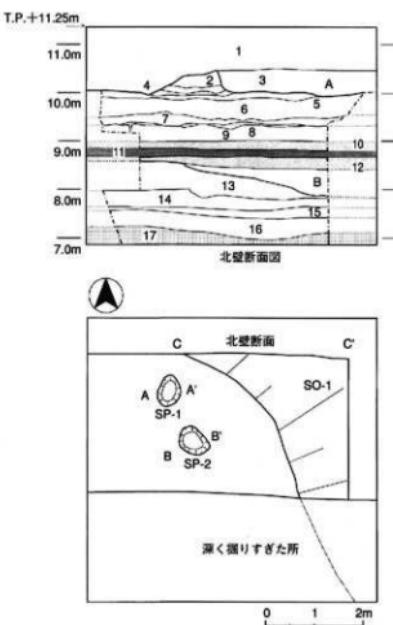
### 3 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第2区で現地表下約2.0~2.6m (T.P. +8.5~9.1m) の第10~12層から弥生時代中期の包含層を確認した。その第13層上面では小穴2個(SP-1・SP-2)、落込み状遺構1箇所(SO-1)を検出した。しかし第1区ではケコム(PIT)工法といわれる掘削工法(筒状の鋼鉄枠を掘削地点に備え付け、その内側の土を重機で掘削しながら鋼鉄枠を落としていく工法)であり、断面観察や平面調査を断念し、上げ土のみの観察調査となった。その観察では現地表下2.5m前後の上げ土から弥生土器・植物遺体などを包含する灰黒色粘土を確認した。

第2区の下層調査(工事最終掘削深度)では遺物を含む層や遺構面となる土層はなかったが、最終面直下の粗砂層(第17層)内より流木を検出した。以下、各調査区について記す。

第1区(発進・到達立坑No.2)

第1区は東からの流れをもつ水路(現平野川と合流する)が僅かに北方向へ屈曲する部分の南側に接する調査区である。5月29日と6月1日の掘削作業に立会った。現地表下約1m前後まで



第3図 第2区 平断面実測図

は埋設工事等の掘削で埋め戻した上層及び旧耕土・床土であった。その直下で洪水層と思われる細砂層約1m弱の堆積がみられた。現地表下約2.0~2.5mではシルトと粘土が交互に堆積していた。その下層では弥生土器・植物遺体などを包含する灰黒色粘土が存在することが上げ土から確認できた。さらに下層ではシルトと粘土が交互に堆積している層がみられた。

#### 第2区（発進立坑No1）

第1区より東へ約50mの所に位置する調査区である。調査は第1区の終了後、約3週間後の6月25日より調査を開始した。現地表下約0.5~0.7mまではすでに覆工板設置のため掘削済みであったが、第1区と同様、現在の埋設工事などの盛土内であった。したがって、それより以下の土層について調査を実施した。

まず第1段目の梁を設置する深度である現地表下約2.0m（T.P.+9.25m前後）まで徐々に機械による掘削を行った。ここでは土層観察のため北壁を残した。ここまで状況は、調査区の東側の現地表（T.P.+11.25m）下約1m前後の所から戰前に使用されていたと考えられる排水用の暗渠を確認した。暗渠は幅約3m、深さ約0.6mを測り、ほぼ南北方向に伸びていた。その内部には、石炭の燃えかすと思われる炭が混ざった粗い砂が堆積していた。また、現地表下約2m（T.P.+9.0m）前後に堆積する第8層について地震による噴砂の痕跡と思われる地層状況が確認できた。

次に第2段目の梁を設置する深度である現地表下約3.5mについて調査を実施した。ここでも同様北壁を残しながら掘削を行った。その結果、約20cm程度掘削した土層より弥生時代中期ごろの遺物包含層を確認した。その包含する層の掘削を慎重に行った結果、層厚約50cmを測り、3層（第10~12層）に分けられた。この3層からは弥生土器の破片が少量出土した。この直下に堆積するシルト層（第13層）上面を精査したところ、径48~65cmを測る平面梢円形の小穴2個（S P-1・S P-2）と調査区北東部へ広がる落ち込み1箇所（S O-1）を検出した。

さらに工事掘削深度である現地表下約4.6mまでの調査を終了後、統いて立会調査を行った結果、洪水層にみられるラミナが確認できた。このラミナはシルトと微砂の互層でやや東下がりであった。最終面では細砂～粗砂の層を確認した。この砂層内より南東～北西方向に横たわった状態で流木を検出した。流木は径約40cmを測る大木であった。大木はやや南東側が太くみられたことから、南東側が根元側になるものと思われる。この大木の一部をサンプルとして採取し、6月30日に調査を終了した。

出土遺物は、第10~12層から弥生時代前期～中期の弥生土器・石器の小片30点で、器種には壺・甕などの体部・底部片がみられた。図示できたものは6点（1~6）である。1・2は内外面にヘラミガキを施している広口壺の口縁部片、3~5は底部片で、これらは前期新段階に比定される壺である。6は石包丁の破片である。材質は泥岩で表面を研磨しており、径6mmの紐孔がある。

以下、各遺構について記す。

#### 小穴（S P）

##### S P-1

調査区北西部で検出した。平面形状は南北方向に長い梢円形を呈し、長径約64cm、短径約48cm、深さ9cmを測る。断面形状は皿状形で比較的浅い小穴である。堆積土は灰黒色粘質シルトの單一層である。遺物は弥生時代中期のものと思われる土器の小片を2片出土した。

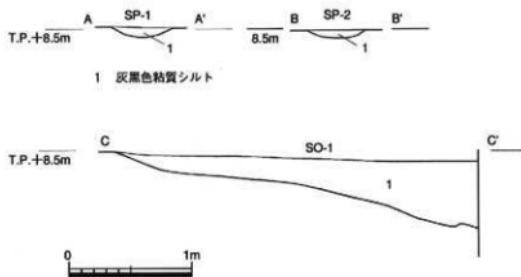
## S P - 2

S P - 1 の南東部で検出した。長径約65cm、短径約48cm、深さ8cmを測る。平面形状は南東ー北西方向に長い楕円形を呈する。断面形状は S P - 1 と同様、皿状形で比較的浅い小穴である。堆積土は灰黒色粘質シルトの単一層である。遺物は弥生時代中期のものと思われる土器の小片が1片出土した。

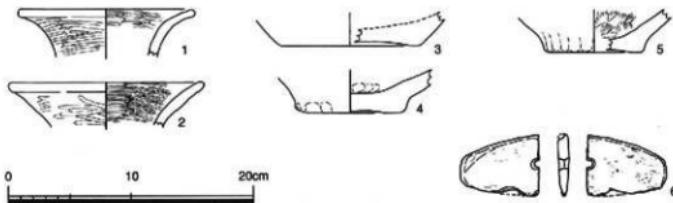
## 落込み (S O)

## S O - 1

調査区北東部で検出した落込み状の遺構である。北西から南東へ緩やかなカーブを描いた西肩で、北東方向へ緩やかに落込んでいる。調査区で最も深い部分で深さ約55cmを測る。断面形状は皿状形で比較的浅い小穴である。堆積土は灰黒色粘質シルトの単一層である。遺物は弥生時代中期のものと思われる土器の小片を少量出土した。



第4図 遺構断面図



第5図 遺構に伴わない出土遺物実測図

#### 4) 出土遺物観察表

遺物番号 国版番号	器種 高さ釐 包含層	法寸(cm) 口径	調査・技法の特徴	色調	胎土	焼成	遺存率	備考
1 二	兼 包含層	口径 14.0	内外面ヘラミガキ、口縁端部ナデ。	外 にぶい黄褐色 内 黒色～にぶい黄褐色 断 鮎灰色	密（長石・石英・赤褐色酸化鉱含む）	良好	口縁1/5	
2 二	同 上	口径 15.2	内外面ヘラミガキ、口縁端部ナデ。	外 鮎褐色 内 黒褐色～灰黃褐色 断 黃褐色	密（長石・石英・雲母・角閃石含む）	良好	口縁1/5	
3	同 上	底径 11.4	内外面 剥離のため不明。	外 明赤褐色～灰黃褐色 内 暗灰黄色	繊砂粒（長石・角閃石・赤褐色酸化鉱）を含む。	良好	底部1/4	
4	同 上	底径 8.4	内面 摩耗が著しい（一部指押えみられる）。 外面 指押え。	外 明赤褐色 内 にぶい黄褐色	繊砂粒（長石・赤褐色酸化鉱）を含む。	良好	底部のみ	
5 一	同 上	底径 7.8	内面 ハケ目、指押え。 外面 ナデ、指押え。	外 明赤褐色 内 にぶい黄褐色	繊砂粒（長石・赤褐色酸化鉱）を含む。	良好	底部の黒斑 み有	

### 3.まとめ

今回の調査地は、田井中遺跡推定範囲の中央よりやや北に位置しており、想定されている弥生時代中期の集落の範囲内にあたり、遺構・遺物の存在が予想された。その結果、第1区・第2区の両調査区で確認することができた。しかし、第1区では工事工法により上げ土による確認にとどまった。第2区では現地表面から土層堆積状況を確認しながら進めることができ、弥生時代中期の包含層及び遺構を検出した。弥生時代中期の集落域範囲は既往調査の調査成果から弥生時代の集落域が想定されており、当地がその北側に位置するものと思われる。

また、公共下水道の立坑工事による小面積の調査ではあったが深層部分まで掘削が実施でき、当地（第1区）より西北西へ200mで行った公共下水道の立坑工事に伴う第13次調査（T N93-13）の最深部分の調査で大木の流木が検出されたとの同レベルで、同じような流木を検出しておらず、当地周辺における弥生時代以前の古環境を復元する資料になるものと考えられる。

以上、調査の成果である。今後さらに周辺の調査が進むにつれ、当遺跡の実態がより一層明確になるであろう。

### 参考文献

- ・原田昌則 1984『木の本遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告4 （財）八尾市文化財調査研究会報告
- ・西村公助 1989『田井中遺跡(第1~2次調査)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告
- ・亀島重則 1991『田井中遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会
- ・小林義孝 1992『田井中遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会
- ・亀島重則 1993『田井中遺跡発掘調査概要・III』大阪府教育委員会
- ・亀島重則 1994『田井中遺跡発掘調査概要・IV』大阪府教育委員会
- ・岡田清一 1994『X I 田井中遺跡(第13次調査)』（財）八尾市文化財調査研究会報告42（財）八尾市文化財調査研究会報告
- ・秋山浩三 1995『志紀遺跡(その3)発掘調査終了報告』（財）大阪府埋蔵文化財協会
- ・西川寿勝 1995『志紀遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第91編 （財）大阪府埋蔵文化財協会
- ・西村公助 1995『田井中遺跡(第5~7次調査)』（財）八尾市文化財調査研究会報告46 （財）八尾市文化財調査研究会報告
- ・岩瀬 透 1996『田井中遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会



第1区 挖削状況(南から)



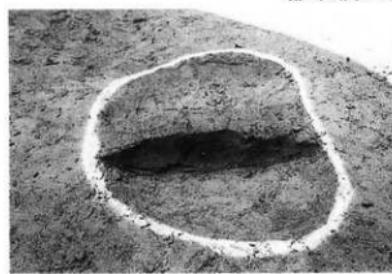
第2区 造構検出状況(南から)



第2区(西から)



第2区 SP-1(西から)



第2区 SP-2(南から)



第2区 SO-1(西から)



第2区 北壁断面



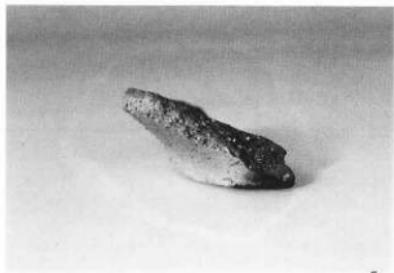
第2区 北壁断面



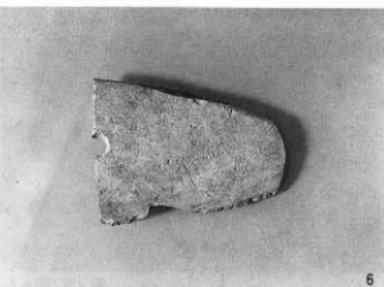
1



2



5



6

遺構に伴わない遺物

XII 中田遺跡第42次調査 (NT98-42)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市刑部4丁目地内で実施した公共下水道工事（9-16工区）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第42次調査（NT98-42）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第358-2号 平成9年9月4日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託をうけて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成10年4月10日に着手し、同年5月27日に終了した（実働17日）。
1. 調査面積は約40m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、松尾 実・松本貴匡・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理には上記諸氏の他、小野沢健二・都築聰子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。
1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北を示している。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	97
2.調査概要.....	98
1)調査方法.....	98
2)検出遺構と出土遺物 .....	100
3.まとめ .....	110

## XII 中田遺跡第42次調査 (N T98-42)

### 1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のはば中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲に広がる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた冲積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲の南東端部にある。この西部では調査も多く実施されており、なかでも昭和53年度の八尾市教育委員会による調査で検出された土坑（A）は、多量に出土した土器のうちの多くを吉備地方の土器が占めるという特異性が注目され、また『刑部土坑』と称され庄内式期古相の標識資料となっている。



第1図 調査地位位置図(S=1/5000)

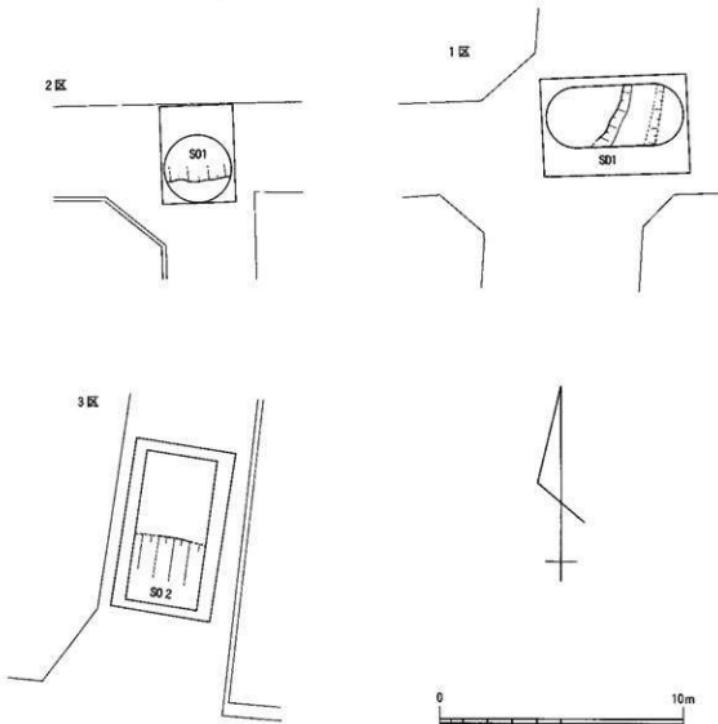
## 2. 調査概要

### 1) 調査方法

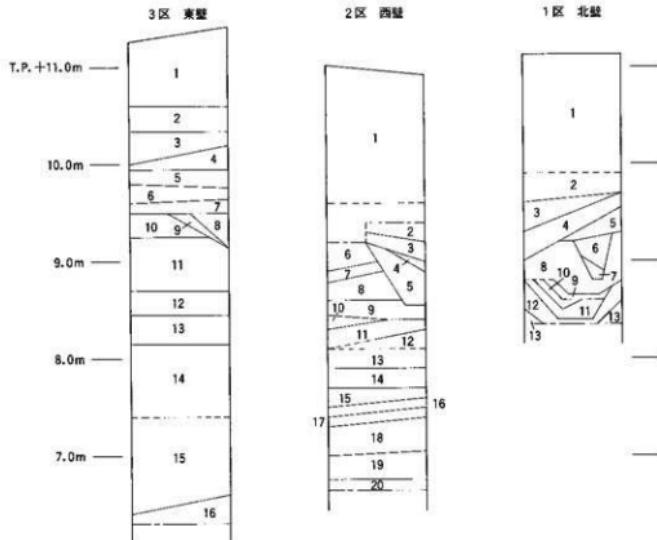
今回の調査は公共下水道工事(9-16工区)に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で実施した第42次調査にあたる。調査対象地は道路上の立孔部分3箇所で、調査面積は計約40m<sup>2</sup>である。

地区名は1区～3区とした。調査区平面形については、3区が鋼矢板で囲繞された立孔で長方形であるが、1区・2区はライナーブレート構築による立孔であり、1区が長円形、2区が円形を呈している。2区は1区の西約50m、3区は2区の南約140mに位置している。

調査にあたっては現地表下約1.2mまでを機械掘削し、以下の約1.0mを人力掘削・機械掘削により調査を実施した。またそれ以下については工事進捗状況に合わせ、2・3区では工事掘削深度まで、1区では可能な範囲で土層の確認調査を実施した。



第2図 調査区平面図 (S = 1/200)



## 〈3区〉

1. 植土・擾乱
2. 旧耕土
3. 黄灰褐色細砂～粗砂
4. 灰色微砂混じりシルト（グライ化する）
5. 灰色～黄灰色シルト～微砂の互層（グライ化する）
6. 淡灰色粘土（マンガン含む）
7. 灰色粘土
8. 淡灰色微砂少混じり粘土（炭・焼土含む）
9. 灰色～灰青色粘土混じり粘質シルト
10. 灰青色粘質シルト
11. 青灰色微砂混じり粘質シルト～シルト（北部ほど微砂多い）
12. 灰青色粘質シルト～混じりシルト
13. 底青色シルト混じり粘質シルト～粘土（南部下位が粘土）
14. 淡灰褐色細砂・粗砂（北下がりのラミナ）
15. 明灰色粗砂（～5cm）と細砂の互層（北下がりのラミナ）
16. 明灰色微砂～細砂の互層（北下がりのラミナ）

## 〈1区〉

1. 植土・擾乱
2. 淡褐色シルト混じり細砂（ブロック状）
3. 淡褐色シルト～細砂の複数な堆積
4. 淡褐色細砂・粘質シルトの複数な堆積
5. 淡褐色シルト～粘質シルト（ブロック状）
6. 淡褐色シルト～粘土（ブロック状）
7. 淡褐色微砂混じり粘質シルト
8. 淡灰色微砂混じりシルト
9. 淡灰色微砂混じり粘質シルト
10. 明灰色微砂
11. 灰色シルト混じり微砂
12. 灰色微砂混じり粘質シルト～シルト
13. 淡灰色微砂混じり粘質シルト～シルト

## 〈2区〉

1. 植土・擾乱
2. 灰青色粘土混じり微砂～粘質シルト（ブロック状）
3. 淡褐色灰色粘土（青灰色シルト混じり）
4. 淡褐色シルトと青灰色シルト～粗砂とのブロック状
5. 淡灰褐色微砂混じりシルト～粘質シルト（ややブロック状）
6. 青灰色シルト～粘質シルト
7. 灰青色シルト混じり微砂
8. 淡灰褐色微砂混じりシルト
9. 灰色シルト混じり粘質シルト
10. 淡灰色シルト混じり粘質シルト
11. 淡灰色粘質シルト混じりシルト～微砂
12. 灰色シルト混じり微砂
13. 淡灰褐色微砂混じり粘質シルト
14. 淡灰褐色シルト混じり粘質シルト
15. 淡灰青色粘質シルト（下面に植物遺体）
16. 淡褐色細砂混じり粘質シルト
17. 淡褐色粗砂・粗砂混じり粘質シルト
18. 淡色微砂混じりシルト
19. 淡灰色粘土（植物遺体少量含む）
20. 灰色シルト～粘質シルトの互層（植物遺体含む）

第3図 基本層序 (S = 1/50)

## 2) 検出遺構と出土遺物

〈1区〉

### a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土・搅乱・旧耕土である。第2層～第4層は東から西に下がる傾斜堆積で、層相は細砂～粘質シルトが複雑に堆積している。近世～近代の陶磁器・瓦等が少量出土しており、当該期の河川堆積層と考えられる。第6層・第7層はSD1埋土で、第5層もその最終堆積部分であろう。第8層の層厚0.5mを測る微砂混じりシルト層は、均質な層相でラミナも見られず、一気に堆積した層と捉えられる。時期不明の土師器片が出土している。以下は微砂～粘質シルトの皿状の堆積が続き、当調査区は南北方向の河川の流心付近に位置するものと思われる。

### b. 検出遺構と出土遺物

SD1

第8層上面で検出した南北方向の溝である。やや蛇行する西肩を成し、東肩は平面的には検出しえなかつたが、北壁断面によると規模は幅約1.6m・深さ約0.4mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は暗褐色粘土～シルトのブロック状の堆積で滲水状況が窺える。遺物は近世陶磁器が出土しているが図化しえるものはなかつた。

〈2区〉

### a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土・搅乱である。第1層下部では、1区第2層～第4層に相当すると思われる細砂～シルトの複雑な堆積がみられた。なおこの部分は溜り水によりヘドロ化しており、機械により掘削をしたため第2層との境目が不明確になってしまった。第2層・第3層が第6層上面で検出した落ち込み(SO1)の埋土である。SO1の下層部分とも捉えられる第4層・第5層はブロック状の堆積を呈する層で、別の遺構の可能性もある。弥生時代中期～後期の土器(58～65)が出土しているが、61～65に関しては第6層～第8層の土器の可能性がある。第6層以下はおまかにみるとシルト～粘土の互層状の堆積で、1区とは様相が異なり、比較的安定した状況が続いていることが窺える。

### b. 検出遺構と出土遺物

SO1

第6層上面で検出した落ち込みである。東西方向の直線的な肩から北になだらかに落ち込んでいる。規模は長さ2.7m以上・幅1.8m以上・深さ約0.4mを測る。埋土は上下2層(第2層・第3層)に分かれ、上層はブロック状を呈している。上層からは埴輪が出土し、下層中からは少量の埴輪の他、須恵器・土師器からなる上器集積が検出された。当遺構の性格としては、上層から埴輪が出土していることからみて古墳の周溝にあたると考えられる。この場合第2層は墳丘からの崩落盛土と捉えられる。また前述のように下位の第4層・第5層は明らかにブロック状を呈する層であり、第2層と同様に崩落土の可能性があるが明確にはできなかつた。

出土遺物は須恵器有蓋高杯14組(1～28)・杯蓋1(29)・脇1(30)・器台1(31)、土師器高杯1(32)・壺2(33・34)、広口壺1(35)、埴輪(36～57)がある。土器は出土したものすべて、埴輪については端部やタガ部分が残存する等で図化しえたものを掲載した。なお北～西の調査区壁より掘り出した遺物もあり、これらについては出土地点等が不明確なものもある。

以下、出土遺物について器種毎に記述する。

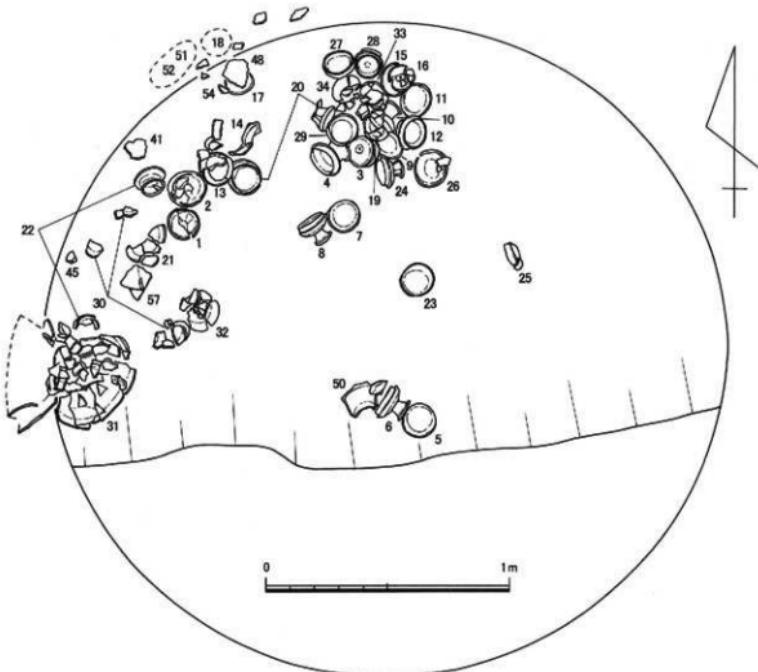
【土器（1～35）】

・須恵器有蓋高杯（1～28）

焼成や形態の特徴から大きくA・Bの2種類に分けられ、出土位置からみて同類の蓋と高杯を組み合わせていたことが窺える。第5図ではセット関係にあると思われる蓋と高杯を組み合わせてレイアウトしている。A類は5組10点（1～10）、B類は9組18点（11～28）である。このうち一組が蓋をした状態で逆位の出土であった（15・16）。また23と24、25と26はやや出土地点が離れているがセットとした。

A類は焼成がやや不良で、色調は灰白色を呈するものである。

蓋A類は天井部に丸味をもち、口縁端部は内傾する平面からやや四面を成す。回転カキ目を施すものではなく、灰被りのものはみられない。天井部内面中央には最終調整にナデが施されるが、それに先行するハケ状の工具痕（円弧タタキ？）が認められる。法量の平均値は口径13.2cm・器高5.8cm・天井部径13.1cm・つまみ径3.3cmを測り、B類よりひとまわり大きい。3・7には天井部に重ね焼きの痕跡が認められる。なお9は焼成がやや良好で、B類との中間位の焼成といえるも



第4図 S O 1 遺物出土状況平面図 (S = 1/20)

のであり、法量も小さめであるが、形態・調整等の特徴からA類に含めた。

高杯A類はスカシが無く、杯底部は丸味をもつ。回転カキ目を施すものはない。杯底部内面には蓋A類と同様の工具痕が認められる。法量の平均値は口径11.5cm・器高10.2cm・受部径13.6cm・脚底径9.3cmを測り、蓋と同じくB類よりひとまわり大きい。口縁端部はやや内傾する平面、あるいは凹面を成し方形に近い。脚端部は玉縁状のもの（2・4・6）と外端面が垂直に近い凹面を成すもの（8・10）がある。

B類は焼成がおむね良好で、色調は灰色を呈するものである。

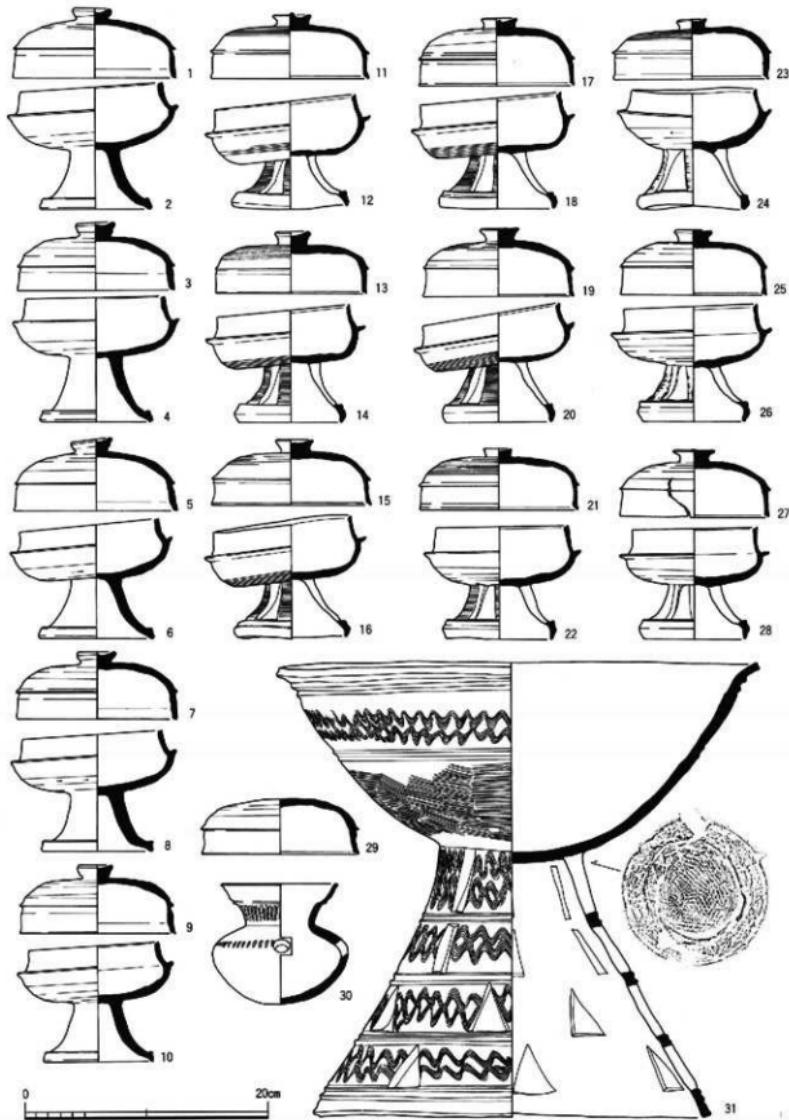
蓋B類は法量の平均値が口径12.7cm・器高5.4cm・天井部径12.8cm・つまみ径3.0cmを測る。口縁端部は内傾する凹面を成し、天井部に重ね焼きの痕跡（高杯脚部）が認められるものは11・15・17・19・21・23、灰が被るものは11・15・17・21・23・25である。11・13・21・27の天井部内面中央には最終調整にナデが施される。27は口縁部にひび割れがあり変形している。天井部外面の回転ヘラケズリ後に回転カキ目を施すBa類（11・13・21・23）と、施さないBb類（15・17・19・25・27）に分けられ、Ba類は天井部中央がほぼ平ら、Bb類は丸味をもつ。法量を比べると、Ba類の平均値が口径12.8cm・器高5.2cm・天井部径13.0cm、Bb類の平均値がそれぞれ12.6cm・5.6cm・12.6cmとなり、Ba類の方が器高が低く径が大きいため扁平といえる。なおBb類とした15・19には不明瞭ではあるが回転カキ目が認められることから、ナデ消しているものと考えられ、17・25・27もその可能性がある。

高杯B類は脚部三方向に台形スカシを施し、脚端部は下方に屈曲する。口縁端部は蓋B類と類似し内傾する凹面～平面を成す。12・18は一部焼成不良で脚端部が灰白色を呈する。杯底部内面中央に最終調整のナデが施されるのは12・16・18・20・24である。法量の平均値は口径11.1cm・器高9.8cm・受部径13.2cm・脚底径8.7cmである。高杯B類はさらに形態から杯底部が平らなB1類（12・14・16・18・20）と、丸味を持つB2類（22・24・26・28）に分類が可能である。法量ではB1類の方が大きい。B1類には杯底部～脚部外面に、B2類の22・24・26には脚部外面のみに回転カキ目が施される。24・26は不明瞭でナデ消されていると考えられ、また28もその可能性があることから、B類は蓋・高杯の全てに回転カキ目が施されているのかもしれない。

A類・B類を比較してみると、焼成状況に大きな差が認められる。焼成時にA類は温度の上がりにくい窓上方の煙道付近に、逆にB類は温度の高くなる窓下方の焚き口付近に置かれていたものと思われ、A類に灰被りがみられないこと、またB類に歪みのあるものが多いこととも合致する。法量ではA類がB類よりひとまわり大きいが、同時に焼成されたものと仮定すると、これも焼成温度の差に起因するものと捉えられ、本来同一規格であったのかもしれない。

表1 SO1出土須恵器高杯（1～28）法量表（cm）

器種	蓋 A類									蓋 B類								
	番号	1	3	5	7	9	平均	11	13	15	17	19	21	23	25	27	平均	
口径	13.4	13.1	13.5	13.3	12.8	13.2	13.1	12.5	13.2	12.8	12.5	13.1	12.4	12.1	12.3	12.7		
器高	5.9	5.7	6.1	5.7	5.7	5.8	5.5	5.2	5.5	5.7	5.7	5.1	5.1	5.4	5.7	5.4		
天井径	13.3	13.0	13.2	13.4	12.7	13.1	13.1	12.7	13.0	12.9	12.4	13.2	13.2	12.1	12.5	12.8		
つまみ径	3.2	3.3	3.5	3.3	3.0	3.3	3.2	3.0	3.1	3.0	3.3	2.3	2.5	3.1	3.5	3.6		
器種	高杯 A類									高杯 B類								
	番号	2	4	6	8	10	平均	12	14	16	18	20	22	24	26	28	平均	
口径	11.8	11.5	11.6	11.6	10.8	11.5	11.7	11.1	11.5	11.6	11.5	11.0	10.4	11.0	10.4	11.1		
器高	10.6	10.5	10.0	10.1	9.9	10.2	9.6	9.8	10.3	9.8	10.0	9.5	10.2	9.8	9.3	9.8		
受部径	14.1	13.7	13.4	13.7	12.9	13.6	13.7	13.3	13.4	13.5	13.5	13.1	12.7	13.2	12.4	13.2		
脚底径	9.3	9.3	9.5	9.2	9.1	9.3	9.4	8.5	8.8	9.5	8.7	8.8	8.4	8.2	8.3	8.7		



第5図 S.O. 1 出土遺物① (S = 1/4)

蓋のつまみ形状では、蓋A類はいずれも中央がやや盛り上がり、外面下位に段を成すという特徴がある。これに対して蓋B類では、中央が突出するもの（11・17）や、薄く扁平なもの（19・27）、円柱に近いもの（21）と様々である。蓋A類はつまみ形状の他に口縁部内面に稜を成すという特徴も共通し、また蓋A類と高杯A類にはすべてに内面ハケ？という共通の調整が認められることから、A類に関しては製作に同一工人が関わった可能性が高いといえよう。

・須恵器杯蓋（29）

口縁形態や焼成・調整の特徴からみて、高杯蓋Bb類のつまみを除いたものといえる。法量は口径12.9cm・器高4.6cm・天井部径12.9cmを測る。天井部内面中央には最終調整にナデが施されている。

・須恵器翫（30）

法量は口径9.6cm・器高10.0cm・体部最大径11.2cm・頸部径5.6cmを測る。調整は底部内外面ナデ、他が回転ナデで、頸部外面に櫛描波状文（12本/1.3cm）、体部外面に櫛描列点文を施す。口頸部内面・底部内面・肩部外面に自然釉が掛り、体部に垂れる部分もある。焼成良好で色調は灰色を呈する。

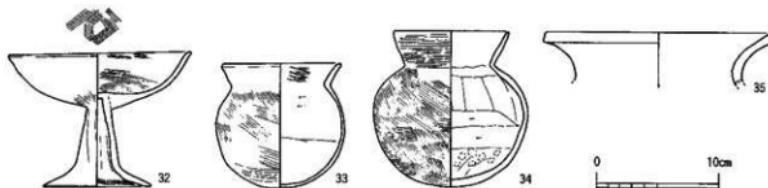
・須恵器器台（31）

ほぼ完形品に接合されたもので、法量は口径39.5cm・器高38.1cm・脚底径32.5cm・脚高22.3cm・基部径11.8cmを測る。調整は回転ナデ、台部外面下半は平行タタキ（4本/cm）で、基部内底面にも認められる。台部外面の脚取り付け部分には、接合強化のためのヘラ描き沈線が観察できる（拓影）。

装飾は口縁部下位と台部中位、また脚部には4段に各2条の凸線を巡らせ、さらに凸線間には櫛描波状文（9本）を施し、また脚部には施文後に4段にスカシを穿つ。櫛描波状文は各2段で、台部は下段から上段に、また向かって右から左に、脚部では逆に上段から下段、左から右に連続して施され、施文の始点・終点付近では3段になっている。スカシは7方向に施され、上2段が長方形、下2段が三角形で、下から2段目のみ方向が千鳥状となっており、他の3段は直列している。

・土師器高杯（32）

ほぼ完形品に接合され、法量は口径15.1cm・器高10.9cm・脚底径9.0cm・脚高6.5cmを測る。摩滅のため調整は不明瞭であるが、杯部は外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ヘラミガキ、脚部は外面ナデで、裾部の内面はハケである。色調は橙色を呈する。



第6図 S01出土遺物② (S=1/4)

## ・土師器壺 (33・34)

33は球形の底体部を成し、法量は口径9.8cm・器高10.1cm・体部最大径10.6cmを測る。摩滅のため調整は不明瞭であるが、口縁部は外面ヨコナデ、内面ハケ、底体部は外面ハケ、内面ヘラケズリである。色調は淡赤橙色を呈し、体部外面に黒斑を有する。

34はほぼ完形で、やや肩の張る球形の底体部を成す。法量は口径9.5cm・器高12.7cm・体部最大径12.7cmを測る。調整は口縁部がヨコハケ後ヨコナデ、底体部は外面ハケ、内面ヘラケズリである。色調は橙色を呈する。

## ・広口壺 (35)

法量は口径19.2cmを測る。胎土は生駒西麓産であろう。器壁の摩滅が著しく、調整等は不明である。形態からみて時期は弥生時代後期～古墳時代前期に比定されよう。

## 【埴輪 (36～57)】

埴輪は数点の小片を除いて上層からの出土である。器種では円筒 (36～46)・朝顔形円筒 (47～50) の他、形象埴輪では蓋 (51～56)・人物？ (57) がある。器壁が摩滅したものが多い。破片中に黒斑が認められるものではなく、また須恵質のものはみられない。

## ・円筒 (36～46)

口縁部 (36～40)・体部 (41～45)・底部 (46) がある。いずれも調整は横・斜め（継）方向のハケが主で、41～44・46は内面ナデである。37の内面は口縁部が斜めハケ、以下はナデである。口縁端部はほぼ方形を成し、内側に小さく肥厚するものが多い。端面は水平の他、内傾・外傾するものがあり、四面を成すものが多い。タガの断面形状は低い台形やM字形を成すものがあり、外端面は内傾するものが多く、垂直なものもある。43～45はスカシを有し、44・45は円形、43は不明である。色調は37・42が橙色～明褐色系、他がにぶい黄橙色～灰黃褐色系を呈する。37と42は同一個体と思われる。法量は口径約25.1cm (36・37)・底径15.2cm (46) である。

円筒埴輪の時期については『川西編年』<sup>註1</sup>があり、またこれを基にした古市古墳群出土円筒埴輪の編年<sup>註2</sup>が試みられている。当資料は小破片が多く全容を知れるものはないが、これらに照らし合わせると、タガの形状やヨコハケ調整の存在からみて『川西編年』のIV期末頃、後者の編年ではIV期5段階～V期に位置付けられよう。

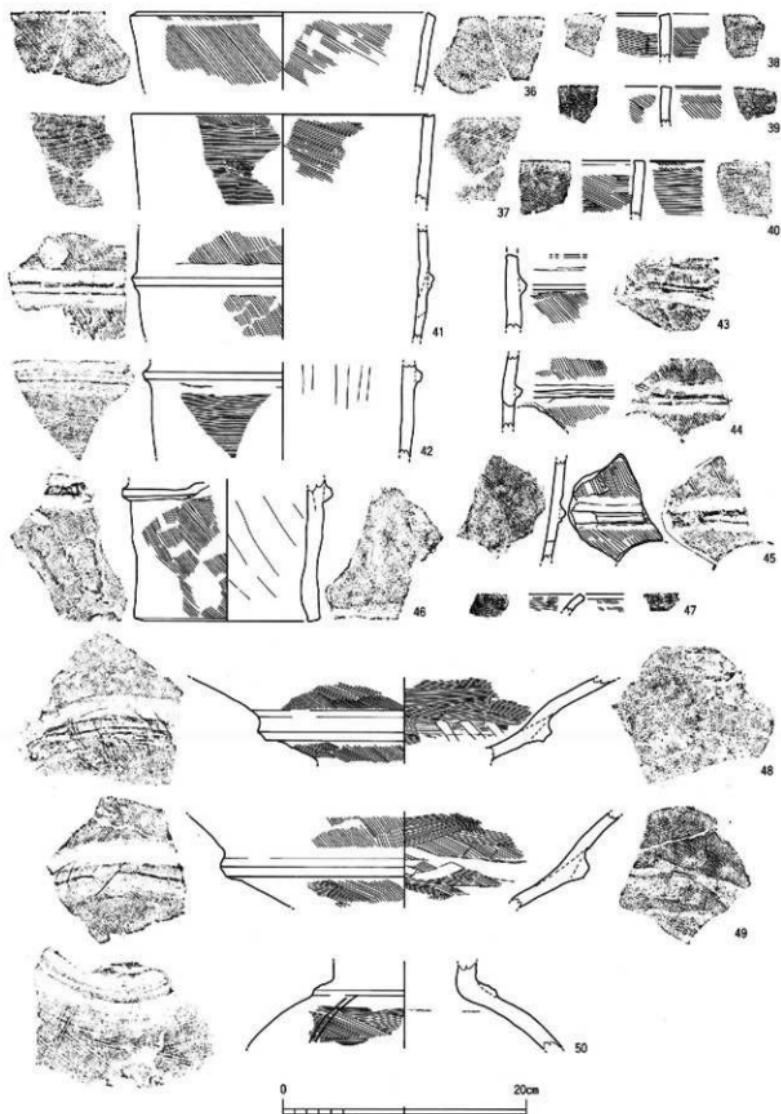
## ・朝顔形円筒 (47～50)

口縁部 (47～49) の調整は、外面が斜め方向、内面が横～斜め方向のハケである。50は頭部～肩部にあたり、調整は外面が横～斜め方向のハケ、内面がナデで、肩部外面には2条の平行線状の線刻を有する。色調は48・49がにぶい黄橙色系、50が明褐色系である。48と49は調整等からみて同一個体の可能性が高い。

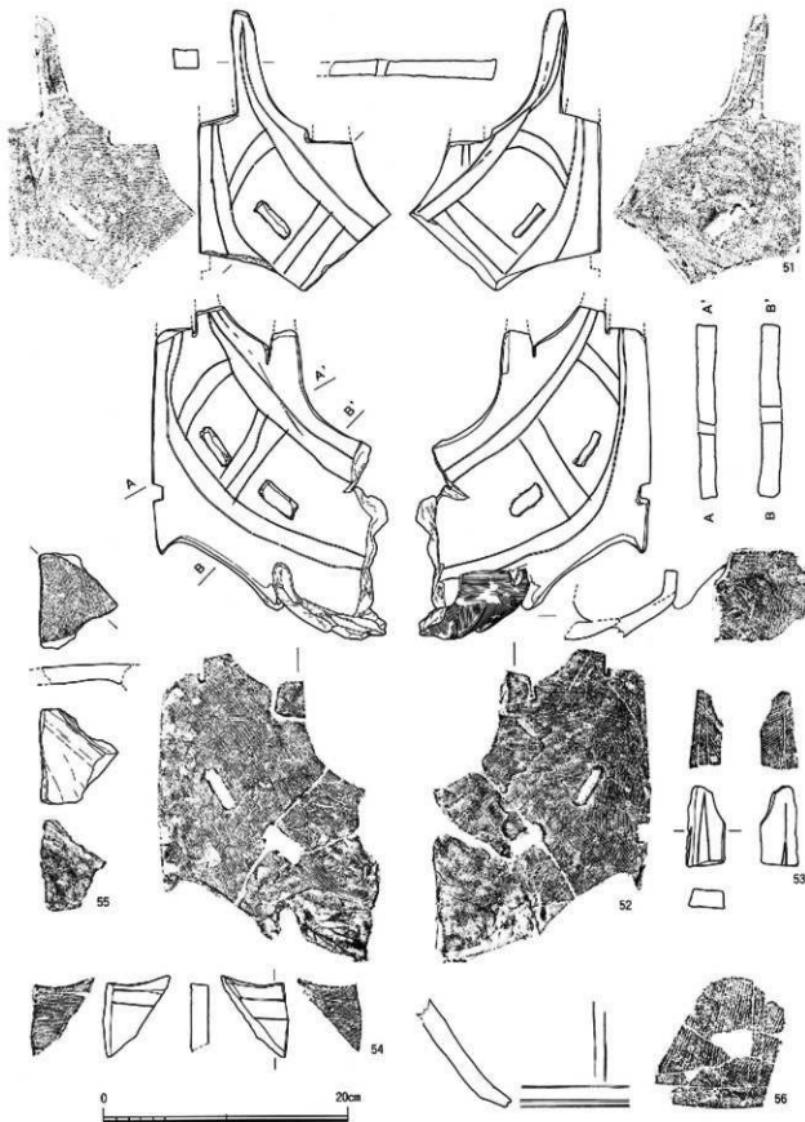
## ・蓋 (51～56)

調査区北壁内からまとまって出土したものである、立飾り部分は1枚がほぼ完形に復元しえ、計2枚以上が確認できた (51～54)。他に笠部 (55・56) がある。

立飾り部分には2～3条の平行沈線からなる線刻が描かれ、2個の長方形スカシが穿たれている。鱗は強調され3本の角状に上方に突出している。線刻は切り合ひからみて、周縁に沿って描いた後、その間を上下に結んでいる。こういった線刻による表現は、5世紀前半に定式化する所である。調整はいずれも外面ハケ調整で、周縁はヘラケズリである。52では軸との  
註3



第7図 SO 1出土遺物③ (S = 1/4)

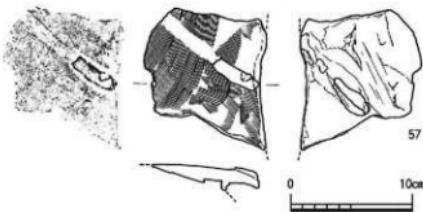


第8図 SO 1出土遺物④ (S=1/4)

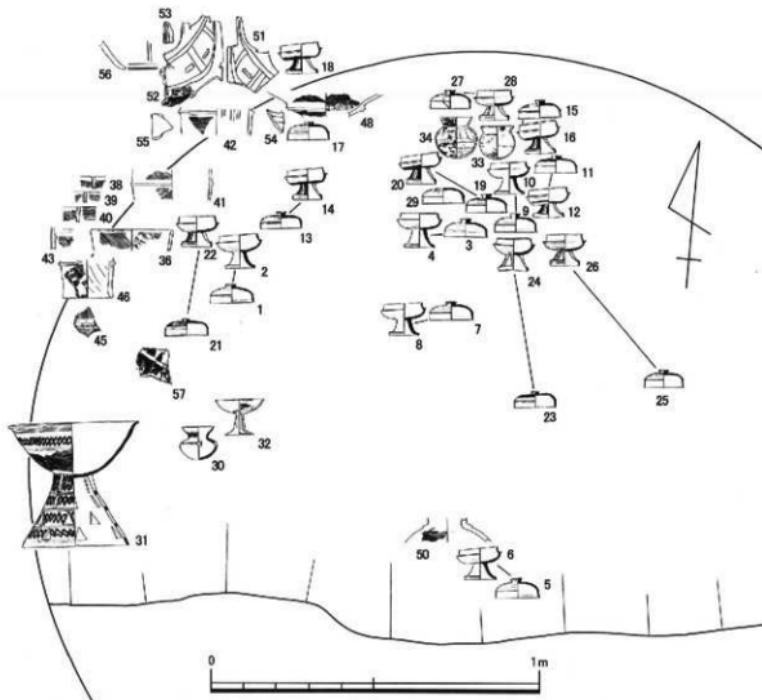
取付け部がナデられている。52にはこの取付け部下位に楕状の基部が認められ、この部分は外面ハケ、内面ナデである。色調はおおむねぶい黄橙色で、53が橙色を呈する。立脚り部の法量は、厚さ1.2cm~1.6cmを測り、高さ約32cm・最大幅約41cmに復元できる。

笠部は外面ハケ、内面ナデ調整で、56では端部ヨコナデで、端面は凹状を成す。56は外面を放射状の2条の平行沈線により区画しているよう、端部外面には1条の沈線を巡らせる。口径は計測不能である。53・56はややハケが荒く、焼成もやや不良で、他とは別個体である可能性も考えられる。

なお、当資料と同様の線刻で長方形スカシを有するものとしては、古市古墳群  
譽田御廟山古墳（応神陵）の陪冢である  
栗塚古墳出土品に類例が認められる。  
註4



第9図 SO 1出土遺物⑤ (S = 1 / 4)



第10図 SO 1 遺物出土状況復元図 (S = 1 / 15)

## ・人物？ (57)

巫女の衣服（意須比）部分の一部と思われるが明確ではない。表面には細かいハケが施され、たすき、あるいは帯を表現していると思われる幅約1cmの粘土紐を付している。裏面はナデであるが、剥離面が大部分を占めている。色調はにぶい橙色を呈する。

S O 1 は出土遺物からみて古墳の周溝である可能性が高く、直線的な肩からみて方墳、あるいは前方後円墳の前方部とも考えられる。この場合埴輪の出土地点からみて墳丘は北側に求められよう。出土遺物のうち埴輪は墳丘からの転落によるものであろうが、破片が多いことから、墳丘上で破損して周溝内に流入したものが多いと思われる。一方、土器はほとんどが完形品、あるいは完形近くに接合できるもので、多くがほぼ元位置をとどめていると思われる。出土地点をみると、東部では土器が密集し、土器師壺2点を須恵器高杯セットが囲むような状況が推定できる。ここでは須恵器杯蓋1点の存在が不自然といえ、土器師壺に被せていたのであろうか。なお土器群がさらに北・西に続く可能性はある。出土状況では、須恵器器台はS O 1肩部近くに位置し、杯部を西に、脚部を東にして押し潰された状況の出土であった。また高杯も口縁部を西や北西に向けて倒れた状況のものが多く、破損したものでは杯部が脚部の西方から出土している。このことから埋没に際しては東～南東方向からの水流等の加撃が推察される。

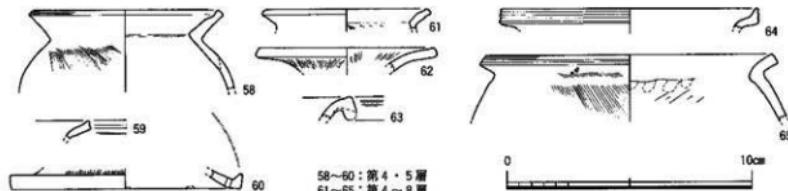
これら多量の土器の性格については、葬送儀礼・祭祀に伴う供獻土器であろう。須恵器高杯に関しては二種類の規格品が揃っており、日常に使用していたものではなく供獻用に用意されたものである可能性が高い。なお第4層・第5層が墳丘崩落土であるとすると、古墳造営と土器供獻には時期差が考えられる。これらの遺物の時期であるが、須恵器の形式ではTK208～TK23型式で、時期は5世紀末頃に、また埴輪についてはやや遅るかほぼ同時期に比定される。

八尾市域での類例としては、八尾南遺跡で検出された同時期の方墳があり、周溝内に須恵器蓋杯8セット・壺2点を並べる例や、周溝外に蓋杯5セットを並べている例がある。  
註5 註6

## c. その他の出土遺物

第4層～第8層からは弥生時代中期末～後期前半の土器が出土している(58～65)。このうち58～60がS O 1下層の可能性がある第4層・第5層からの出土で、他は層位が明確ではない。

58・59は壺で、58は体部外面板ナデ、内面ナデを施す。高杯(60)は生駒西麓産の胎土で、調整は外面縦方向のヘラミガキである。柄端部8方向に円孔を穿ち、脚端部上端面に刻み目を施している。壺(61)、器台(62)、壺(63)は生駒西麓産の胎土であろう。63は口縁部外面に櫛描直線文を施す。壺(64)は口縁端部外面に2条の凹線を巡らせるもので、搬入土器の可能性があり吉備地方が考えられる。壺(65)は体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。



第11図 1区 出土遺物 (S=1/4)

### 〈3区〉

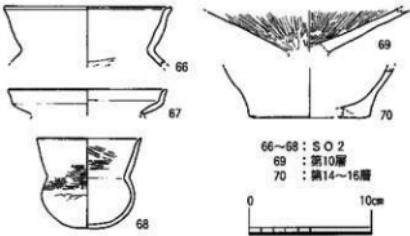
#### a. 基本層序と出土遺物

第1層は盛土・擾乱、第2層は旧耕土である。第2層中には第3層以下に及ぶ南北方向の杭列がみられた。第3層～第5層は水成層で、1区・2区で確認した近世の河川堆積に準ずる層と考えられる。第6層・第7層はほぼ水平堆積を呈する非常に粘性の強い粘土層で、水田耕土の可能性もあるが明確ではない。畦畔・足跡等はみられなかった。第6層からは中世頃の半瓦が出土しており、他に古墳時代前期頃の土器片を少量含んでいる。第8層・第9層は落ち込み（S O 2）埋土である。第10層以下は水成層と考えられる。上部にあたる第10層～第13層は層厚約1.3mを測る灰青色系シルト～粘土層、下部の第14層～第16層は層厚1.9m以上を測る砂層である。第10層から弥生時代後期頃に比定される高杯片（69）が出土している。第14層上面は西に下がっており、砂層中には北に下がるラミナが観察できる。第14層中には間層として灰青色シルト～微砂層がみられた。砂層中からはローリングされた弥生時代の土器（70）の他サヌカイト片が出土している。

#### b. 検出遺構と出土遺物

##### S O 2

標高約9.5mの第10層上面で検出した落ち込みである。調査区中央で東西方向の直線的な肩が検出され、ここから南に向かってゆるやかに落ち込んでおり、深さは最大約35cmを測る。埋土は上層（第8層）・下層（第9層）に分かれ、両層には炭・焼土が含まれ特に上層に多い。出土した土器は小片が多く、同じく上層から多く出土している（66～68）。66は布留式壺で、口縁端部を上外方につまみあげるものである。二重口縁壺（67）は生駒西麓産の胎土と思われるもので、吉備地方の影響が考えられる。小型丸底壺（68）は表面剥離のため調整が不明瞭であるが、体部外面縦ハケ後ヘラミガキで、口縁部内面にはハケが残る。これらの土器の時期は古墳時代前期布留式期古相～中頃に比定される。



第12図 3区 出土遺物 (S = 1/4)

### 3.まとめ

今回の調査地は遺跡範囲の南東端にあたる。これまで近辺では発掘調査は実施されておらず、遺跡の実態は不明瞭な地域であったが、調査では弥生時代中期～古墳時代中期・近世の遺構・遺物が検出された。出土遺物量はコンテナ5箱を数える。

1区は、その土層堆積状況からみて、上限は不明であるが近世までの長期にわたって河川流路域にあったことが確認された。東約200mには旧大和川の主流であった玉串川が北流しており、当地はその影響下にあったものと捉えられる。2・3区においても近世段階には同様の状況であったことが窺える。

2区の下層では、約50m東の1区で顕著に見られた河川堆積は認められず、粘土～シルトを基調とする堆積が続き、当地が自然堤防上に位置する比較的安定した状況であったことが確認された。そして標高約9.4mでは、古墳の墳丘裾～周溝部分にあたると思われる落ち込み（S O 1）が検出された。出土した土器や埴輪からみて時期は5世紀末に比定され、中期古墳としては当遺跡内においては初例となるものである。当遺跡内では、当地の西方約500mにおいて、家形・船形等の埴輪を伴う4世紀末の埋没古墳（中田古墳）が確認されている他、北約350mでも後期の埴輪がまとめて出土しており古墳の存在が推定されている。<sup>註7</sup>また南の東弓削遺跡域でも、南方約700mにおいて、盾形・家形等の埴輪が出土した溝や、5世紀末の須恵器蓋杯4セットが出土した溝状構造が確認され、古墳である可能性が高い。<sup>註8</sup>古墳時代中期を中心とした一帯は墓域となっていたようで、居住域は遺跡北部が中心となっている。

3区では古墳時代前期布留式期の落ち込み（S O 2）を検出した。埋土には土器とともに炭や焼土が多く含まれていることから、居住域が隣接することは確実であろう。また2・3区の下層からは、弥生時代中期～後期の土器も数点出土しており、中田遺跡南部～東弓削遺跡北部で検出されている弥生時代～古墳時代の集落が東へ抜がる可能性が高い。

## 註記

- 註1 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻 第2号』日本考古学会
- 註2 上田 誠 1992「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」『古代文化 第44巻 第9号』財団法人古代学協会
- 註3 高橋克壽 1992「2 墓輪の種類と編年（2 器財埴輪）」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 墓輪』雄山閣
- 註4 山田幸弘 1998「古墳時代中期の様相—古市古墳群を中心に—」『中期古墳の展開と変遷—5世紀における政治的・社会的变化の具体相（1）—』埋蔵文化財研究会
- 註5 原田昌則 1995「I八尾南遺跡（第8次調査）」「八尾南遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告47」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註6 原田昌則 1995「II八尾南遺跡（第12次調査）」「八尾南遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告47」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註7 坪田真一 1994「35. 中田遺跡第19次調査（N T93-19）」「平成5年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註8 坪田真一 1998「IV 中田遺跡第30次調査（N T95-30）」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告61」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註9 山本 昭 1976「東弓削遺跡—大阪府水道部送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査—」「八尾市文化財調査報告3」八尾市教育委員会



2区 調査風景



2区 S O 1 遺物出土状況（南から）



2区 S O 1 遺物出土状況（西から）



2区 S O 1 遺物出土状況（南東から）



2区 S O 1 遺物出土状況（東から）



2区 S O 1 遺物出土状況（南東から）



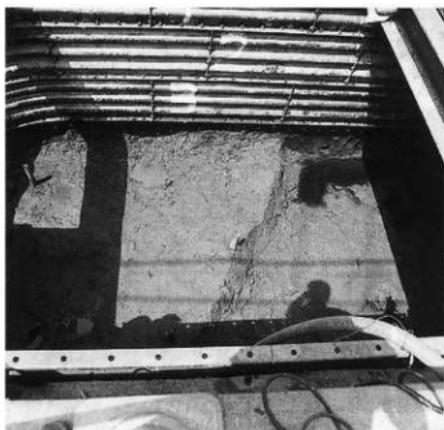
2区 S O 1 遺物出土状況細部（南東から）



2区 S O 1 遺物出土状況細部（31. 南東から）



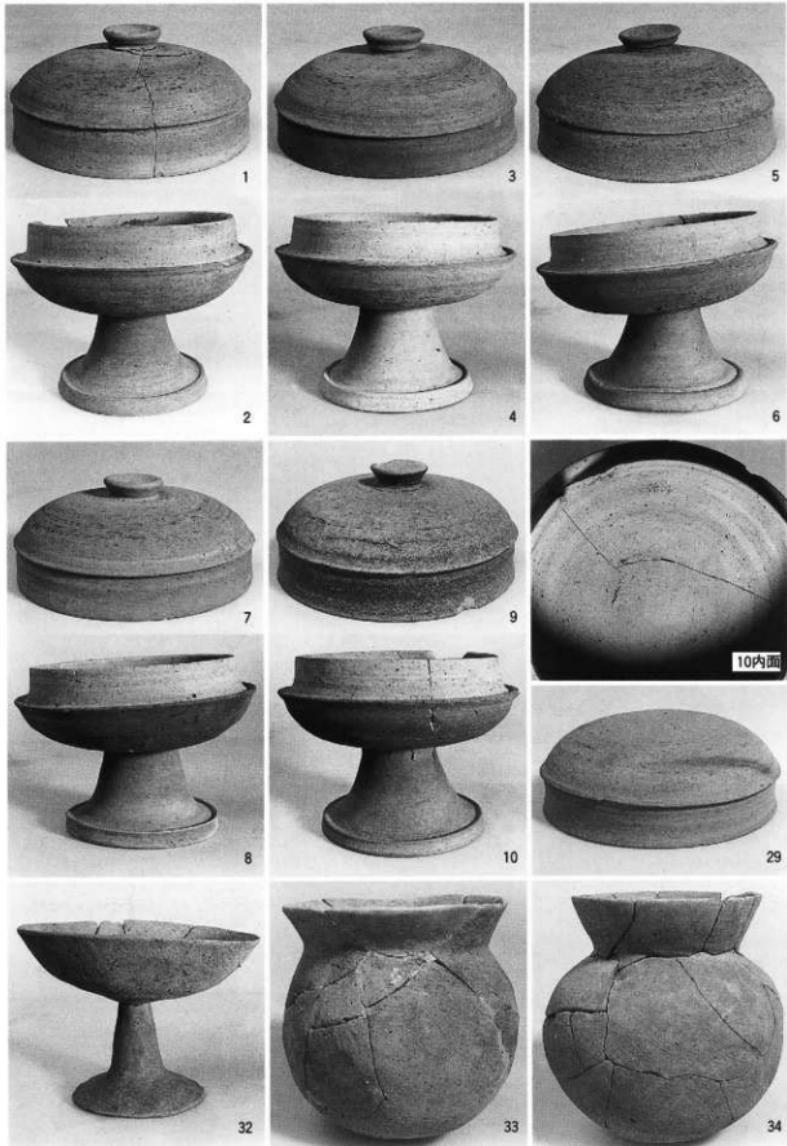
2区 S O 1 遺物出土状況細部（東から）



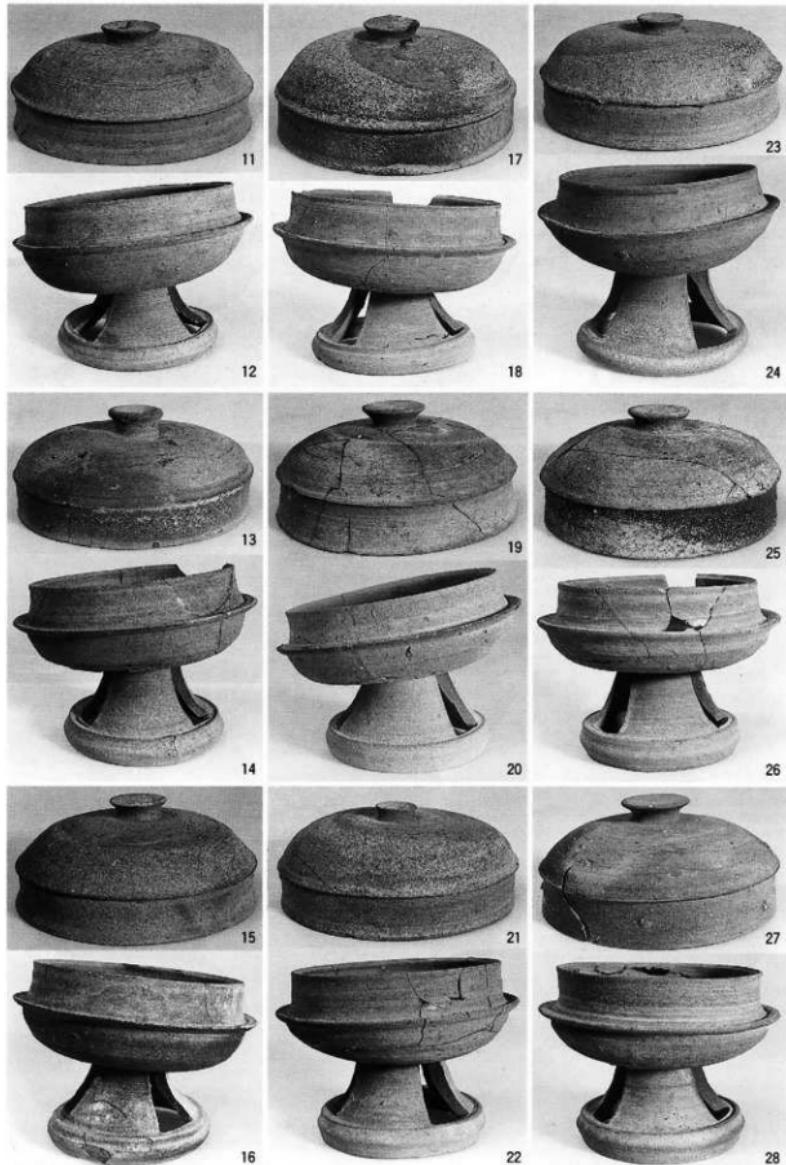
1区 第8層上面（南から）



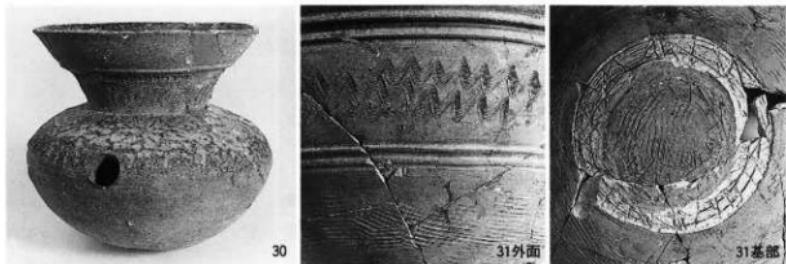
3区 第10層上面（南から）



S O 1 出土遺物（須恵器・土師器）

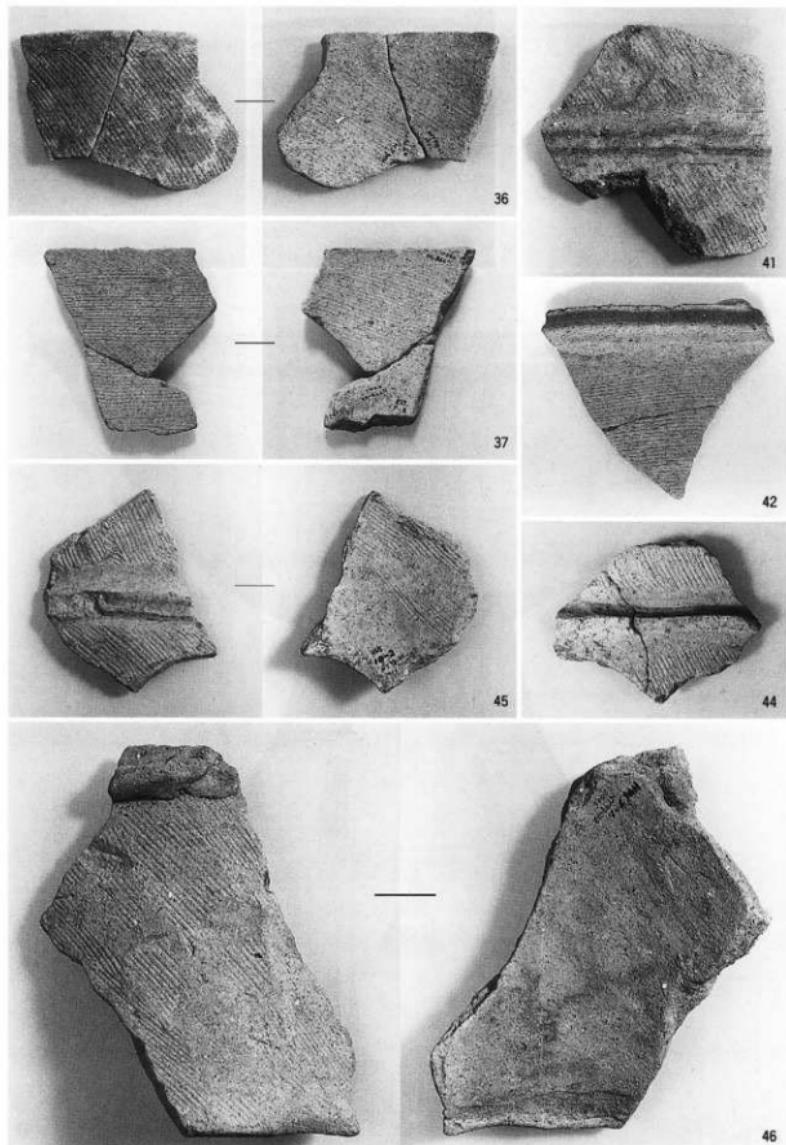


S O 1 出土遺物（須恵器）

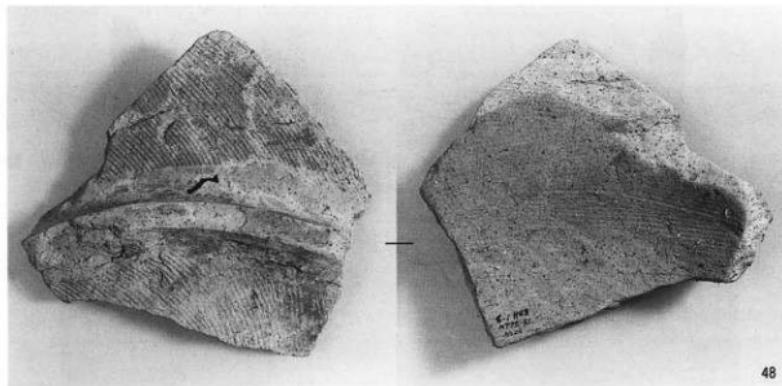


31

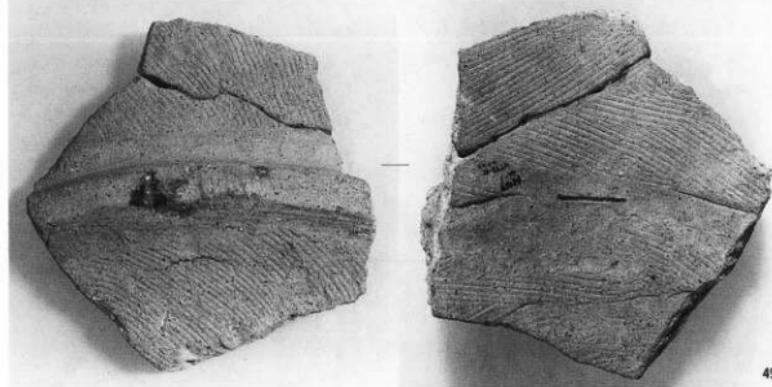
S O 1 出土遺物 (須恵器)



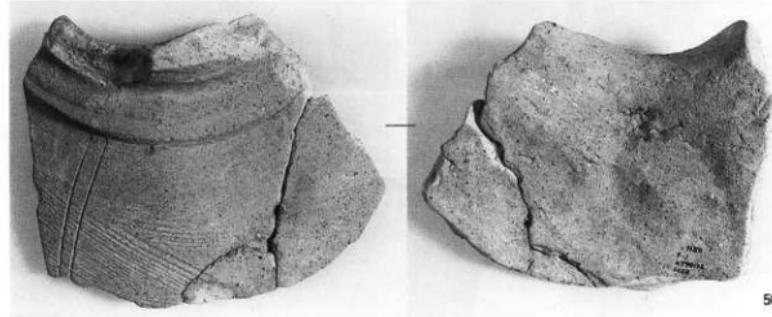
S O 1 出土遺物（円筒埴輪）



48

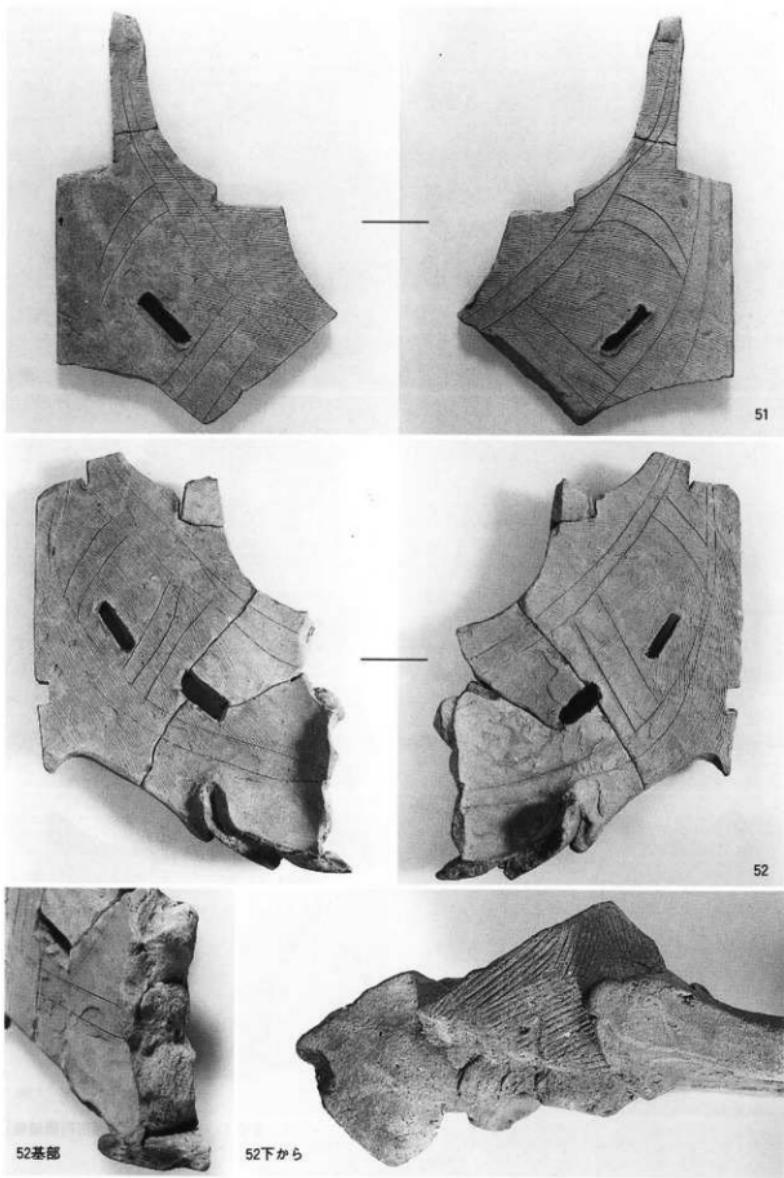


49

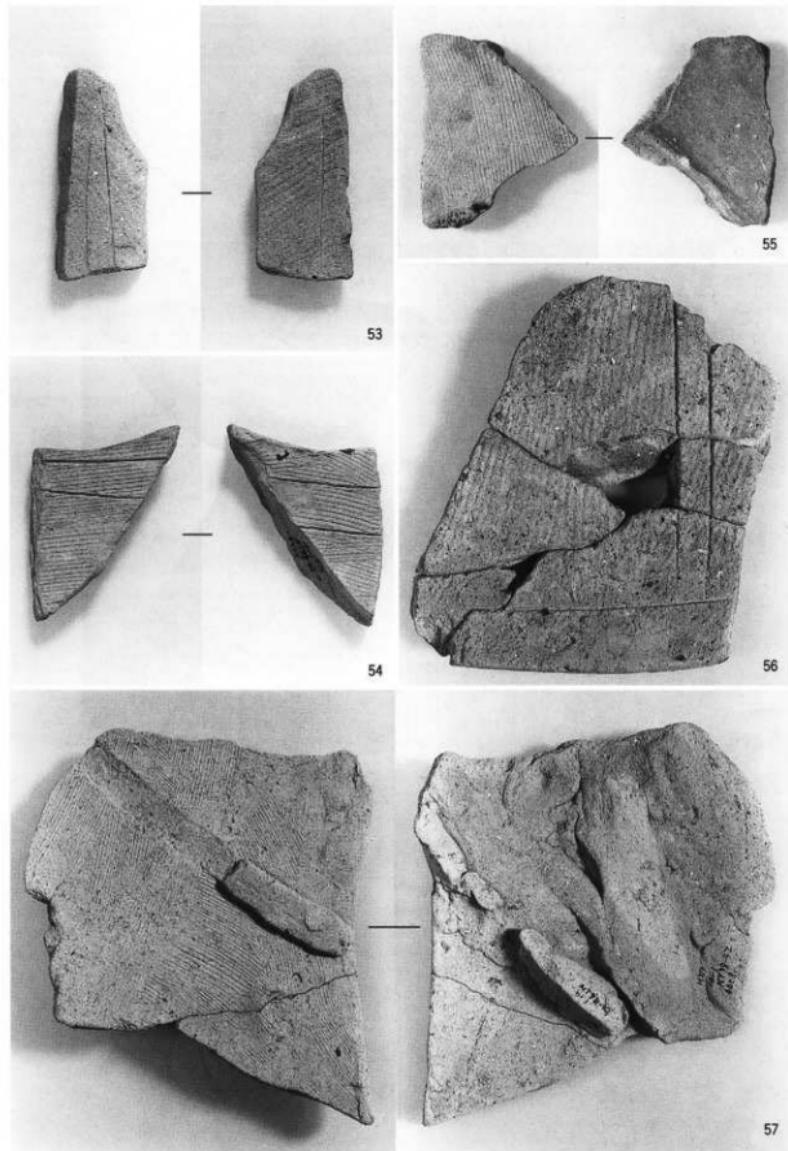


50

S O 1 出土遺物（朝顔形円筒埴輪）



SO 1 出土遺物（蓋形埴輪）



S O 1 出土遺物(形象埴輪)



S 01 出土遺物

XIII 中田遺跡第43次調査 (NT98-43)

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市中田2丁目地内で行った公共下水道工事（10-129工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第43次調査（NT98-43）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第443号 平成10年11月4日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年12月3日～12月11日（実働6日）まで、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約20.0m<sup>2</sup>を測る。調査に参加した補助員は以下の通りである。  
飯塚直世・市森千恵子・中西明美・松尾 実(現:(財)大阪府文化財調査研究センター嘱託)・宮崎寛子(五十音順)
1. 内業整理は現地調査終了後、隨時行い、平成11年8月に終了した。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに .....	123
2.調査概要 .....	124
1) 調査の方法と経過 .....	124
2) 基本層序 .....	124
3) 各調査区の概要 .....	124
3.まとめ .....	126

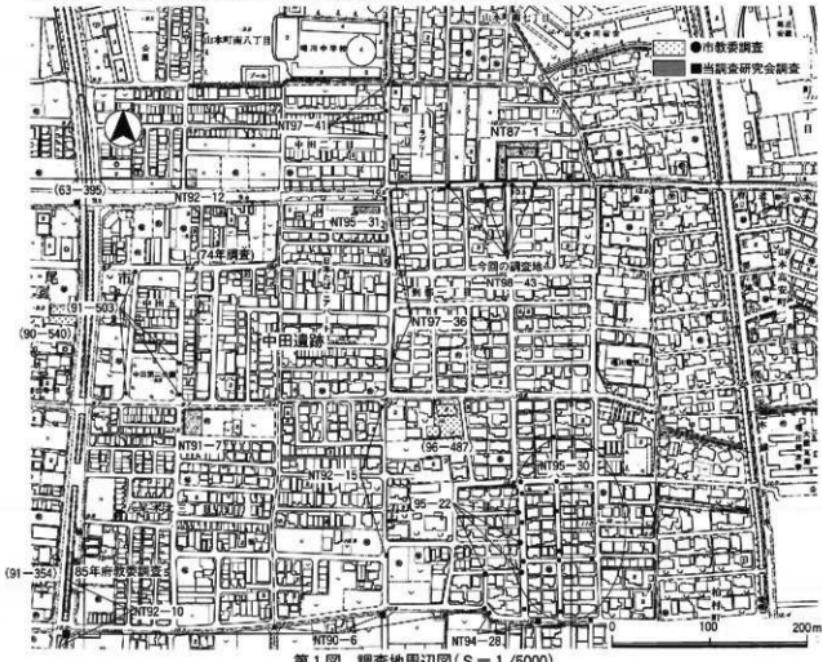
### XIII 中田遺跡第43次調査 (N T 98-43)

1. はじめに

中田遺跡は八尾市のはば中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～5丁目・八尾木北1～6丁目・刑部1～4丁目の東西1.1km、南北0.8kmがその範囲と推定されている。地理的には、旧大和川の主流であった古長瀬川と古玉串川に挟まれた冲積地上に立地し、同地形上においては北に小阪丘遺跡、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡が隣接している。

中田遺跡は昭和45年に行なわれた区画整理事業でその存在が確認され、昭和46年以降、大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって多次にわたる調査が実施してきた。その結果、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。

今回の調査地である中田2丁目は中田遺跡内の北東端にあたる。当調査地北側で行われた第1次調査ではT.P.+8.3m前後で弥生時代後期の井戸や溝、落込みなどが検出されており、遺物も弥生時代後期を中心に古墳時代と中・近世の土器類が出土している。また第31次調査では弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と古墳時代後期の遺構・遺物が検出されている。

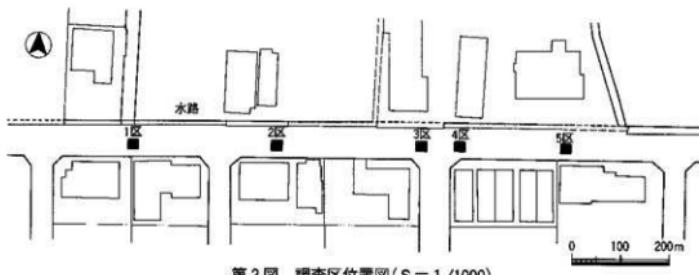


## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（10-129工区）に伴う調査で当調査研究会が中田遺跡内で行った第43次調査にある。調査は東西に並んだ人孔5箇所を対象とし、西から順に1～5区とした。総調査面積は $2 \times 2\text{ m}$ の人孔5箇所で約 $20.0\text{ m}^2$ である。今回の調査地は土質が軟弱であることと北側にNTT管が、南側に水道管が既設されていることが周知であったため、現地表（T.P. +10.4～10.6m前後）下 $1.3\text{ m}$ まで機械掘削を行い、簡易矢板を設置した後、以下を現地表下 $2.5\sim 3.0\text{ m}$ まで人力掘削と機械掘削を併用して掘削することとなった。

調査は平成10年12月3日から11日にかけて4→5→1→2→3区の順で行った。実働日数は6日間である。



第2図 調査区位置図 ( $S = 1/1000$ )

### 2) 基本層序

今回の調査では各調査区とも現地表下 $1.3\sim 1.5\text{ m}$ 付近までNTT管や水道管などの既設工事の擾乱を受けていた。また湧水が激しく、壁が崩れる可能性が高かったため充分な断面観察は行えなかったが、可能な限りで工事による掘削深度まで観察を行った。しかし各調査区の断面は一番安全と思われる面で観察を行ったため模式図とした(第3図)。また一部上下層のつながりが不明瞭な部分は二点破線で示した。各調査区とも若干の相違は認められるが、ほぼ同様の堆積状況を示している。

### 3) 各調査区の概要

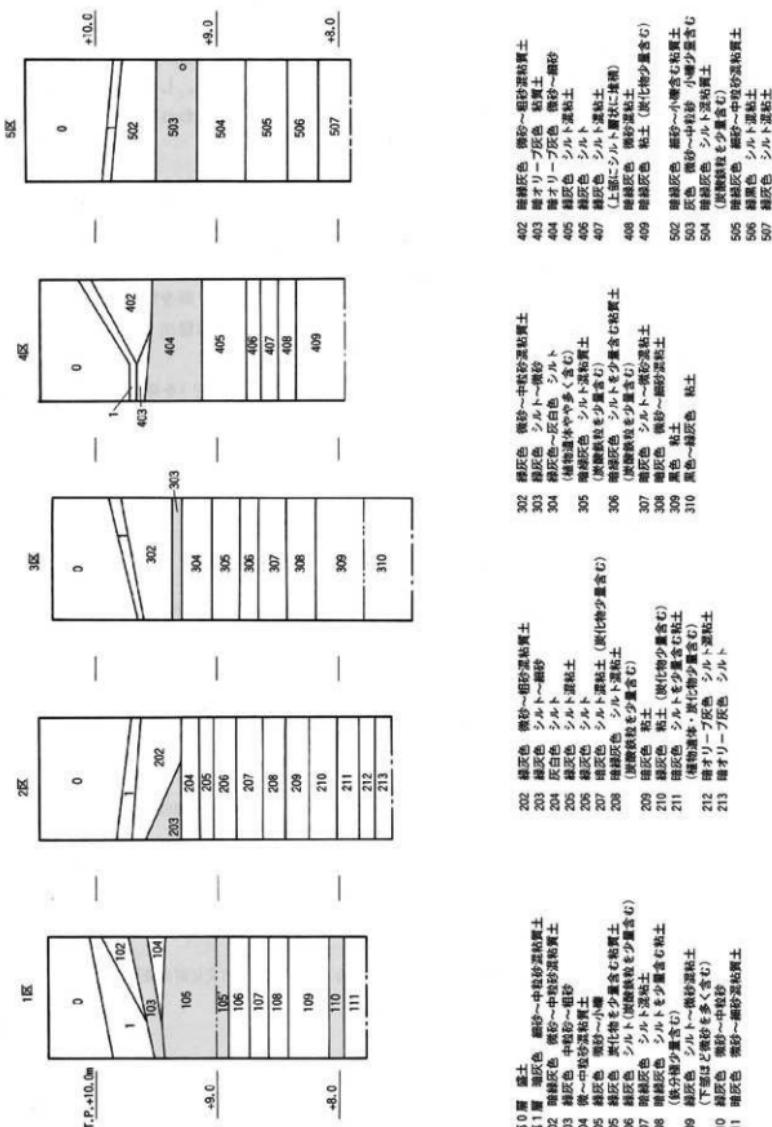
調査の結果、遺物は極少量出土したが、遺構は検出できなかった。以下、各調査区について概要を述べる。

#### 【1区】

現地表面はT.P. +10.40mを測る。現地表下約 $2.6\text{ m}$  (T.P. +7.8m) を調査対象とした。105'層は調査区の北西でみられた層で東側では微砂～小礫の砂層であったが、西側では粘土質シルトへと変化している。遺物は出土しなかった。

#### 【2区】

現地表面はT.P. +10.47mを測る。現地表下約 $2.9\text{ m}$  (T.P. +7.6m) を調査対象としたが遺物は出土しなかった。



第3回 基本層序模式図 (S=1/40)

### 【3区】

現地表面はT.P.+10.36mを測る。現地表下約3.0m (T.P.+7.4m) を調査対象とした。T.P.+8.0m以下は下層確認という形で部分的な調査しかできなかった。3区からは土器片が2点出土したが掘削残土のなかから検出したため正確な出土層は不明である。しかし、掘削時の状況と土器についていた土からみると306層か307層から出土したものとおもわれる。そのうちの1点は底部であるが、小破片のため器形や時期などは不明である。

### 【4区】

現地表面はT.P.+10.46mを測る。現地表下約2.6m (T.P.+7.9m) を調査対象とした。遺物は401層から出土した近・現代の新しい瓦片1点のみである。

### 【5区】

現地表面はT.P.+10.58mを測る。現地表下約2.7m (T.P.+7.9m) を調査対象とした。5区からは盛土から近・現代の瓦片1点と504層から土器が1点出土した。504層出土の土器も小破片のため時期などは不明である。

5区では東壁の観察を行ったところ、T.P.+9.3m前後で竹の管(暗渠?)を確認した。他の調査区でも掘削途中に竹らしき木片が少量観察できたため、調査区の南端を東西方向に設置されていた可能性が高い。土圧によってか、押しつぶされた形であったが、おそらく節を削り抜いただけの管であったと思われる。時期などは不明であるが竹の管(暗渠)のすぐ南側を現代の水道管が平行して走っていた。

## 3.まとめ

今回の調査地は第1次調査と同様、玉串川の自然堤防が西に向かって落込み、低地と接する地点に位置している。現在も1区から5区に向かって徐々に標高が高くなっている。5区より東は現地表面が堤防状に高くなっている。堆積土層を観察すると緑灰色から暗灰色のシルト~粘土が堆積しており、植物遺体や炭化物が少量混在する層がみられることから、当調査地周辺は古玉串川の後背湿地に相当するものとおもわれる。

### 註記および参考文献

- 註1 成海佳子 1988「24.中田遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 原田昌則 1996「VI.中田遺跡第31次調査(NT95-31)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1998「20.中田遺跡第36次調査(NT97-36)」「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1998「25.中田遺跡第41次調査(NT97-41)」「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会



1区 北壁断面(T.P.+10.4~9.2m)



2区 西壁断面(T.P.+10.5~9.3m)



1区 南壁断面(T.P.+9.0~8.5m)



2区 南壁断面(T.P.+8.5~7.6m)



1区 南壁断面(T.P.+8.5~7.8m)



5区 最終状況(西から)



3区 東壁断面(T.P.+10.4~9.4m)



4区 東壁断面(T.P.+10.5~9.3m)



3区 東壁断面(T.P.+9.2~8.5m)



4区 北壁断面(T.P.+9.1~8.2m)



3区 北壁断面(T.P.+8.5~7.4m)



4区 北壁断面(T.P.+8.4~7.9m)



5区 東壁断面(T.P.+10.6~9.2m)



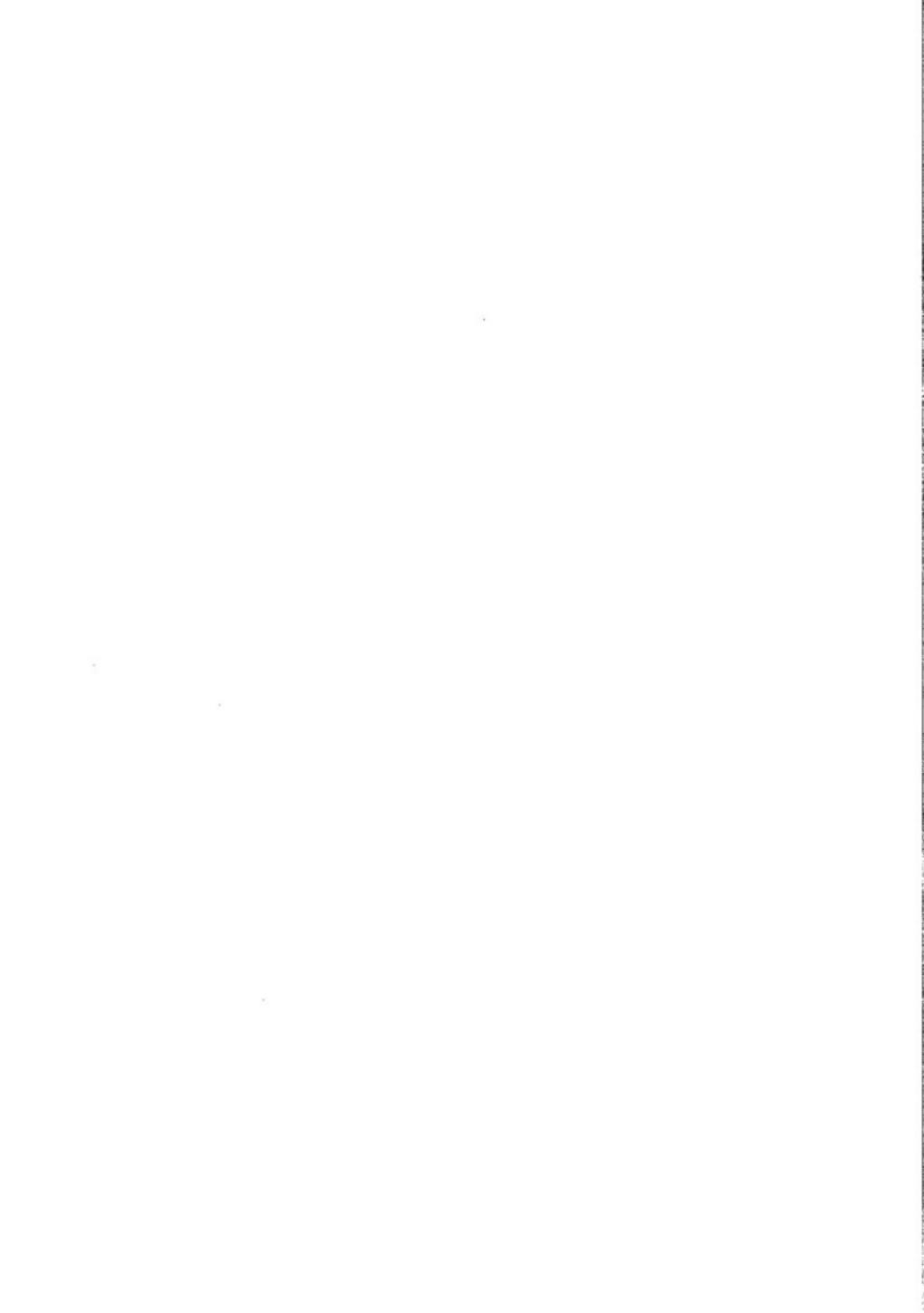
5区 南壁断面(T.P.+9.1~7.9m)



5区 東壁 竹の管(T.P.+9.3m付近)



5区 最終状況(西から)



XIV 矢作遺跡第5次調査（YH98-5）

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市高美町3丁目で行った公共下水道工事（9-32工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する矢作遺跡第5次調査（YH98-5）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋402-2号 平成9年10月2日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市からの委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年5月14日～5月29日（実働6日）にかけて森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約24m<sup>2</sup>を測る。
1. 調査に参加した補助員は以下の通りである。  
中西明美・西岡千恵子・松尾 実（現：（財）大阪府文化財調査研究センター嘱託）（五十音順）
1. 内業整理は現地調査終了後、隨時行い、平成11年8月に終了した。内業整理は以上のはか、岩沢玲子・中村百合が参加した。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

## 本 文 目 次

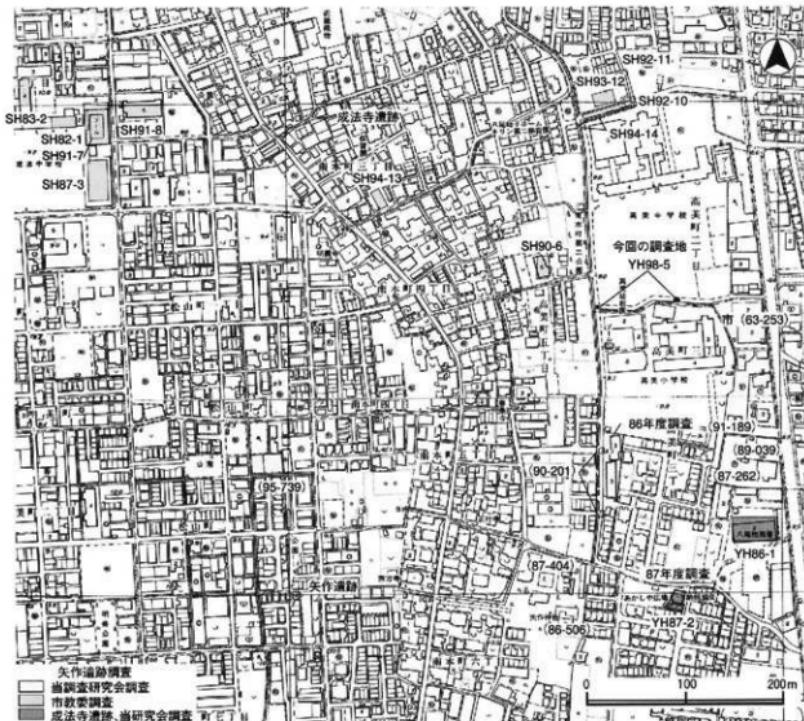
1. はじめに .....	131
2. 調査概要 .....	132
1) 調査の方法と経過 .....	132
2) 基本層序 .....	133
3) 検出遺構と出土遺物 .....	133
3. まとめ .....	136

## XIV 矢作遺跡第5次調査 (YH98-5)

### 1. はじめに

矢作遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では明美町2丁目・松山町2丁目・南本町5~8丁目・高美町3~6丁目・安中町6~8丁目の東西約0.85km、南北約1.0kmがその範囲と推定されている。地理的には、旧大和川の主流であった古長瀬川と古玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上においては北に成法寺遺跡、北東に小阪合遺跡、東に中田遺跡、西に竜華寺跡が隣接している。

矢作遺跡は昭和56年、八尾市教育委員会（以下、市教委）によって行われた南本町5丁目の住宅建設に伴う調査で古墳時代と中世の遺構が検出され周知となった遺跡である。その後、市教委と当調査研究会によって数次にわたる調査が実施されてきた。その結果、弥生時代後期～近世に至る遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが確認されている。



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

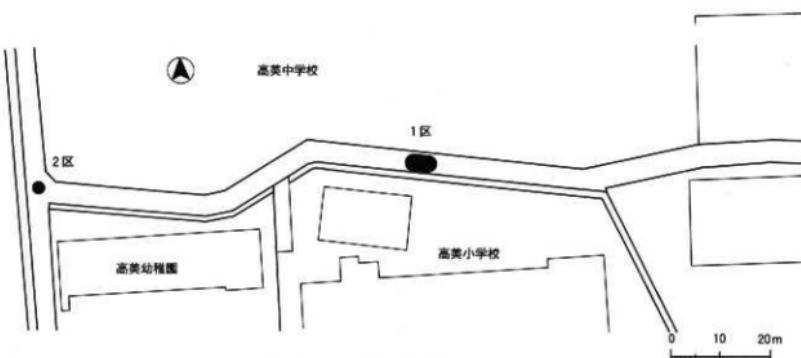
今回の調査地は矢作遺跡内の北東部に位置し、行政区画上、北にひろがる成法寺遺跡との境界にある。また、当調査地南、約300mのところには式内社である矢作神社が鎮座する。

当調査地を中心とした周辺調査の主な成果をあげると、南西約200mの市教委の調査（86年調査）では溝の中から古墳時代前期の変形四獸鏡が出土した。また、古墳時代後期の大型掘立柱建物が検出され、当地域に有力な氏族が存在したことが明らかとなった。その他、南東約250mに位置する当調査研究会が行った第1次調査では弥生時代後期～鎌倉時代末期までの遺構・遺物が検出されている。なかでも13世紀後葉に比定される池状遺構はその特殊な構造から、水を用いた祭祀に関わりを持つ集団が存在していた可能性が示されている。また、第2次調査では埴輪片や鉄刀など古墳に関連する遺物が検出されている。その他にも成法寺遺跡第12次調査で埴輪片が、第14次調査でも埴輪片や周溝の可能性のある直角に曲がる溝などが検出されており、付近一帯に古墳の存在をうかがわせる地域である。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（9-32工区）に伴う調査で当調査研究会が矢作遺跡内で行った第5次調査にある。調査は東西に並んだライナー2箇所を対象とし、東側の小判形のライナーを1区、西側の円形のライナーを2区とした。総調査面積約24m<sup>2</sup>である。調査は1区から開始した。当地では比較的浅い深度から遺構面が検出される可能性があったため、まずライナー部分を現地表下0.8m前後まで機械および人力で掘削し、遺構の有無を確認してから、次に覆鋼板設置範囲まで調査区を拡張し、覆鋼板の枠およびライナーを設置しながら以下を調査する方法をとった。調査は八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に従い、現地表(T.P.+9.2m前後)下約1.3~1.7mまでを人力掘削と機械掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。また、それ以下についても可能な範囲で(現地表下約1.8~2.6m)下層の確認を行った。



第2図 調査区設定図(S=1/1000)

## 2) 基本層序

基本層序は第3図のとおりである。今回は両調査区とも搅乱を激しく受けており、断面を観察できたのは北壁と西壁の一部のみであった。断面観察の結果、1区と2区では若干様相を異にし、1区でみられた旧耕土は2区では部分的にしかみられず、砂層（107層・204層）も2区の方が0.4~0.5m高いレベルで検出した。107層・204層とも河川堆積によるものとおもわれ、湧水が激しかった。特に2区では204層以下からの湧水が激しく、壁面も崩れる可能性があったため以下の調査を断念した。

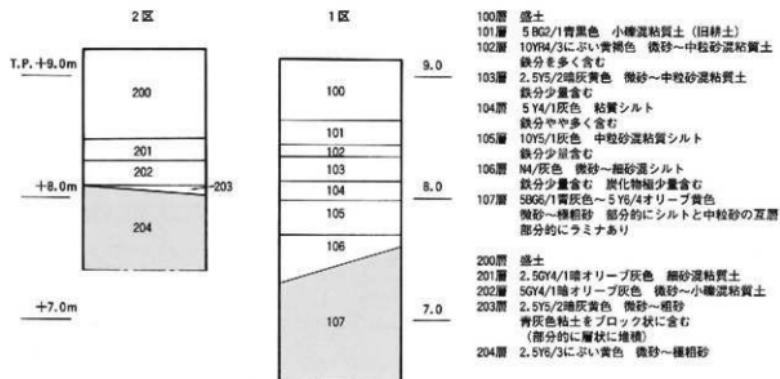
遺物も104層以外の各層から検出したがいずれも遺物包含層と言えるほどの密な包含状況ではなかった。また、機械掘削によるものがほとんどである。

## 3) 検出遺構と出土遺物

### 【1区】

1区では中世の遺構面に相当するとおもわれる現地表下1.0~1.3m付近までガス管と水道管理設時に搅乱を受けていたため平面的な調査は行えなかった。また、現地表下1.5~1.8mから検出した107層からの湧水が激しく断面観察も困難であった。

遺物が出土したのは101~103層、105~107層からである。101層・102層から出土したのは磁器など近世以降のものである。105層からは土師質の遺物が出土したが小破片のため時期は不明である。106層からはタタキのはいった壺の破片が出土しており、弥生時代後期から古墳時代初頭のものであるとおもわれる。107層からは弥生時代後期とおもわれる壺の体部および器台の脚部、壺か壺の底部等が出土した。各層の出土遺物の中から図化したものは、107層から出土した器台の脚部（1）と底部片（2）の2点のみである。



第3図 基本層序模式図 (S = 1/40)

(1) は脚部のみであるが、上段は2箇所、下段は1箇所、円孔が残存している。残存状況から、各段3方向に円孔が施されていたものとおもわれる。内外面とも磨耗しており調整は不明瞭であるが、外面はやや雑なヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整を行っている。(2) は底部片のみで、器形は不明である。

#### 【2区】

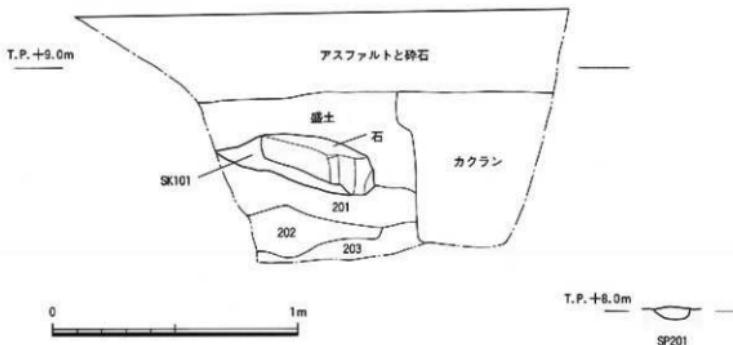
2区でも調査区東側に水道管が埋設されており、また、南側半分は周辺の水路構築時に搅乱を受けたらしく、現地表下1.0m前後までコンクリートや土管などが埋まっていた。そのため旧耕土は部分的にしか見られなかった。また、以下も搅乱を受けていたため平面的に遺構検出ができるのは全体の1/4程度であった。検出した遺構は土坑1基(S K101)、小穴1個(S P201)と杭3本(杭1・2・3)である。

#### 第1面(T.P.+8.7m前後)

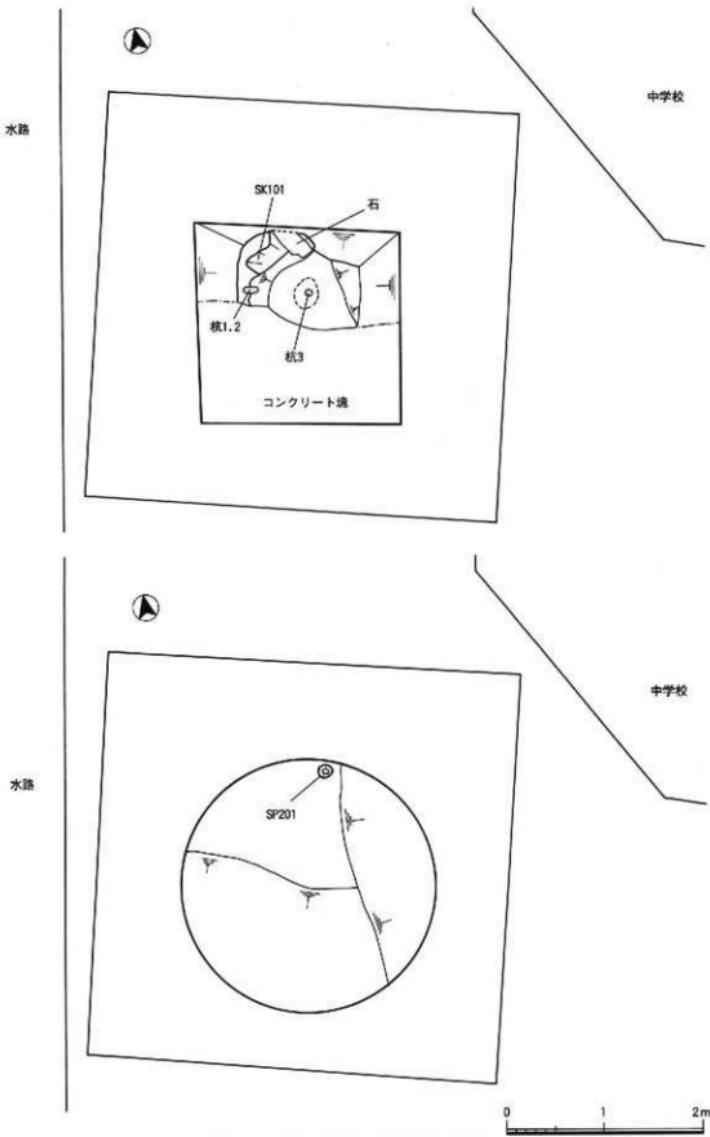
便宜上、第1面としたが、S K101、杭1・2は壁部分から検出しており、平面的に検出できたものではない。杭3は203層上面で検出したが、形態が杭1・2と類似しているため、同時期のものであると考え、第1面検出とした。

#### 土坑(S K101)

土坑は深さ約0.2mを測り、石(長さ49cm・幅20cm・高さ18cm)を置く時に掘りくぼめられたとおもわれる。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂混粘質土に5BG3/1暗青灰色粘質土(旧耕土)をブロック状に含む。北壁断面で確認した遺構で平面的には部分的にしか検出できなかつたため、規模は不明である。出土した石は花崗岩とおもわれ、一部打ち欠いたような加工痕がみられるが、文字などの彫り込みはみられない。4面のうち1面だけがほぼ平らでその面を上に向けて出土した。しかしながら、検出したのが盛土直下であるということと、出土したレベルがT.P.+8.6m前後と南側のコンクリート塊とほぼ同じ高さであるということから、水路の構築時にコンクリート塊と一緒に埋められたものである可能性が高い。



第4図 S K101・S P201北壁断面図(S=1/20)



第5図 2区 第1面・第2面平面図( $S=1/50$ )

### 杭（杭1～3）

杭は計3本検出した。杭1・2は東西に近接して並んでおり、201層上面のT.P. +8.6m付近から検出した。先端はT.P. +8.0m（204層）まで達している。杭1・2とも西壁断面で確認したため掘り込み等は不明瞭である。西側の杭1は丸材で長さが約0.60m、先端は削られ、尖っている。東側の杭2も丸材だが1面が平らになるように削られており、断面はかまぼこ形である。長さは約0.84mで先端を荒く削って尖らせてある。この2本の杭の南側には薄い板材が東西方向に遺存していた。杭3は杭2の約0.5m東、T.P. +8.3m付近から検出した。先端はT.P. +7.9m（204層）まで達しており、杭1・2と同時期のものとおもわれる。検出面で精査を行ったが、掘り込み等は不明瞭であった。杭3は角材で長さは0.4m、4面をそれぞれ削って先端を尖らせている。杭3の周辺には板材の痕跡はみられなかった。杭はそれぞれ腐食が激しかった。

### 第2面（T.P. +8.0m前後）

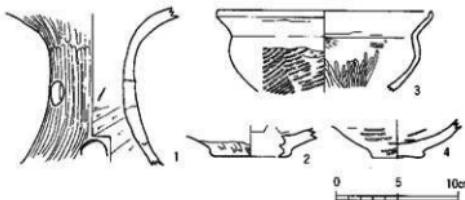
#### 小穴（S P 201）

小穴は204層上面で検出した。径は0.14m、深さは0.05mである。埋土は2.5Y3/2黒褐色・シルト～微砂混粘土で鉄分を少量含む。遺物は出土しなかった。

その他、遺物は各層から検出したが、機械掘削中に出土したものがほとんどである。201～203層からは中・近世の瓦、陶磁器類、瓦質の擂鉢、土師器、須恵器が出土し、204層からは東播系須恵器の捏鉢、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器が出土した。そのうち、図化したものは204層から出土した（3）。

（4）の2点のみである。

（3）は鉢で外面は細いタキ、内面はハケメ後、ヘラミガキで調整をしている。（4）は壺の底部で外面はタキが部分的に残存している。両方とも時期的には弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのものであろう。



第6図 107層(1・2)、204層(3・4)出土遺物実測図(S=1/4)

### 3.まとめ

周辺調査の結果から、古代から中世にかけての遺構が期待されたが、今回の調査で検出できたのは土坑・杭・小穴のみであった。杭は201層上面から検出しており、正確な時期は特定できないが、現代に近い、新しい時期のものであろう。

また、204層上面で検出した小穴も出土遺物がないため、時期を特定することはできないが、204層内から弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土しているため、それ以降のものであろう。また、1・2区から検出した107層・204層に相当するとおもわれる砂層は成法寺遺跡第12次・第14次調査でも検出されており、当調査地周辺から北へのびる自然河川の存在が想定できる。

註記および参考文献

- 註1 八尾市教育委員会 1983「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」
  - 註2 米田敏幸 1987「矢作遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書II」 八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
  - 註3 原田昌則 1989「I. 矢作遺跡（第1次調査）発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告22 (財)八尾市文化財調査研究会
  - 註4 成海佳了 1989「II. 矢作遺跡（第2次調査）発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告22 (財)八尾市文化財調査研究会
  - 註5 坪田真一 1994「IX 成法寺遺跡第12次調査（SH93-12）」「（財）八尾市文化財調査研究会報告42」(財)八尾市文化財調査研究会
  - 註6 原田昌則 1996「III 成法寺遺跡第14次調査（SH94-14）」「成法寺遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告51」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・近江俊秀 1989「14. 矢作遺跡（63-253）」・「19. 矢作遺跡（63-078）」「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I」 八尾市文化財調査報告19 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋・原田昌則 1991「成法寺遺跡<第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書>」(財)八尾市文化財調査研究会報告33 (財)八尾市文化財調査研究会



1区 北壁断面(T.P. +9.2~8.2m)



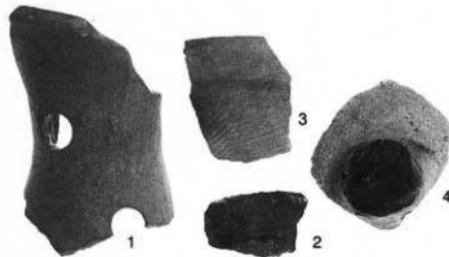
1区 北壁断面(T.P. +7.8~7.2m)



1区 北壁断面(T.P. +8.2~7.7m)



1区 調査区全景(西から)



1区 107層出土遺物(1・2)

2区 204層出土遺物(3・4)



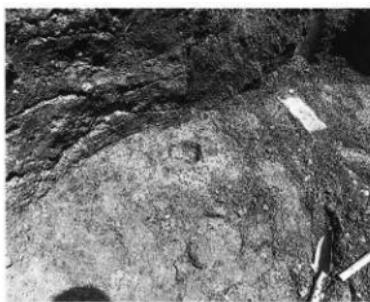
2区 面第1面全景(南から)



2区 北壁断面(T.P.+9.8~8.0m)



2区 杭2検出状況(南から)



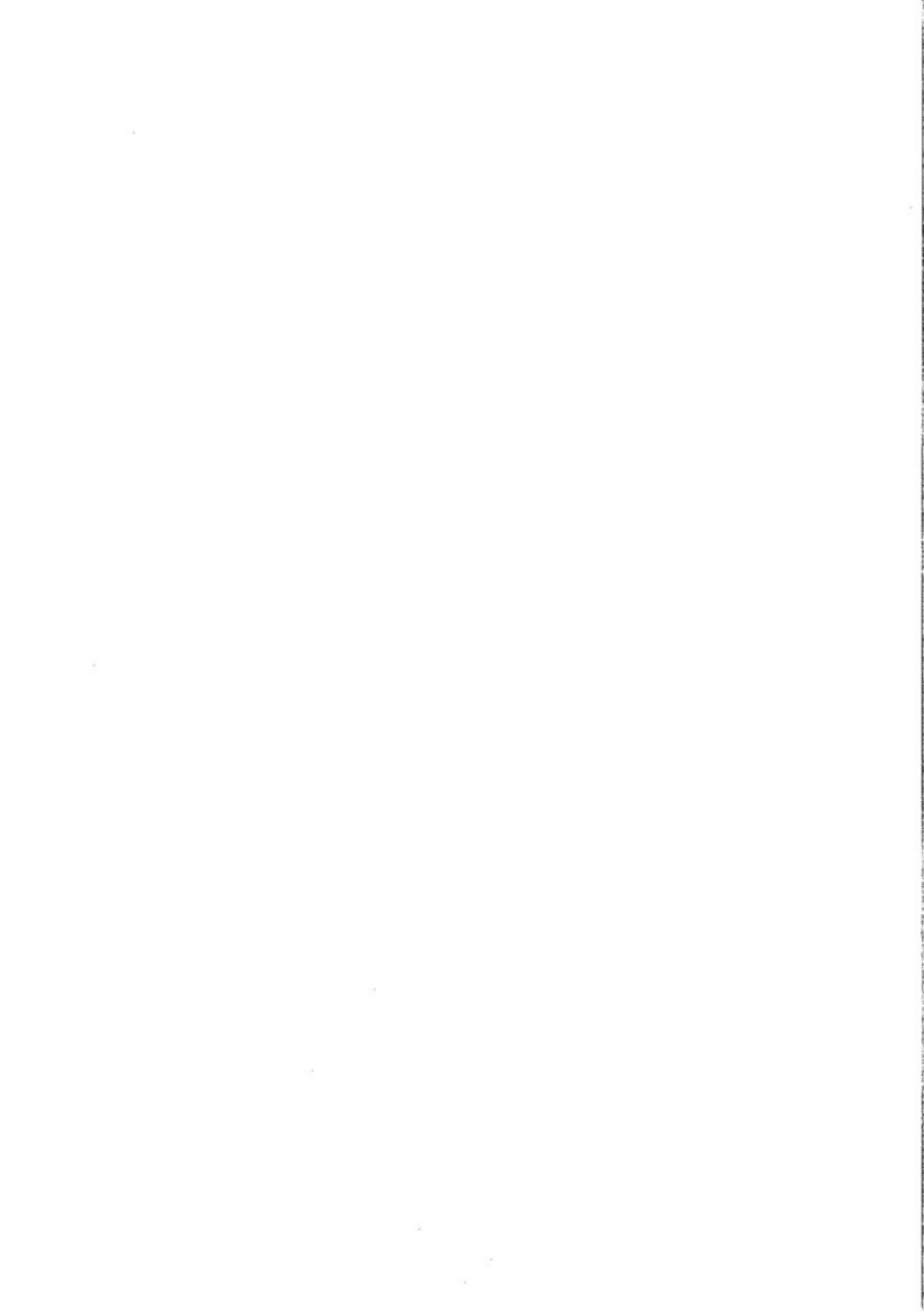
2区 SP201 完壠状況(南から)



2区 杭1・2 板材検出状況(南東から)



2区 最終掘削状況(南東から)



XIV 矢作遺跡第6次調査（YH98-6）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市高美町3丁目地内で実施した公共下水道工事（10-35工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する矢作遺跡第6次調査（YH98-6）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会（以下当市教委と記載）の指示書（八教社文第555号 平成10年12月24日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会（以下当調査研究会と記載）が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年3月11日～平成11年3月25日（実働5日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は約37m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては高橋宏幸、中西明美、松尾実が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西村・中西、図面レイアウト トレース－中西、西村が行った。
1. 本書の執筆、編集は西村が行った。

## 本　文　目　次

1. はじめ	141
2. 調査概要	142
1) 調査の方法と経過	142
2) 検出遺構と出土遺物	142
3.まとめ	147

## XV 矢作遺跡第6次調査 (YH98-6)

### 1. はじめに

矢作遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では明美町2丁目・松山町2丁目・南本町5~8丁目・高美町3~6丁目・安中町6~8丁目の東西約0.85km、南北約1.0kmがその範囲と推定されている。地理的には、河内平野のほぼ中央部を流れる長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北に成法寺遺跡、北東に小阪合遺跡、東に中田遺跡、西に竜華寺跡が隣接している。今回の調査地は矢作遺跡内の北東部に位置している。

当遺跡では、当市教委と当調査研究会によって数次にわたる調査が実施されてきた。その結果、



第1図 調査地周辺図

弥生時代後期～近世に至る遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが確認された。

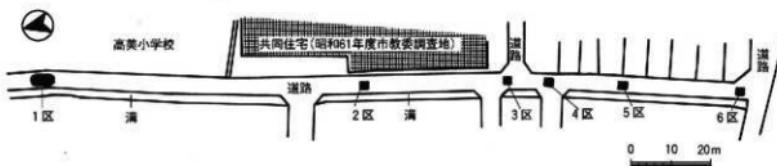
今回の調査地の周辺では過去数件の調査を実施している。近隣の調査例をあげると、東に隣接している当市教委が行った昭和61年度調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の溝・古墳時代後期の掘立柱建物および溝、鎌倉時代以降の耕作面を検出しており、なかでも古墳時代前期の溝から、壺と共伴して小型の変形四獸鏡が検出されたことは特筆すべき成果と言える。また、昭和61年度に当調査研究会が行った高美町3丁目の第1次調査では、弥生時代後期の溝・古墳時代後期の溝や、平安時代後期～鎌倉時代後期の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・河川を検出している。さらに、昭和62年度の高美町4丁目で実施した第2次調査においても、弥生時代後期・古墳時代前期及び後期・奈良時代に比定される遺構・遺物を検出しているほか、埴輪片が包含層や自然河川から出土している。このように、今回の調査地に近接している調査地では上記した各時代の遺構や遺物を多數検出しており、集落が存在していたことが明らかになっている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(10-35工区)に伴う調査で、当調査研究会が矢作遺跡内で行った第6次調査にあたる。調査は、ライナー1箇所と人孔5箇所を対象とし、調査地で最も北側に位置しているライナー部分を1区、以下、人孔部分を北から2区～6区と名付けた。調査は北側の1区から行い、以下2区～6区は北から南へ順に行った。1区は東西3m×南北6.1mを測る楕円形、2区は東西1.8m×南北1.8mを測る方形、3区は東西1.8m×南北2.1mを測る方形、4区は東西1.8m×南北2.3mを測る方形、5区は東西1.8m×南北2.2mを測る方形、6区は東西1.8m×南北2.0mを測る方形で、総調査面積約37m<sup>2</sup>である。

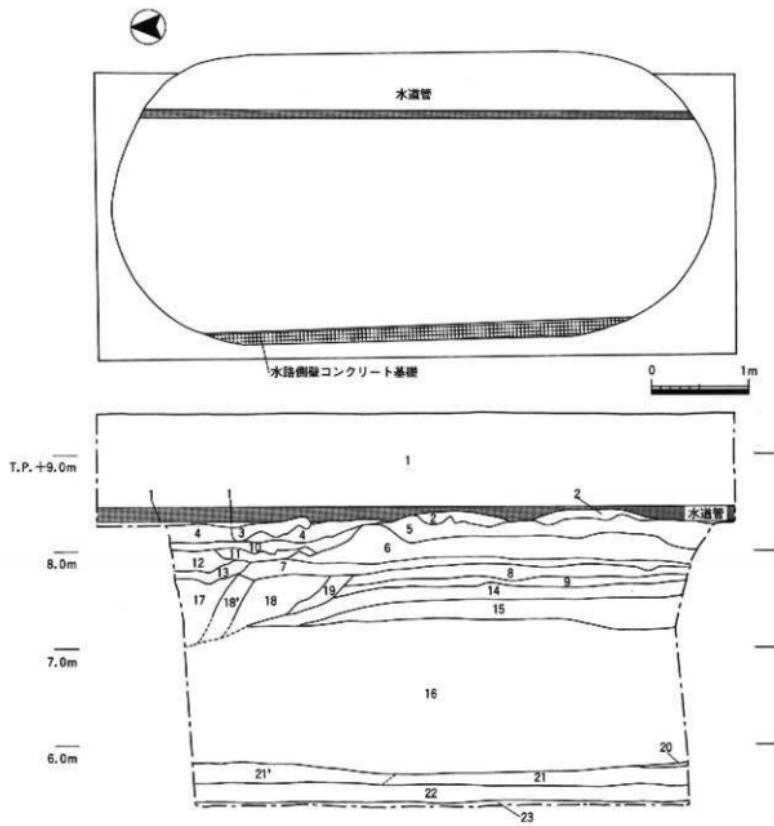
調査は当市教委の埋蔵文化財発掘調査指示書に従い、現地表下約0.9～4.0mまでを人力掘削と機械掘削を併用して遺構および遺物の検出に努めた。



第2図 調査区設定図

### 2) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、2区では現地表下約1.3m(T.P.+8.15m)で古墳時代後期頃の土坑1基(SK-201)、4区では現地表下約1.05m(T.P.+8.5m)で古墳時代後期の小穴1個(SP-401)、5区では現地表下約1.0m(T.P.+8.5m)で古墳時代後期の溝1条(SD-501)、6区では現地表下約1.15m(T.P.+8.5m)で中世の溝1条(SD-601)を検出した。以下調査区毎に検出遺構と出土遺物の概要を記載する。



- 1層 地土  
 2層 7.5Y R7/1明褐色砂混じり粘質土  
 3層 7.5Y R7/2明褐色シルト質土  
 4層 5Y R7/4Lにぶい粘土質土(鐵化鉄の斑点あり)  
 5層 7.5Y R7/4Lにぶい粘結質土(鐵化鉄の斑点あり)  
 6層 10Y R8/1灰白色微砂  
 7層 5G7/1明緑灰色微砂  
 8層 5G6/1緑灰色粘土  
 9層 5G6/1緑灰色粘質シルト  
 10層 10Y R7/1灰白色微砂混じりシルト  
 11層 5Y R7/2明褐色砂混じり細砂  
 12層 2.5Y7/2灰黃色砂混じりシルト  
 13層 5G7/1明緑灰色シルト混じり微砂  
 14層 5G6/1緑灰色粘土  
 15層 5G7/1明緑灰色細砂  
 16層 10Y R8/1灰白色粗砂  
 17層 13層と同層で青みがある  
 18層 8層と同層で青みがある  
 19層 5G6/1明緑灰色シルト  
 20層 7.5Y5/2灰オリーブ色粘土(植物遺体含む)  
 21層 10G6/1緑灰色粘土 21' 層は鐵酸鉄を含む  
 22層 5G3/1緑灰色シルト  
 23層 10G6/1緑灰色シルト

第3図 1区 平断面図

## 1区

ライナー部分の調査区で、現地表は約T.P. +9.4mを測る。堆積土は1~23層を確認した。1層は盛土で、現地表下1.0~1.3m付近までは、水路工事と水道管埋設時の掘削で削平されていた。2層からは土師器や瓦器の破片が少量出土した。17~19層は8層上面から落込む堆積層で、北側に落込む遺構が存在していたと考えられる。T.P. +7.3~5.7m前後に堆積している16層の砂層は河川の埋土である。砂層の上部は砂粒が細かく、下部に行くに従いやや粗い砂粒が見られた。

遺構は現地表下1.0m前後に存在していると予想されたが、この深さまでは既設の水路と水道管の埋設工事によってすでに攪乱されていた。

## 2区

人孔の調査区で、現地表は約T.P. +9.45mを測る。堆積土は1~5層を確認した。1層は盛土で道路築造工事の際の整地土を含んでいる。3層からは土師器や須恵器の破片が少量出土した。5層のシルト混粘土は、昭和61年度当市教委調査の5層に相当し、古墳時代後期頃に比定できる。

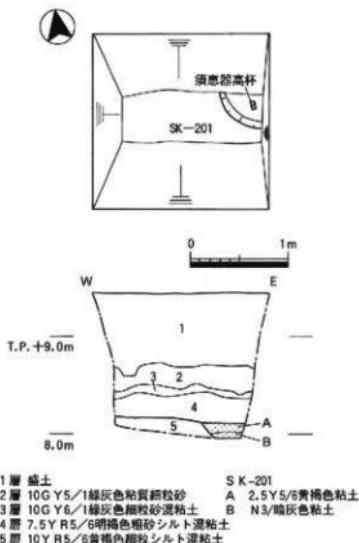
現地表下約1.3mの5層上面(T.P. +8.15m)で土坑1基(SK-201)を検出した。

SK-201は、北東側が調査区外に至り平面形状および規模などの詳細は不明である。検出した東西幅は0.45m、南北幅は0.35m、深さは0.15mを測る。埋土は上からA層2.5Y5/6黄褐色粘土、B層N3/暗灰色粘土で、A層からは須恵器の高杯の脚部(1)が1点出土した。(1)は長脚の二段スカシをもちスカシは3方向である。TK43型式頃に比定される。

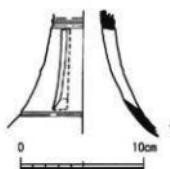
## 3区

人孔の調査区で、現地表は約T.P. +9.5mを測る。調査地の北側は現地表下1.2m付近に埋設されている水道管により、攪乱されていた。また、掘削を行っている途中で東西の両壁面から水が湧き出し壁面が崩壊したため、調査は掘削範囲の南側のほぼ中央部のみをおこなう結果となった。堆積土は1~4層を確認した。1層は盛土である。4層のシルト混粘土は昭和61年度当市教委調査の5層に相当し、古墳時代後期頃に比定される。

現地表下約1.15mの4層上面(T.P. +8.35m)で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。隣り合う調査区である2区や4区の層位から、4層上面は古墳時代後期に比定される。

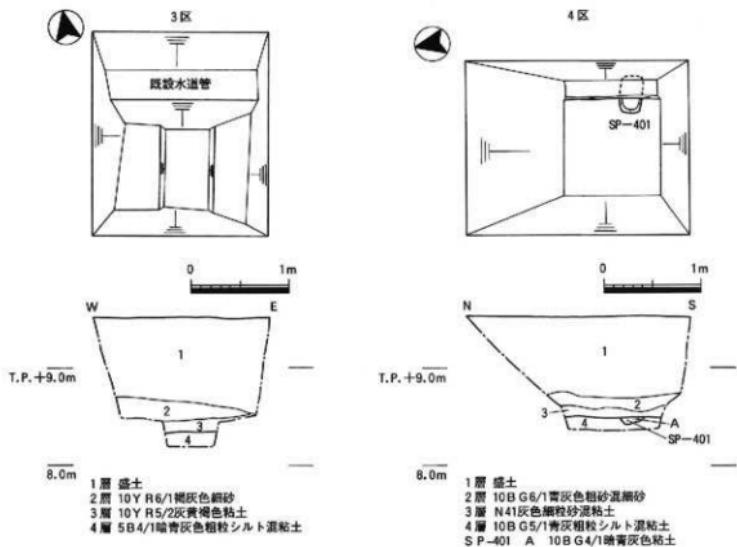


第4図 2区 平断面図



第5図 2区 SK-201

出土遺物



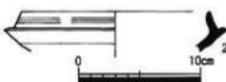
第6図 3区・4区 平断面図

## 4区

人孔の調査区で、現地表は約T.P.+9.55mを測る。堆積土は1~4層を確認した。1層は盛土である。3層は細粒砂混粘土で、古墳時代から中世までの遺物が少量出土した。4層のシルト混粘土層は、北東に隣接している昭和61年度当市教委調査の5層に相当し、古墳時代後期に比定される。

現地表下約1.05mの4層上面(T.P.+8.5m)で小穴1個(S P-401)を検出した。

S P-401は調査区の南東側で検出した。平面形状は東西方向に長い隅丸方形である。長径0.4m、短径0.25m、深さ0.1m、埋土は10B G4/1暗青灰色粘土で、須恵器の杯身(2)が出土した。杯身はT K10型式頃に比定できる。



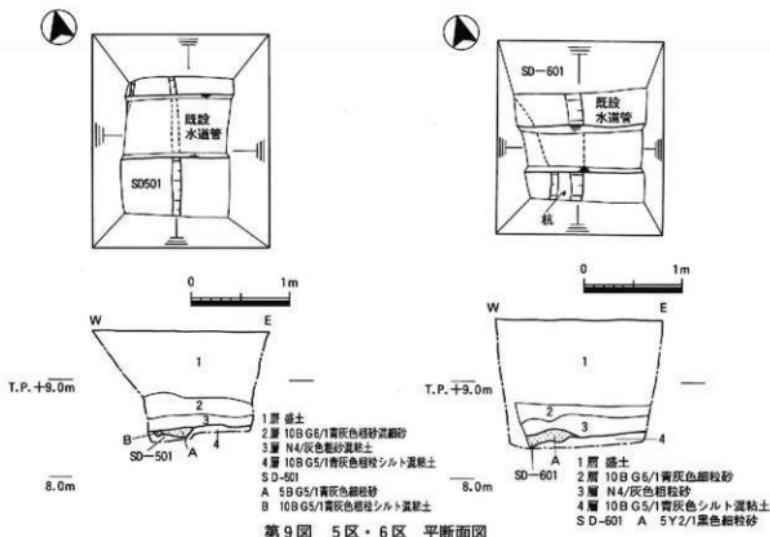
第7図 4区 S P-401出土遺物

## 5区

人孔の調査区で、現地表は約T.P.+9.5mを測る。調査地の中央より北側に東西方向に水道管が埋設されており、現地表下約1.5m前後までは擾乱されていた。堆積土は1~4層を確認した。1層は盛土である。3層からは中世の瓦器、土師器の破片が少量出土した。4層のシルト混粘土層は、北東に隣接している昭和61年度当市教委調査の5層に相当し、古墳時代後期に比定される。



第8図 5区 S D-501出土遺物



第9図 5区・6区 平面図

現地表下約1.0mの4層上面(T.P.+8.5m)で溝1条(SD-501)を検出した。

SD-501は調査区の西側で検出した。南北方向に伸びる。幅は0.45m、深さ0.1mを測る。埋土はA層5B G5/1青灰色細粒砂、B層10B G5/1青灰色粗粒シルト混粘土で、A層からは須恵器の杯蓋(3)が出土した。この杯蓋は、TK43型式壺に比定できる。

#### 6区

人孔の調査区で、現地表は約T.P.+9.65mを測る。調査区中央に東西方向に水道管が埋設されており、現地表下1.5m前後まで擾乱されていた。堆積層は1~4層を確認した。1層の盛土内からは陶器、土師器、須恵器などが出土した。4層からは詳しい時期は不明であるが土師器の壺(4)が出土した。(4)は時期の限定は難しいが弥生時代後期~古墳時代初頭頃の広口壺になるとおもわれる。

現地表下約1.15mの4層上面(T.P.+8.5m)で溝1条(SD-601)を検出した。

SD-601は南北方向に伸び、遺構の北側は若干西側に曲がっている。幅0.35m、深さ0.15mを測る、埋土は5Y2/1黒色細粒砂で、炭が多く含んでいた。瓦質の羽釜と思われる破片が1点出土した。溝の南側中央部には杭が1本垂直に打ち込まれていた。杭は長さ約0.36mで、断面三角形に加工しており、一辺0.05mを測る。先端は削られ尖っている。出土遺物からこの溝は中世の遺構と考えられるが、詳しい時期は不明である。



第10図 6区 4層出土遺物

### 3.まとめ

1区では、周辺調査の結果から、古墳時代～中世にかけての遺構が期待できたが、既設の水道管や水路の埋設工事で削平されていたため遺構の検出はなかった。現地表下2m以下に堆積する16層の砂は、第5次調査地の204層や成法寺遺跡第12次・第14次調査でも検出されており、南北方向にのびる自然河川が存在していたと思われる。

2区～5区では東に隣接している昭和61年度当市教委調査地で検出した古墳時代後期の遺構検面と同一の面が存在していることがわかった。検出した遺構は土坑・溝・小穴で、いずれも6世紀後半頃の須恵器が出土している。6区では、中世の時期に推定できる溝を検出した。

各調査区の規模が小さいため、検出した遺構の形状や規模などの詳細は不明な点があるが、すくなくとも昭和61年度当市教委調査地の南西側にも同時期の遺構が存在していることが判明した。

#### 註記

- 註1 米田敏幸 1987「矢作遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
- 註2 原田昌則 1989「I. 矢作遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告22 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註3 成海佳子 1989「II. 矢作遺跡(第2次調査)発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告22 (財)八尾市文化財調査研究会

#### 参考文献

- ・近江俊秀 1989「14. 矢作遺跡(63-253)」「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告19 八尾市教育委員会
- ・近江俊秀 1989「19. 矢作遺跡(63-078)」「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告19 八尾市教育委員会
- ・森本めぐみ 1999「22 矢作遺跡第5次調査(YH98-5)」「平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋、原田昌則 1991「成法寺遺跡<第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書>」(財)八尾市文化財調査研究会報告33 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一・原田昌則 1996「成法寺遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告51 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ



1区 全景(南から)



1区 東壁面(西から)



1区 下層掘削状況(南から)



2区 全景(南から)



S K - 201(南から)



2区 調査地周辺(南西から)



3区 全景(南から)



4区 全景(南から)



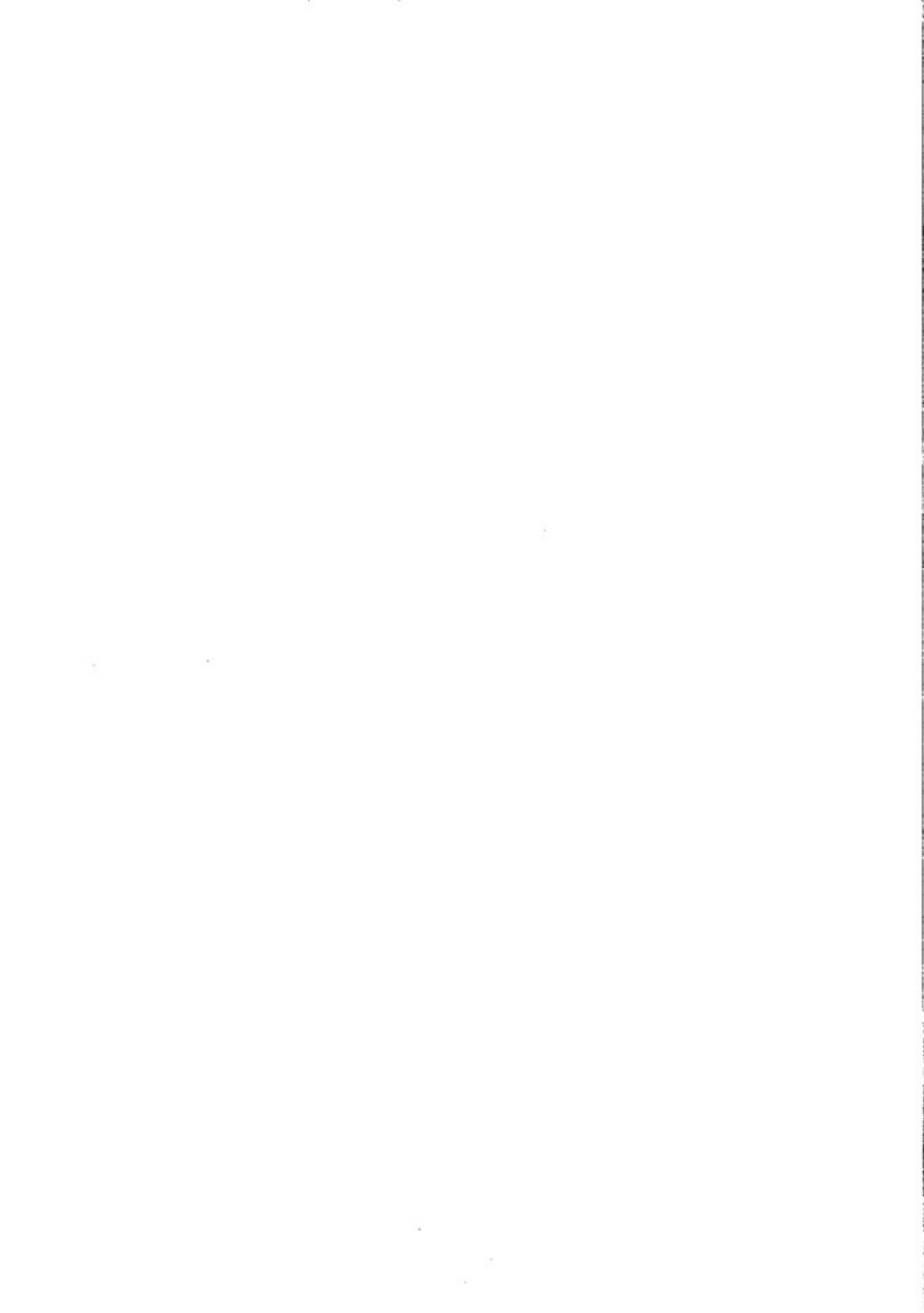
5区 全景(南から)



6区 全景(南から)



S K-201(1)、S P-401(2)、S D-501(3)出土遺物



XVI 山賀遺跡第8次調査（YMG98-8）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市新家町6丁目地内で行われた公共下水道工事（9-48工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する山賀遺跡第8次調査（YMG98-8）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋625-3号 平成10年1月29日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年4月3日～4月15日（実働6日）にかけて森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約23m<sup>2</sup>を測る。現地調査に参加した補助員は以下の通りである。  
市森千恵子・中西明美・西岡千恵子・宮崎寛子（五十音順）
1. 内業整理は現地調査終了後、隨時行い、平成11年8月に終了した。内業整理には上記のほか、岩沢玲子・中村百合が参加した。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

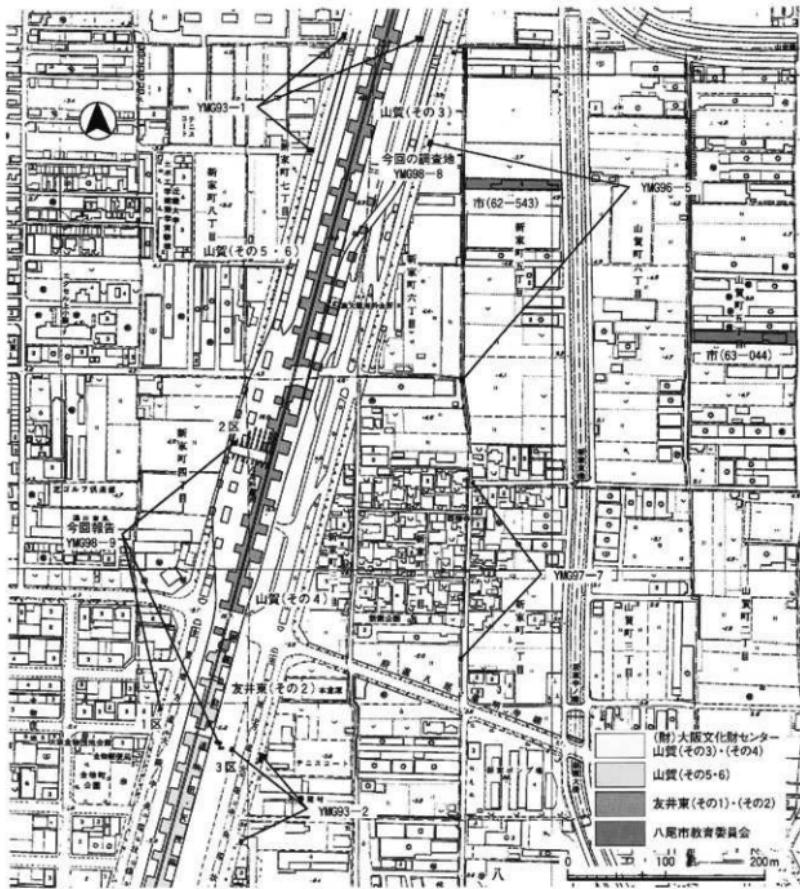
## 本　文　目　次

1.はじめに .....	151
2.調査概要 .....	152
1) 調査の方法と経過 .....	152
2) 基本層序 .....	152
3) 検出遺構と出土遺物 .....	154
3.まとめ .....	154

## XVI 山賀遺跡第8次調査 (YMG98-8)

## 1. はじめに

山賀遺跡は、河内平野のほぼ中央部、旧大和川の主流であった古長瀬川と古玉串川にはさまれた沖積地上に立地する。現在の行政区画では、八尾市北西部の新家町1～8丁目・山賀町1～6丁目、東大阪市若江西新町5丁目・若江南町4～5丁目の東西約0.85km、南北約1.0kmがその範囲と推定されている。



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

山賀遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行われた楠根川改修工事に伴う掘削残土の中から弥生時代前期の土器や石器などが多量に発見されたことによって周知となった遺跡である。その後、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現・(財)大阪府文化財調査研究センター)・東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会などによって多くの調査が行われてきた。なかでも(財)大阪文化財センターによって行われた昭和54~60年の近畿自動車道路建設に伴う調査(『山賀(その1)』~『山賀(その5・6)』)では、縄文時代から現代に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出され、複合遺跡として認識されるようになった。なかでも、弥生時代前期中段階の集落は、河内平野中央部の最古の集落として知られ、農耕の開始とともに定住化を進めた人々の生活を物語る貴重な資料のひとつとなっている。

山賀遺跡では、当調査研究会により7次にわたる調査が実施されている。なかでも、第3次調査(YMG94-3<sup>註1</sup>)では、現地表下約3m前後で弥生時代前期の遺構・遺物が検出されており、『山賀遺跡(その3)』の調査を含めて広範囲に及ぶ集落が想定されるに至っている。

また、山賀遺跡周辺には多くの遺跡が存在し、東に西郡廃寺遺跡、西に小若江北遺跡(東大阪市)、南に美園遺跡、南東に萱振遺跡、北に若江北遺跡(東大阪市)、北西に上小阪遺跡(東大阪市)が位置している。

## 2. 調査概要

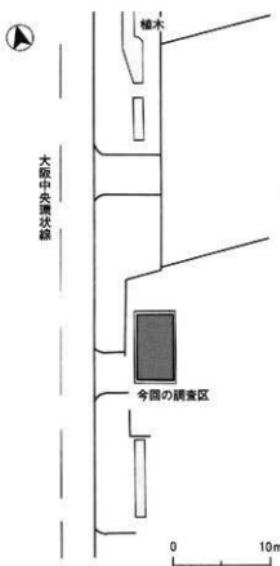
### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事(9-48工区)に先立って実施したもので、当調柶研究会が行った山賀遺跡内での第8次調査にあたる。調柶対象としたのは発進立坑1箇所である。調柶区は南北幅約6.4m、東西幅約3.4m、面積約23m<sup>2</sup>を測る。

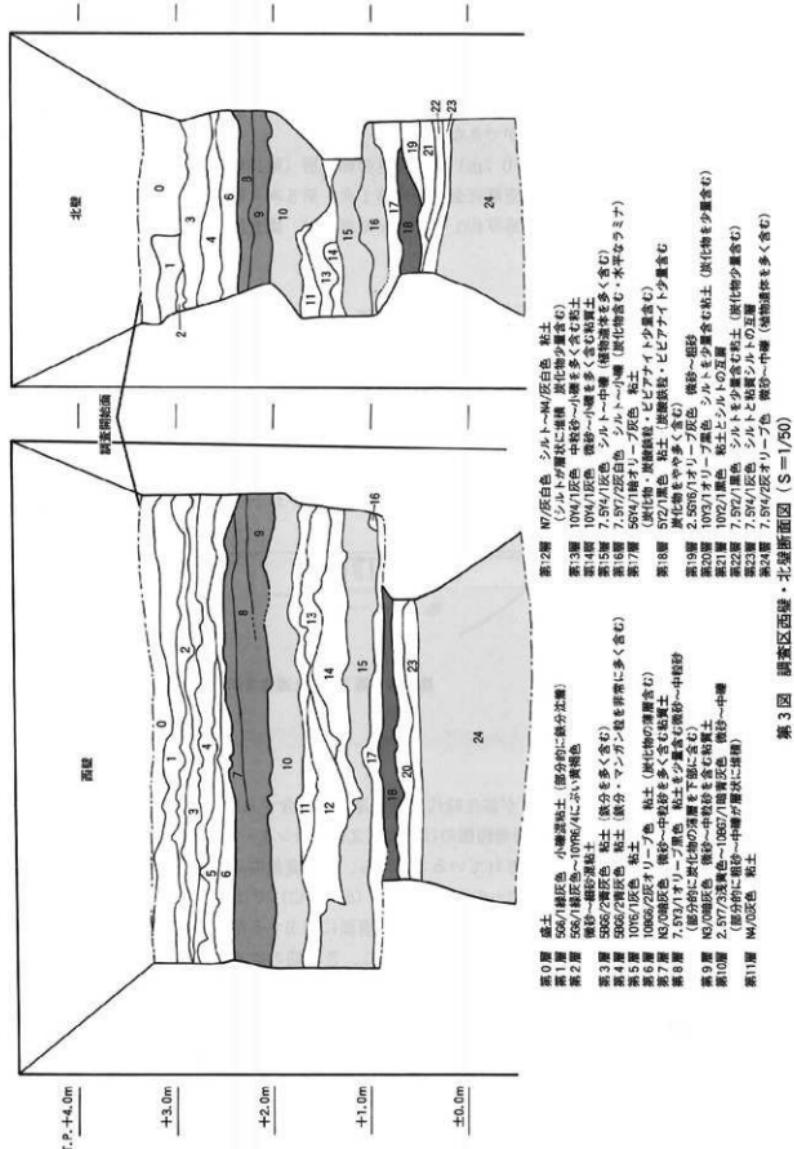
調柶は八尾市教育委員会の埋蔵文化財調柶指示書に従い、表土掘削範囲を1.2m前後、包含層掘削範囲を1.5m以上とし、以下、工事による掘削深度までの調柶を行った。調柶は4月3日から開始したが、現地表面から約1.5mは覆鋼板と1段目の支保工設置のためにすでに掘削されていた。そのため、以下を工事掘削深度である現地表下5.2m(T.P.-0.5m)まで機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。すべての調柶は4月15日に終了した。実働日数は6日間である。

### 2) 基本層序

層序は第3図の通りである。現地表面はT.P.+4.7m前後を測る。分層が一部途切れている箇所があるが、これは機械掘削時の壁面の倒壊などで観察ができなかった部分である。



第2図 調柶区位置図 (S=1/500)



第3 図

調査区西壁・北壁断面図 (S=1/50)

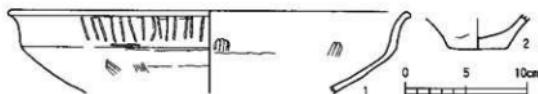
当調査区では現地表下約2.1~2.3m (T.P. +2.6~2.4m) から弥生時代後期の遺物を含む層を確認した。層厚は0.3~0.5mで3層に分かれる(第7~9層)。しかし、掘削時の状況から、遺物は第7層と第8・9層として取り上げた。遺物の出土は第7層からが多く、第8・9層からは小破片しか出土していない。また、第7層上面(一部第8層上面)で平面精査を行い、以下の掘削を行ったが、遺構は検出することができなかった。

また、現地表下約4.0m (T.P. +0.7m) から黒色の粘土層(第18層)を検出した。これは(財)大阪文化財センターの調査や当調査研究会調査の第1次・第5次・第7次調査などで観察されている第1黒色粘土層に相当する。層厚約0.1~0.2mを測るが、調査区北側では安定した堆積状況ではなかった。

### 3) 検出遺構と出土遺物

前述した通り、遺構は検出できなかつたが、第7層~第9層から少量ではあるが遺物が出土した。出土した遺物のうち図化できたのは、第7層から出土した高杯の杯部(1)、壺の底部(2)の2点のみであった。第8・9層からはタタキの入った壺の体部が出土しているが小片であったので図化できなかつた。

(1) は口径32.4cmを測る大型の高杯で口縁部がゆるやかに外反する。内外面ともやや磨耗しているが、内面は粘土紐の接合部分を磨いた跡が部分的に残存している。外面は口縁部を細い縱方向のヘラミガキで調整している。(2) は底部のみであるがおそらく壺の底部であろう。磨耗のためか、調整は内外面ともみられず、粘土紐の接合痕が残存するのみである。いずれも暗褐色で角閃石を含む生駒西麓産の胎土をもち、時期は弥生時代後期のものである。



第4図 第7層出土遺物実測図 (S=1/4)

### 3.まとめ

今回の調査では、少量ではあるが弥生時代後期の遺物を包含する層を確認することができた。遺構は検出できなかつたが、当調査地西側の(財)大阪文化財センターの調査(『山賀(その5・6)』)では弥生時代後期の面が5面検出されていることから、当調査地周辺にも遺構の存在する可能性は高い。また、当調査地南東約100mの市教委調査(62-543)では弥生時代前期の包含層が確認されているが、今回の調査では弥生時代前期の遺構面に相当する第1黒色粘土層を確認できただけであった。その他、第5次・第7次調査同様に、3時期の砂層の堆積(第9層・第14・15層・第23層)を確認できた。それぞれ弥生時代後期、弥生時代中期、縄文時代晩期に相当するとおもわれ、当調査区もそれぞれの時期に自然河川にあたっていたことが判明した。

註記および参考文献

- 註1 原田昌則 1995「31.山賀遺跡第3次調査(YMG94-3)」「平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 近江俊秀 1989「6.山賀遺跡(62-543)の調査」「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I」八尾市文化財報告19 昭和63年度国庫補助事業

- ・中西清人・杉本二郎他 1983「山賀(その1)」(財)大阪文化財センター
- ・森井貞雄・高橋雅子他 1983「山賀(その2)」(財)大阪文化財センター
- ・上西美佐子・西口陽一・宮野淳一他 1984「山賀(その3)」(財)大阪文化財センター
- ・生田雄道・石神幸子・小山田宏一・小林義孝他 1983「山賀(その4)」(財)大阪文化財センター
- ・岸本道昭・田中和弘他 1986「山賀(その5・6)」(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・村上年生編 1987「河内平野遺跡群の動態I」—プロローグ編— 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・成海佳子 1994「IX山賀遺跡第1次調査(YMG93-1)」「X山賀遺跡第2次調査(YMG93-2)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 1998「IX.山賀遺跡第5次調査(YMG96-5)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告61」(財)八尾市文化財調査研究会



調査前風景(南から)



第7層上面



最終状況(北から)



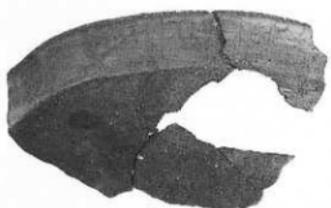
西壁断面(T.P. +3.3~2.0m)



西壁断面(T.P. +2.0~0.9m)



西壁断面(T.P. +0.9~-0.5m)



1



2

第7層出遺物(1・2)

## 言　回

私事「某氏」人或所知「某」者甚多，其地名「某」者，一、某處或某處之某處，二、某處之某處或某處之某處，三、某處之某處或某處之某處，四、某處之某處或某處之某處。

而其遺物為何物？「某」者，某處之某處或某處之某處，五、某處之某處或某處之某處，六、某處之某處或某處之某處。

### III 山賀遺跡第9次調査（YMG98-9）

本年9月1日，山賀遺跡第9次調査（YMG98-9）開始。調査期間，天候晴朗，氣溫適宜，風力較小，土壤濕潤，植被茂密，環境優美。

調査期間，調查組成員在山賀遺跡內進行了全面的調查工作，對遺跡的分布範圍、地質條件、土壤特徵、植被情況等進行了詳細的記錄。

調查期間，調查組成員在山賀遺跡內進行了全面的調查工作，對遺跡的分布範圍、地質條件、土壤特徵、植被情況等進行了詳細的記錄。

調查期間，調查組成員在山賀遺跡內進行了全面的調查工作，對遺跡的分布範圍、地質條件、土壤特徵、植被情況等進行了詳細的記錄。

調查期間，調查組成員在山賀遺跡內進行了全面的調查工作，對遺跡的分布範圍、地質條件、土壤特徵、植被情況等進行了詳細的記錄。

## 大　月　文　本

本年9月1日，山賀遺跡第9次調査（YMG98-9）開始。調査期間，天候晴朗，氣溫適宜，風力較小，土壤濕潤，植被茂密，環境優美。

調查期間，調查組成員在山賀遺跡內進行了全面的調查工作，對遺跡的分布範圍、地質條件、土壤特徵、植被情況等進行了詳細的記錄。

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市新家町4・7丁目地内および東大阪市友井5丁目で実施した公共下水道工事（10-1工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する山賀遺跡第9次調査（YMG98-9）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第240号 平成10年6月26日 指示変更：八教社文第273号 平成10年7月27日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年8月10日～10月30日（実働15日）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。総調査面積は約90.0m<sup>2</sup>である。調査に参加した補助員は以下の通りである。  
市森千恵子・中西明美・西岡千恵子・松本貴匡（五十音順）
1. 内業整理は現地調査終了後、隨時行い、平成11年8月に終了した。内業整理には上記のほか、岩沢玲子・中村百合の参加を得た。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに .....	157
2.調査概要 .....	157
1) 調査の方法と経過 .....	157
2) 各調査区の概要 .....	158
・1区 .....	158
・2区 .....	158
・3-1区 .....	159
・3-2区 .....	159
3.まとめ .....	162

## XVII 山賀遺跡第9次調査 (YMG98-9)

### 1. はじめに

山賀遺跡は、八尾市の北西部と東大阪市の南東部に位置する遺跡である（本報告書参照）。

今回の調査区は八尾市と東大阪市にまたがっている。1区と3区は東大阪市友井に位置しており、近畿自動車道建設に伴う（財）大阪文化財センター調査の友井東遺跡の範囲に含まれている。友井東遺跡は1963年の金物畠地造成工事中に古墳時代の須恵器や土師器、弥生土器などが出土したことから存在が知られるようになった遺跡である。しかし、1963年以降、本格的な調査は行われず、大阪文化財センターが行った近畿自動車道建設に伴う調査まで遺跡の性格は明らかにされなかった。大阪文化財センターによる友井東遺跡の調査（1979～1983年）では縄文時代晚期の自然河川、弥生時代前期の水田面や古墳時代前期の方形周溝墓、奈良時代～平安時代にかけての条里製造構など山賀遺跡同様、活発な沖積作用と共に各時代の遺構・遺物などが検出され、弥生時代前期～近代に至る複合遺跡であることが確認された。

### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（10-1工区）に先立って実施したもので、当調査研究会が行った山賀遺跡内での第9次調査にあたる。調査対象としたのは立坑3箇所で、その内の2箇所（1区・3区）は東大阪市友井5丁目に位置している。調査区は調査を行った順に1区（南西・到達立坑）、2区（北西・発進立坑）、3区（南東・発進立坑）とした。3区は当初予定されていた部分が既に下水道工事によって擾乱されていることが判明したため、八尾市教育委員会からの指示変更を受け、南側の迂回管路（仮管）部分の調査を行うことになった（3-1区）。しかし、本来3区は現地表下6.5mまで掘削する予定であったのが、迂回管路部分の掘削深度は現地表下から5m前後と浅かったため、あわせて立坑部分の下層確認を行うこととなった（3-2区）。そのため、当初の予定では約80.0m<sup>2</sup>であった総調査面積は、約90.0m<sup>2</sup>となった。

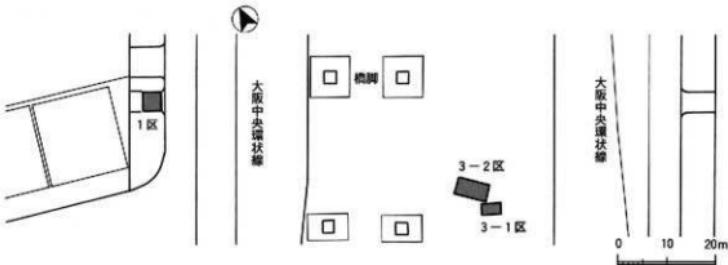
調査の方法として八尾市教育委員会の指示書に従い、現地表下1.5～2.8mまでを機械掘削範囲、以下、1.5m以上を包含層掘削範囲とし、工事掘削深度まで立ち会った。以下、各調査区について経過概要を述べる。

1区は東西幅4.0m、南北幅4.0m、調査面積は16.0m<sup>2</sup>を測る。掘削深度は現地表（T.P.+5.5m）下約6.2m（T.P.-0.7m）である。現地表下約1.0mは覆鋼板設置のため掘削されていた。調査は8月10日から開始し、20日に終了した。実働日数は5日である。

2区は東西幅約6.4m、南北幅6.4m、調査面積は40.96m<sup>2</sup>を測る。掘削深度は現地表（T.P.+4.95m）下約5.0m（T.P.±0.0m）である。覆鋼板設置のためすでに現地表下約1.4mまで掘削されていた。調査は8月24日から開始し、27日に終了した。実働日数は4日である。

3-1区は東西幅約4.2m、南北幅2.4m、調査面積は約10.08m<sup>2</sup>を測る。掘削深度は現地表（T.P.+5.8m）下約4.8m（T.P.+1.0m）である。調査は10月5・6日の2日間で終了した。

3-2区は東西幅約6.4m、南北幅約3.6m、調査面積は約23.0m<sup>2</sup>である。現地表（T.P.+5.8



第1図 調査区位置図（1区・3区）（S = 1/1000）

m前後) 下約4.8mは既設の下水管によって搅乱されていたため、以下、工事掘削深度であるT.P. -0.9mまでの調査を行った。調査は10月26日～30日、実働4日である。

各調査区とも機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

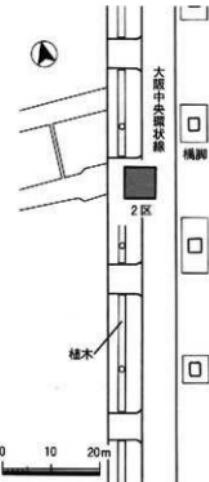
## 2) 各調査区の概要

### 【1区】

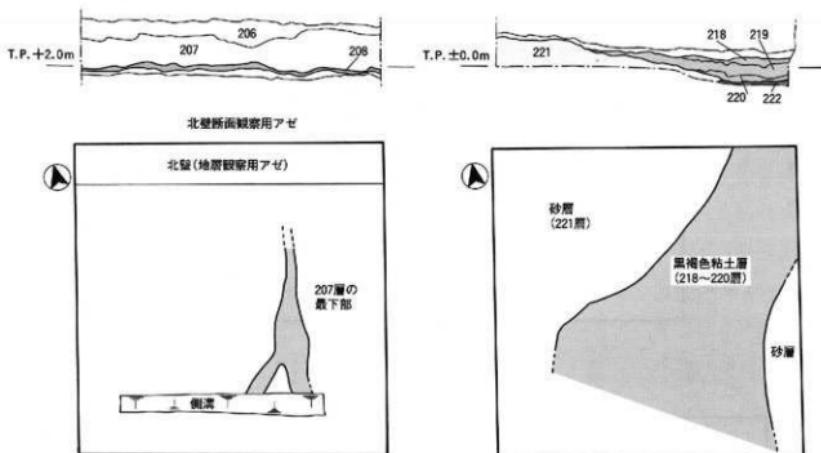
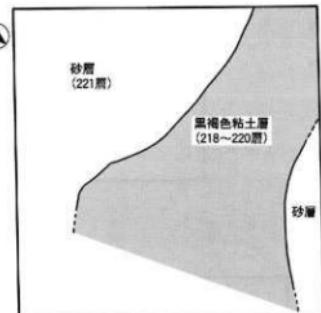
現地表面はT.P. +5.5m前後である。T.P. +0.8m付近で黒褐色粘土層（121層）、T.P. +0.1m付近で青黒色粘土層（127層）を観察した。これらは(財)大阪文化財センターが行った近畿自動車道路建設に伴う調査で広範囲にわたって観察された第1黒色粘土層・第3黒色粘土層に相当する。また、114・115・117・120・131層のシルト～粗砂の流水堆積層も確認した。これらはそれぞれ114～117層・120層・131層と3時期に大きく分けることができる。遺構は検出されず、遺物は101層から瓦と土器の破片が出土したのみである。いずれも小破片のため正確な時期は不明であるがおそらく中世以降のものとおもわれる。

### 【2区】

現地表面はT.P. +5.0m前後である。機械掘削深度はT.P. ±0.0m前後までであったが221層の堆積状況を確認するため北壁沿いの東側の一部をT.P. -0.5mまで掘削した。その結果、T.P. -0.3m付近で黒色粘土層（222層）を確認した。222層も127層と同様、第3黒色粘土層にあたる。2区では206・207、221層と二時期の砂の堆積を確認した。これらを『山賀（その5・6）』の調査成果と照らし合わせると206・207層は弥生時代中期の河川堆積、221層は縄文時代晚期の河川堆積に相当する。また、北壁で断面観察を行ったところ、調査区中央よりやや東よりの部分で207層・208層が落ち込んでいるのを確認した。この落ち込みは207層を掘削した段階で平面的に観察できた（第3図）。207層は南北方向に浅い溝状に落ち込んでおり、これは



第2図 調査区位置図（2区）

第3図 2区 208層上面平面図( $S = 1/100$ )第4図 2区 最終面平面図( $S = 1/100$ )

206・207層の自然河川が南北方向に流れていたことを示すものとおもわれる。また、218～220層は植物遺体を非常に多く含む層で北壁の断面観察の結果から調査区中央から東に向かって落ち込んでいることが判明した。このラインは最終面(T.P. ±0.0m前後)で平面的に確認できた(第4図)。2区での遺構・遺物の検出はなかった。

### 【3-1区】

現地表面はT.P. +6.0～5.7mである。現地表下2.7m (T.P. +3.1m)付近から層厚1.8mにおよぶシルト～粗砂の堆積(313層)を確認した。この層からは湧水が激しく、壁面の崩壊が著しかった。313層は当区から西へ約10mに位置する第2次調査(YMG93-2)で確認された弥生時代中期から後期にかけての河川堆積層(層厚約1.5m)に相当するとおもわれる。

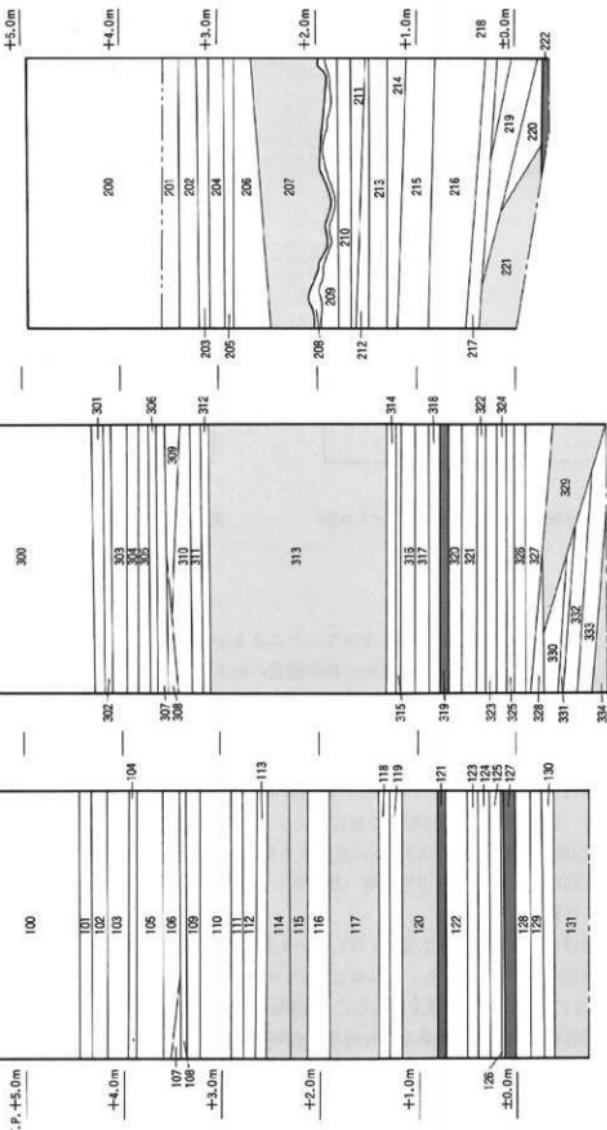
### 【3-2区】

搅乱を受けていないT.P. +1.0mからT.P. -0.9mまでの調査を行った。T.P. +0.8m付近で黒色粘土層(319層)を確認した。これは121層と同じく、第1黒色粘土層に相当する。また、329層・334層と二時期の砂の堆積を確認した。329層は調査区の中央から東にむかって落ち込んでおり、330～332層は植物遺体を多く含む湿地状の堆積を示している。『友井東(その2)』の調査成果と照らし合わせるとT.P. -0.6～-0.4m付近から縄文時代晚期以前とされている砂層が検出されており、329層はこの砂層に相当するものとおもわれる。3-1区・3-2区とも遺構・遺物の検出はなかった。

## 1区(西段)

## 3区(北段)

## 2区(东段)



3区		10744/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)	10635/1海緑色、微細シルト (上層に枯れ植物、田舎土)
101	10616/1海緑色、粘質シルト (底分多く、マングル根少含む)	301 10744/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)	301 10635/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)
102	5671/1オリーブ色、シルト混粘土 (底分多く、マングル根や藻含む)	302 5GS/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)	302 5GS/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)
103	7.5/4.4海緑色、微細シルト混粘土 (底分多く、マングル根少含む)	303 2.4Y/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)	303 2.4Y/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)
104	10704/1海緑色、シルト混粘土 (底分多く、マングル根少含む)	304 10744/1海緑色、シルト (底分多く、マングル根多く含む)	304 10744/1海緑色、シルト (底分多く、マングル根多く含む)
105	5/2.9/1海緑色、シルト (底分多く、マングル根少含む)	305 2.85Y/1海緑色、粘質シルト (底分多く、マングル根多く含む)	305 2.85Y/1海緑色、粘質シルト (底分多く、マングル根多く含む)
106	5/3.6/3海緑色、粘質シルト (底分多く、マングル根少含む)	306 10744/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)	306 10744/1海緑色、微細シルト (底分多く、マングル根少含む)
107	10745/1海緑色、シルトブロックを含む粘質シルト (底分多く、マングル根少含む)	307 10745/3/1海緑色、粘質シルト (底分多く、マングル根少含む)	307 10745/3/1海緑色、粘質シルト (底分多く、マングル根少含む)
108	10745/1海緑色、シルト混粘土 (底分多く、マングル根少含む)	308 10745/1海緑色、シルト (底分多く、マングル根少含む)	308 10745/1海緑色、シルト (底分多く、マングル根少含む)
109	108/1海緑色、シルト混粘土 (底分多く、マングル根少含む)	309 5/2.5/2オリーブ色 (底分多く含む)	309 5/2.5/2オリーブ色 (底分多く含む)
110	5/6/5/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	310 1064/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	310 1064/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
111	2.5/2/1/1海緑色、微細シルト (底分多く、中含む)	311 1065/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	311 1065/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
112	106/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	312 1065/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	312 1065/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
113	5/2/0/1/1海緑色、シルト混粘土 (底分多く、中含む)	313 (Fミナ)青 (底分多く含む)	313 (Fミナ)青 (底分多く含む)
114	107/5/1海緑色、シルト (底分多く、中含む)	314 107/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	314 107/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
115	107/5/1海緑色、シルト (底分多く、中含む)	315 107/2/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	315 107/2/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
116	107/2/1海緑色、シルト (底分多く、中含む)	316 2.5/7.5/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	316 2.5/7.5/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
117	2.5/6/1/1海緑色、シルト (底分多く、中含む)	317 2.5/7.5/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	317 2.5/7.5/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
118	5/2/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	318 106/1/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	318 106/1/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
119	106/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	319 N/2/1海緑色 (底分多く含む)	319 N/2/1海緑色 (底分多く含む)
120	5/7/5/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	320 5/0/3/1オリーブ色、粘土 (底分多く含む)	320 5/0/3/1オリーブ色、粘土 (底分多く含む)
121	2.5/3/3/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	321 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	321 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
122	2.5/0/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	322 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	322 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
123	2.5/2/0/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	323 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	323 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
124	5/7/2/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	324 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	324 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
125	7.5/6/1海緑色、シルト (底分多く、中含む)	325 5/0/3/1オリーブ色、粘土 (底分多く含む)	325 5/0/3/1オリーブ色、粘土 (底分多く含む)
126	107/4/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	326 107/6/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	326 107/6/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
127	5/6/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	327 5/3/2/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	327 5/3/2/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
128	5/6/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	328 5/5/2/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	328 5/5/2/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
129	5/14/2/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	329 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	329 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
130	7.5/3/1/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	330 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	330 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
131	7.5/7/2/1/1/1海緑色、粘土 (底分多く、中含む)	331 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	331 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
		332 5/3/2/1/1/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	332 5/3/2/1/1/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
		333 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	333 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)
		334 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)	334 2.5/7/3/1海緑色、粘土 (底分多く含む)

第5図 層序模式図(S = 1/50)

### 3.まとめ

今回の調査では1区から瓦と土器の小破片が出土したのみで各層を位置付けられる遺構・遺物の検出はみられなかった。しかし、各調査区とも数度の砂層堆積がみられ、縄文時代晚期以前から弥生時代後期にかけて、既往の調査成果と同様、当調査区周辺での活発な沖積作用を観察できた。特に弥生時代中期に相当する河川堆積は層厚1.0mを超え、大阪文化財センターが報告している山賀遺跡内の集落が一時期廃絶した時期のものとおもわれる。

また、(財)大阪文化財センターが実施した近畿自動車道建設に伴う調査・山賀遺跡(その1)～山賀(その5・6)、友井東(その1)・(その2)などで確認された弥生時代前期の遺構面となる第1黒色粘土層(121層・319層)と縄文時代晚期に第3黒色粘土層に比定される(127層・222層)を確認することができた。

### 参考文献

- ・中西靖人・杉本二郎他 1983『山賀遺跡(その1)』(財)大阪文化財センター
- ・森井貞雄・高橋雅子他 1983『山賀遺跡(その2)』(財)大阪文化財センター
- ・上西美佐子・西口謙一・宮野淳一他 1983『山賀(その3)』(財)大阪文化財センター
- ・生川義道・石神幸子・小山田宏一・小林義孝 1984『山賀(その4)』(財)大阪文化財センター
- ・岸本道昭・田中和弘 1986『山賀(その5・6)』(財)大阪文化財センター
- ・亀島重則・阪田育功他 1984『友井東(その1)』(財)大阪文化財センター
- ・生川義道他 1983『友井東(その2)』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・村上千生編 1987『河内平野遺跡群の動態I』—プロローグ編— 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・成海佳子 1994「Ⅸ 山賀遺跡第1次調査(YMG93-1)」「X 山賀遺跡第2次調査(YMG93-2)」(財)八尾市文化財調査研究会報告43】(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 1996「Ⅺ 山賀遺跡第5次調査(YMG96-5)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告60」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 焕 1998「28 山賀遺跡第6次調査(YMG97-6)」「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・古川晴久 1999「Ⅹ 山賀遺跡第7次調査(YMG97-7)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告62」(財)八尾市文化財調査研究会



1区 西壁断面(T.P.+4.5~−3.1m)



1区 西壁断面(T.P.+0.6~−0.2m)



1区 西壁断面(T.P.+3.0~−1.5m)



1区 西壁断面(T.P.+0.2~−0.7m)



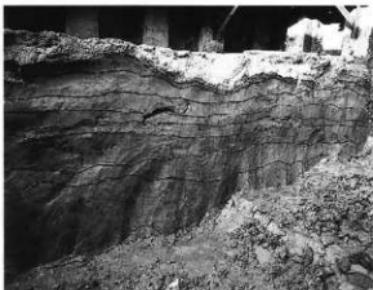
1区 西壁断面(T.P.+1.5~−0.2m)



1区 最終状況(北から)



2区 調査前状況(西から)



2区 北壁断面(T.P. +2.2~0.8m)



2区 北壁断面(T.P. +3.6~2.2m)



2区 北壁断面(T.P. +1.0~±0.0m)



2区 第1層断面(南から) 208層上面



2区 最終状況(西から)



3-1区 北壁断面(T.P.+5.2~3.5m)



3-2区 北壁断面(T.P.+1.4~0.3m)



3-1区 北壁断面(T.P.+3.5~3.0m)



3-2区 北壁断面(T.P.+0.4~-0.9m)



3-1区 北壁断面(T.P.+1.6~1.0m)



3-2区 最終状況(東から)

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく65							
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告 65							
調査名	I 跡部遺跡 (第28次調査) IV 福松遺跡 (第7次調査) VI 亀井遺跡 (第8次調査) X 太子堂遺跡 (第9次調査) 加 中田遺跡 (第43次調査) 荘 山賀遺跡 (第8次調査)							
II 跡部遺跡 (第29次調査) V 田代遺跡 (第3次調査) VII 心合寺山古墳 (第3次調査) XI 田井中遺跡 (第18次調査) XV 大作遺跡 (第5次調査) XIII 山賀遺跡 (第9次調査)	III 跡部遺跡 (第30次調査) VI 亀井遺跡 (第7次調査) IX 成法寺遺跡 (第17次調査) XI 中田遺跡 (第42次調査) XVII 大作遺跡 (第6次調査)							
卷次								
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告							
シリーズ番号	65							
編著者名	I・III・題・原・瀬、題森本めぐみ、II・VI・岡田清一、IV・IX・X・高萩千秋、VI・VII・X・成海佳子、V・XIV・西村公助、VII・坪田真一、VIII・猪口薰							
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会							
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所取遺跡名	所 在 地	コ 一 ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
跡部遺跡 (第28次調査)	大阪府八尾市 跡部本町4丁目地内	27212		34度 36分 55秒	135度 34分 58秒	19980629～ 19980706	19.2	公共下水道
跡部遺跡 (第29次調査)	大阪府八尾市 跡部本町1丁目 4番16～35	27212		34度 36分 51秒	135度 34分 14秒	19980729～ 19980801	15	公共下水道
跡部遺跡 (第30次調査)	大阪府八尾市 跡部本町4丁目地内	27212		34度 36分 45秒	135度 35分 58秒	19990120～ 19990127	31.2	公共下水道
福松遺跡 (第7次調査)	大阪府八尾市 水畠町2丁目 15-2	27212		34度 36分 37秒	135度 35分 53秒	19981019～ 19981029	34	公共下水道
太田遺跡 (第3次調査)	大阪府八尾市 太田2・3丁目地内	27212		34度 35分 15秒	135度 35分 37秒	19980610～ 19990319	71	公共下水道
亀井遺跡 (第7次調査)	大阪府八尾市 亀井町3丁目地内	27212		34度 36分 51秒	135度 34分 49秒	19980717～ 19980902	4	公共下水道
亀井遺跡 (第8次調査)	大阪府八尾市 亀井町4丁目地内	27212		34度 36分 35秒	135度 34分 54秒	19990323～ 19990326	48	公共下水道

所取遺跡名	所 在 地	コ 一 ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
心合山古墳 (第3次調査)	大阪府八尾市 大竹5丁目地内	27212		34度 38分 09秒	135度 36分 34秒	19981225～ 19990120	39.2	堤体改修工事
成法寺遺跡 (第17次調査)	大阪府八尾市 光南町2丁目54	27212		34度 37分 11秒	135度 36分 09秒	19980910～ 19980917	49	防火水槽設置
太子堂遺跡 (第9次調査)	大阪府八尾市 筒太子堂3丁目地内	27212		34度 36分 30秒	135度 35分 21秒	19990113～ 19990228	54.4	公共下水道
田井中遺跡 (第18次調査)	大阪府八尾市 田井中4丁目地内	27212		34度 35分 47秒	135度 36分 29秒	19980529～ 19980630	42	公共下水道
中田遺跡 (第42次調査)	大阪府八尾市 中田4丁目地内	27212		34度 36分 34秒	135度 37分 27秒	19980410～ 19980527	40	公共下水道
中山遺跡 (第43次調査)	大阪府八尾市 中田2丁目地内	27212		34度 36分 55秒	135度 37分 19秒	19981203～ 19981211	20	公共下水道
矢作遺跡 (第5次調査)	大阪府八尾市 高美町3丁目地内	27212		34度 37分 05秒	135度 36分 41秒	19980514～ 19980529	24	公共下水道
久作遺跡 (第6次調査)	大阪府八尾市 高美町3丁目地内	27212		34度 37分 03秒	135度 36分 38秒	19990403～ 19990415	23	公共下水道
山賀遺跡 (第8次調査)	大阪府八尾市 新家町6丁目	27212		34度 38分 48秒	135度 36分 01秒	19980826～ 19980904	140	公共下水道
山賀遺跡 (第9次調査)	大阪府八尾市 新家町4・7丁目 地内	27212		34度 38分 28秒	135度 35分 50秒	19980810～ 19981030	90	公共下水道
所取遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
跡部遺跡 (第28次調査)	集落	平安時代・近世	小穴1・井戸1	土師器				
跡部遺跡 (第29次調査)	集落	古墳時代初期		土師器		大型の壺については土器棺の可能性がある。		
跡部遺跡 (第30次調査)	集落	弥生時代前期～平安時代	自然河川			古平野川に周連した砂層堆积を確認。		
植松遺跡 (第7次調査)	集落	古墳時代後期～平安時代前期	土坑1・溝1	土師器・須恵器・黑色土器・土馬				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田遺跡 (第3次調査)	集落	古墳時代後期・平安時代中期	水田・溝1・河川	土師器	
龜井遺跡 (第7次調査)	集落	弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代後期	河川1	弥生土器・土師器・須恵器	古平野川に開削した堆積を検出。
龜井遺跡 (第8次調査)	集落				古平野川に開削した堆積を検出。
心合寺山古墳 (第3次調査)	古墳	近世	樋2・土坑1	弥生土器・土師器・埴輪・瓦器・瓦質土器・陶磁器・煙管・釘・砥石	心合寺山古墳西周濠(新池)の堤体部分の測定。
成法寺遺跡 (第17次調査)	集落	古墳時代前期・近世	井戸1	土師器	井戸側に「武番」「參番」の墨書きあり。
太子堂遺跡 (第9次調査)	集落	古墳時代前期～平安時代		土師器	
田井中遺跡 (第17次調査)	集落	弥生時代前期・平安時代末期～鎌倉時代前期	河川・水田		
田井中遺跡 (第18次調査)	集落	弥生時代前期～中期	小穴2・落ち込み1	弥生土器・石包丁	
中田遺跡 (第42次調査)	集落	古墳時代中期	落ち込み2	弥生土器・土師器・須恵器・埴輪類	S O 1は古墳の周溝部分の可能性が高い。
中田遺跡 (第43次調査)	集落	近世	竹製の晴糞		
矢作遺跡 (第5次調査)	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	土坑1・小穴1・杭	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器	
矢作遺跡 (第6次調査)	集落	古墳時代後期～中世	土坑1・溝2・小穴1	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器	
山賀遺跡 (第8次調査)	集落	弥生時代後期	自然河川	弥生土器	
山賀遺跡 (第9次調査)	集落	縄文時代晚期 弥生時代中期～後期	自然河川	瓦	

## 財団法人八尾市文化財調査研究会報告65

- I 跡部遺跡（第28次調査） X 太子堂遺跡（第9次調査）  
II 跡部遺跡（第29次調査） XI 田井中遺跡（第18次調査）  
III 跡部遺跡（第30次調査） XII 中田遺跡（第42次調査）  
IV 植松遺跡（第7次調査） XIII 中田遺跡（第43次調査）  
V 太田遺跡（第3次調査） XIV 矢作遺跡（第5次調査）  
VI 亀井遺跡（第7次調査） XV 矢作遺跡（第6次調査）  
VII 亀井遺跡（第8次調査） XVI 山賀遺跡（第8次調査）  
VIII 心合寺山古墳（第3次調査） XVII 山賀遺跡（第9次調査）  
IX 成法寺遺跡（第17次調査）

発行 平成12年3月  
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581-0821

人阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 (株)近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>

